
smile

刃下

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

smile

【Zマーク】

N8717Y

【作者名】

刃下

【あらすじ】

絵本作りに奮闘する弟と姉の話

説明文 / 話題（前書き）

完全にフィクションです。実在しているものとは関係ありません。

説明と一話題

教科書、手紙、離婚届、その他多くの紙媒体が電子媒体へと移行し始めたのは、まだまだごく最近のこと。某国のお偉方が頭をひねりにひねつて打ち出した資源保全の政策。

その名を「ADMP（all digital media plan）」。

アルファベットを4文字並べてかつこよく見せようとしているのがバレバレだが、要するに木で作った紙に頼らずに、デジタルデータに何でもかんでも保存しちゃおうよってなところである。某国で十数年前に採択され可決。その二年後に施行されている。わが国でも追従するような格好で、近年採用が決まった。本屋や郵便局の反対もむなし、今や多くのユーザーが日常生活で電子媒体を使用している。

とはいっても、未だに商店街を歩けばいかにも年季の入った本屋にだって遭遇するし、中には「そんなの知ったこっちゃねえ。私は紙を使うんだ」とて人もいたりする。それも当然といえば当然の事だ。

絵本。

これもまた当然の如く、時代の呻りを受け電子媒体への移行をはじめている。なんとかpadやなんとかphoneを使えば世界中の絵本をいつでも、どこでも読むことができるようになった。もちろんのこと文字は日本語に翻訳されていて、値段も紙媒体の半分以下の値段で購入することが出来る。

このように「・・・むがつ。・・・ふう。あー、そこの君、そう君だ。

君が子供の頃、お気に入りの絵本があったか？今でも内容を覚えているような素敵な絵本があつたんじゃないかな？

そのお話をだ。つるつるの四角い電話だか、パソコンだかなんだ

か分からぬ物を通して読むのは味氣ないと思わないか？

紙本来の手触り、次のページをめくる時のわくわくが感じられないと思つだろ？

どうだ、寂しいだろ。寂しいと思つた君は今すぐにYUHカンパニーが出版してい・・・もがつ。

ちよつと、姉さん勝手なことしないでよ！・・・といつ訳でこんなご時世だらうと負けずに紙媒体で絵本を作り続けている僕らYUHカンパニー。これはその絵本作りの記録である。

「大和一、まだ着かないのかよー」

さつきまで後部座席でぐーすかと気持ち良さそうな寝息をたてていた女がいつの間にか目を覚ましていた。顔にキャラクターの描かれたタオルをかけ、両足を助手席の肩の部分にのせている。脱ぎかけの靴下、着ている服もしわくちゃ、へそは丸出し。これを女性と表記していいものか迷うぞ。

「まだだよ、うめ姉さん」

「まーだーかーよー、こーらーんーやーまーとー」

「もう少しだよ、湖蘭梅姉さん」

「次フルネームで呼んでみる。足の指を4本にしてやるからな」

姉さんは僕がバックミラーに目をやるよりも早く起き上がり、低いドスの聞いた声で僕を脅した。

「はい・・・ごめんなさい・・・」

姉さんは自分の名前が嫌いという訳ではない。自分の名前をフルネ

ームで呼ばれることが何よりも嫌いなだけだ。小学生時代、信じ難いことに姉さんがいじめられていた時期があつたそうだ。クラスの男子グループに『飯ウメー』と呼ばれてよく泣かされていたらしい。

湖蘭 梅 こらん うめ ごはん ウメー
・・・すごいセンスだ。

「この車がポンコツで遅いからまだ着かないんだろう? はっはっはっ

そう言つて姉さんはポテトチップスの袋を豪快に開け、ボリボリと貪り始める。食べカスが落ちてるよ・・・ああ、そんな手で車の窓を触らないで・・・僕の思いなんてちつとも考えない姉さんはまるで自分の部屋かのように、僕の愛車を汚しはじめる。
僕は常々思つていた。

生まれたのが早いからつて何をやつてもいいのか。

一枚払つて買ったこの車。自動車屋さんの前を通つた時にビビビッときたんだ。あれは一目惚れ、いやもしかしたらあれを運命と呼ぶのかもしない。その運命の相手を姉さんと言えども汚すことが許されるだろうか、いや絶対に許されない。僕は戦うぞ、愛車を守るために!

・・・・・まあ、中古車だけだ。

免許をとつて、これが生まれて初めての大きな買い物だつたんだ。それが姉さんの『弟の物は私の物』というジャイアニズムによつて汚されていく・・・悔しい・・・けど感じちゃう。
ほどのMでもないので、普通に悔しい。

車の前後に張つた若葉マークが燐然と光り輝いていた。

「山道の運転は緊張するんだから、姉さんは少しは静かにしてよ」「山はいいけど、キャストの手配はできてんだろうな？」

ははっ、会話が繋がつてないだろ？姉さんは僕の発言なんて最初の一文字しか聞いてないんだぜ。

もう慣れたぞ。

「うん、ちやんと現地集合で呼んだよ。それに木の刈れる山と桃の流せる川のある場所には今向かってる。万事大丈夫さ。」

それでわざわざそこな糞遠い場所まで運転せりゃねるはめになつた。

「それならいいけど……もし何かミスがあれば……」

「……あれば……？」

「お前の体で支払つてもらうからな。」

姉さんは後部座席から頭を乗り出すと、僕のほっぺたを舐めながら言った。

I | 領域 (機能)

全部フイクショーンです。全部関係あつません。

「姉さん、もう着くよ」

ポテトチップスの袋に片手を突っ込んだまま、文字通り食い倒れた状態で一度寝をかましている姉さんを僕はバックミラー越しにどうにか起こそうとする。姉さんは一瞬だけ薄目を開けた後、すぐくめんどくさそーな顔になつた。んんーっと怒鳴るような声を撒き散らし、それでも起きない姉さんは寝返りを打った拍子に持っていた袋の中身を座席の下にぶちまけた。

「なんてことするんだよ、そこは掃除をするのが大変な場所なんだぞー！」

「つるへーなー、声がでかいぞ。手が滑つただけだろ」

「嘘つけ、わざとやつたんだる。姉さんはいつもそうだ。自分で掃除した事がないからそんなことができるんだよ。だいたい姉さんの部屋だつて僕が掃除しなきゃ」

「はいはい、うるさいうるさい。わざとやつたよ、私が悪かった。これでいいか？」

姉さんはぶつとほっぺたをむくらませた。バックミラーに映る怒られた子供がショунとなつてしまつた時のよつた顔。こうこう子供っぽいところは可愛いのになあ。何というか、人によつては守つてあげたい衝動に駆られたりするのだろう。

故に我が姉ながら非常に残念である。なぜなら姉さんの場合、精神年齢とわがままのレベルまでもが子供と同じだと云つ事だ。一言で言えば姉さんは内面が糞ガキ以下だ。

「存知だらうか。

歯磨き粉が携帯食にもなるんだと言ひ事を。

これは噂でも都市伝説でもサバイバルの知識でもない。

それはある日の出来事だった。

「うわあ・・・まじかよ・・・」

「はつはつはつ、面白いな」いつ

弟が自分用にと買つてきたせんべいを姉が一人で食べ、弟が注いだ二つの湯飲みのお茶を姉が一つとも飲み干す。どこにでもある一家団欒の風景だ。テレビでは男のお笑い芸人が女性タレントの口紅を食べるという一芸を披露している。

「あんなものよく食べるよね、この後絶対お腹壊してると思つよ。
いくらお腹が空いても絶対真似しちゃ駄目だからね、姉さん」

「むつ、言つてくれるじゃないか・・・でもこれはこれでござい特技だと思わないか?」こつは山で遭難しても口紅があれば生きていけるんだぞ。他のやつは食べるものがなくなつて一人、また一人と死んでいく中、こつだけは口紅を食べて生き残れるんだ。尊敬するなー」

「やつてることは人として最低なんだから、尊敬しちゃ駄目だよ姉さん」

そもそも食料を持たずに口紅を持つて遭難する事なんてあるだろうか。すると姉さんは手に持つていたせんべい一枚ぱりっと噛み砕くと、少し考えて呟いた。

「口紅が食べられるなら・・・歯磨き粉だつて食べられそうだよな
「じ、じ、じ、じつかなあ」

そのとき僕はすでにペソントきていた。ああ、僕はこの後歯磨き粉を食べなきゃいけないんだ。

「見たいなー、歯磨き粉を食べると」ひい

姉さんの言つてる見たいなーとはつまりやれとこう事である。姉さんは立ち上がり洗面所にあつた開封したばかりの歯磨き粉を手に突つてきた。

「やわら、ぐぐうとこひきだじひい

「全部ー。」

姉さんがどうぞどうぞとジョースチャーで勧めてくる。

「今、大和は遭難してお腹が減つてゐるんだぞ。たくさん食べなきゃ死んじゃつぞ?」

「でもほり、遭難してゐるなら節約しないと。こつ救助が来るか分からぬいし」

「いいから飲め」

その日は下痢が止まらなかつた。

「おー、前見る、前

姉さんの呟き声でさつと我に返った。いつの間にか田の前に急カーブが迫ってきていた。どうやら悲しい記憶を思って出してこぬつむてトリップしていたようだ。慌ててハンドルをさす。

「勘弁しろよなー」

大きくなため息をついて姉さんは座席の背もたれに倒れこんだ。

「い、いわん」

「これは山の中。カーブを曲がり損ねれば崖下にまつとかさまだ。姉さんが叫ばなければ、本当に遭難するところだつた。危ない危ない。

「んー、まあいいけど。しつかり運転しろよ。・・・じやあ姉さんはまた寝るから」

そつ言つておもむりに座席をかたむける姉さん。まだ寝る気か。寝る子は育つてか。これ以上育つてもうつと困るんだが。主に食費とか食費とか食費とか。

「ちよつと姉さん、もつ着くつしませ」

「んー、あー、・・・ぐう」

「の野郎。

「起きて、起きてよ姉さん

「つづーあー、つづー、梅ヶやんクイーズ！パンはパンでも食べられないパンつてなーんだ」

いきなりの事で驚いただろ？」「もつとも、もつとも。驚かないやつはどじうかしてるよ。説明するところは一分一秒でも長く寝ていたい姉さんが編み出した作戦である。相手（主に姉さんを起こしに行く僕）にクイズを出して相手が答えるまで、寝ていられる時間を稼ごうってな作戦だ。ちなみに出題パターンは約3パターンしかないが、答えは無限大にある。本人曰く頭の中が眠っているからクイズはとっさに出てくるだけらしい。

「フライパン」
「ぶつぶー」
「パンダ」
「ばずれー」
「パンツ」
「ちーがーうー」
「着いたよ」

サイドブレーキを引いて、エンジンを切った。運転席から降りると、後部座席に回つて姉さんを振り起こす。

「で、結局正解はなんだつたの？」

「正解はなし。食べられないパンなんてこの世には存在しない。つまり沈黙が正解」

「沈黙してたらいつまでたつても起こせないだろ、馬鹿」

僕は寝ぼけたままの姉さんを引きずりながら山の中にぽつんと建つ古ぼけた民家へと向かった。

III. 説明 (説明文)

全部フイクショーンです 全部関係あつません

舗装のされていないでこぼこ道を車で登ること一時間弱、森の少し開けた場所にぽつんと一軒家が建っていた。渡されていた鍵で錠を開け、少し重たい引き戸を通して家の中に入る。中は光が差し込まず、薄暗かった。僕は窓のついたてをはずし、部屋の中に日光を入れる。

建てられてから何年の月日が経つのだろうか。土壁は所々はがれていて、いかにも昔の木造の家という感じ。建っていたというよりは忘れ去られていたという表現が似合いそうな、そんな雰囲気だ。文化財にでも指定されていそうな外見だが、一年前まではちゃんと人が住んでいたらしい。前に住んでいた老夫婦は、一人揃って老人ホームへ転居が決まり、老夫婦の息子が取り壊すのはもったいないと、管理しながらこじらせてドラマの撮影会社や、僕らみたいな物好きに安く貸し出している。

「うひゃー、今にも崩れそうだな。地震に耐えられるのか？」

そういうふた情緒が全く理解できない姉さんは早速土壁のはがれかけた場所をほじくり、シロアリの如く古民家の破壊を始めていた。

「姉さん、崩れたらしゃれにならないからあんまり触っちゃ駄目ですよ。」

働かない姉を他所に、僕は車から荷物やら小道具やらを運び出す作業にかかつた。

作業をはじめて30分ほど。ドラマの撮影で何度も使用されていたからだろうか。部屋は少しホコリが積もっている程度で、十分に綺

麗な状態だった。

「おーい、大和ー。ポテトチップスの袋捨てたいんだけど、ゴミ箱ないのかー？まあいいや、そちらへんに捨てとくか

ちゅうどまさに、我が姉に汚されるまではゴミ一いつ落ちていなかつた。

「姉さん、ゴミは袋にいれてよ。持つて帰るから
「え、何で持つて帰るんだよ。捨てるべきじゃん」

そう言って姉さんは土壁の崩れた場所にお菓子の空き袋を詰め始めた。僕はいけない事だと思いつつもその光景をぼーっと眺めながら、どうか姉さんの馬鹿力で壁が崩れませんようにと祈るだけだった。姉さんに昔、プロックの壙と壙の間に無理やり詰め込まれて抜けなくなつたあげくレスキュー隊を呼んだ時のトラウマが襲つてくるも、それを間一髪のところで拭い去る。

(しうがないから、後で僕が取り出して捨てるおこづ。)

「おじやま、しますよ」

玄関の引き戸がゆっくりと開いた。

「えっと、来音さんですよね？今日からよろしくお願ひします」

僕は戸の向こうに立っていた老人一人に頭を下げる。

「ひづれじや、おねがい、いたします」

おばあさんはそう言って深々と頭を下げ、おじいさんもつられて頭を下げる。

「じいちゃんばあちゃん、今日はよろしくな

大手を振り上げて姉さんが挨拶をしたところ、またも戸の向こうに来訪者が現れた。

「自分、岩雄です！今日はよろしくおねがいします！」

この静かな土地とはミスマッチなほど声の大きい青年が帽子を脱いでお辞儀をした。見たところ僕と年齢は同じくらいかな、だが身長は僕なんかより随分と大きい。

（岩雄くんか・・・主人公役の人だつたかな？）

「あの、お兄さんのお名前教えてもらつてもいいですか？」

岩雄くんは体が大きく、ただでさえ声が大きいため、僕は一瞬ぎょっとしてしまった。

「僕ね、僕は湖蘭大和。後でもう一度しつかり紹介するけど、今は名前だけ。あつちは梅さんで、こちらが来音さん夫妻

「みなさん、今日はよろしくおなじやす！」

とても元気のいい青年だ。スポーツマンつて感じで爽やか。こちらまで元気になつてくる。

しかしながら姉さんの顔が曇っていた。

「おい、猿。こつちーい」

うお、なんて直球な。

岩雄くんは何事もなかつたように、はいと気持ちのいい返事をして嬉しそうに姉さんに近づく。

岩雄くんの顔はこう言つてはなんだが、主人公の顔つて感じとは違う気がする。なんていうか、そう。姉さんの言葉を借りれば顔が猿っぽいのだ。

いや、もう・・・これは猿だ。

こればっかりは派遣した会社の選択なので、来てしまつた今どういう言つてもしようがないのだが、履歴書の顔とあまりに違はずぎてだいぶ行く先が不安になつてくる。

「・・・・」

姉さんは猿に、いや岩雄くんに耳打ちする。猿くん、いや岩雄もその後、姉さんに耳打ちした。

「あー・・あつはつは。分かつた分かつた。そういうことなら大丈夫だ。あつはつはつは」

姉さんは何かに納得すると大笑いしながら部屋の外に出て行つた。いつたい何だつたんだろう。

そういうしている間に、時計の針はもつすぐ正午を刺そうとしていた。日が暮れないうちに撮れるところまで撮りたいので、とりあえず来音さん夫妻と打ち合わせを始める事にした。

二人と、ある程度話したところで、姉さんが大きな袋を抱えて戻ってきた。袋から宝物を取り出すかのように大袈裟にカメラを取り出す。

「それでは諸君、撮影に入らうじゃないか！」

姉さんの眼はキラキラと輝いていた。

ここぞ一つ、伝えておかなければいけないことがある。

と言つのも、僕ら姉妹はそろつて絵が下手なのだ。

不器用ずぼらな姉さんはもちろん、僕だつて人に見せられるほどの絵は描けない。

ならどうするか？

姉さんの頭脳が考えに考えて出した答えがこれだ。

実写でいいじゃん？

逆転の発想でも何でもない。これが僕らに出来る最良の選択。だから絵本なのに絵は一切使わない。

姉さんは革新的だと思つてゐるらしいが、説明のところで紙本来の手触りだと、ページをめくる時のわくわくだと御託を並べていた人と同一人物の考え方だからね。

・・・まあ、僕は姉さんがそう決めたなら従つだけなんだけどさ。

図版四（複数化）

全部ハイクションです 全部関係あつません

「まずは、おじいさんが柴刈りをしているシーンを撮りますね。おばあさんと吉雄くんは休んでいてください」

僕は一人に声をかけると、すでに衣装に着替えて立派な童話のおじいさんとなつた来音のおじいさんと姉さんを連れて、民家の裏手にある森の中へと進んでいく。数分歩くだけで細い木のたくさんはえた雑木林にたどり着いた。

ちなみに姉さんは写真の勉強をしている訳でもなければ、撮るテクニックだつて人並み以下だ。特別、撮るという行為に思い入れがあるわけでもない。その姉さんがなぜカメラマンという重要な役職に就いているのか。姉曰く、一万円そこそこしたこのカメラを私ではなく大和が使うなんて絶対に許さないと。

そしてこれも姉曰く、大和が5000円以上の物を所持する際は姉に許可をとること。

お分かりだろうか。

僕は常に、重度の過保護に見せかけた姉の呪縛というものを背負つて生きているのだ。あの愛車（中古）だつて姉さんが便利に使つために許可が下りただけだ。その前の携帯ゲームだつて姉さんに買つた次の日に奪われるし、通販で買ったエアインマックスだつて…おっと話を戻そう。

まあ、姉さんも自分から言い出したもんだから一応カメラの使い方を必死になつて覚えたみたいだし、カメラのメンテナンスをやらされるとことだつたら僕は特に文句はない。

姉さんは三脚を立てる場所を探し始めた。手持ち無沙汰になつた僕は、衣装のおかげですっかり背景に馴染んだおじいさんに話しかけた。

「ずっと来音のおじいさん、って呼ぶのもなんか変ですね。失礼でなければお名前で呼んでもいいですか？」

「……」

返事はなかつた。

いきなり馴れ馴れしかつたかなと少し後悔し始めたとき、

「・・・ええぞ」

とおじいさんは小さく低い声で返事をした。

「ありがとウザゴります、電太さん。僕のことは大和つて呼んでください」

「分かつたわい」

またも唸るような低い声が返つてくる。

「おーい、セッティング終わつたぞー」

姉さんが三脚をたて終え、大きく手を振つて呼んでいる。

「それでは電太さん。木を切つているところを写真に撮るんで、この斧を持って振りかぶつてもらつていいですか」

僕は持つてきた小道具の斧を電太さんに手渡した。

「ここの斧は偽物なんで本当に切れることはありません。ですから、木の幹に振り下ろしたところ止めてください。それを写真で撮ります」「……」

（返事がないけど、分かったのかな。まあこんなおじいさんだけど役者さんだし大丈夫かな。）

「じゃあ撮るぞー、じいちゃん」

姉さんは腰をかがめてカメラに目をやった。説明中、終始無言だった電太さんは勇ましく斧を振りかぶった。

「では撮ります、3・2・1」

そうだ、忘れていた。姉さんがカメラマンなら僕の役職は何なのか。僕は助監督だ。といつても助けるはずの監督はいない。なぜなら撮るシーン、お話、設定。大切な事はすべてカメラマンの姉さんがすべて決めてしまうからだ。だから僕は助監督といつても仕事はカメラマンから押し付けられる雑用ばかり。

あとは撮る前の打ち合わせと撮るタイミングの秒読みくらいなもんだ。

スパン！

今までに聞いたことのない音が耳に届いた。次の瞬間、目の前の木が支えをなくしゅっくりと傾き始め、最後には倒れてしまった。

「すげーな、じいちゃん！」

感嘆の声をあげる姉さん。

「これでええんかの」

電太さんは手に持っていたレプリカの斧を僕に手渡す。

「いや、オッケー オッケー！最高の写真が撮れたよ、じいちゃん。もひつ最高！」

ハイテンションの姉さんがカメラを三脚からはずしながら、電太さんを褒めちぎっていた。僕は慌てて渡された斧を注意深く調べてみる。しかし何度も調べても斧は偽物。木が切れるはずがない。次は倒れた木を調べてみた。日本刀の居合いで斬られたきゅうりのように、真つ二つになっている。

「大和くんや、わしはもう帰つてええかの」「あ、はい。次の出番まで部屋で休んでいてください」

カメラと三脚を持って器用にスキップをする姉さん。僕は何かしゃくぜんとしないまま民家へ戻った。

「次は来音のおばあさん、お願ひします」

「はい、はい」

「大和くんよ、わしは少し寝とるけどええかの？」

「ええ、大丈夫ですよ。電太さん。」

「あらら、おじいさん、いつ監督さんと、仲良くなつたのかしら。するには、おじいさん、ばかり。私も大和ちゃん、つて呼んで、いかしら？私のことは、明宮亞ちゃんと、呼んでくださいな」「あ、はい・・・。えつと」

流石に女性を名前で、しかもちやん付けで呼ぶのは恥ずかしいな。

「明窗庵さんでいいですか？」

「そうね、でもせっぱつ、明窗庵けちゃんの方がいいわ

あくまでちやん」「だわるのか。

「それならおばあちやんでは駄田でじょうか？」

「おばあちやん・・・、そうね、大和ちゃんが、それでいいなら、いいわよ」

僕の手をとしながら、微笑み返すおばあちやん。

「ばあちやん、大和。もっ行くぞー！」

待ちきれずに飛び出した姉さんを追って近くの川へと向かった。

「おー、本当にこの川か？」

「うん・・・」

「ものっすごい流れ早いぞ

「僕もそう思うよ」

「こんな川に流したらあつとこつ間に流れてくれる？」

「うん・・・そうだね」

川は昨日、一昨日と降った雨で増水していた。川幅は広がり、流れ

は想像していたのよりもっと早い。

「もうどんどんふらりこつて感じじゃないもんな。ちょっとしたウォータースライダーだぞこれ」「まづいかもね・・・」

遠くはるばる自作して持つてきたお手製の大きな桃（偽）。耐水性にする関係でだいぶ重くなってしまった。この川ではおばあさんの洗濯シーン、流れてくる桃、おばあさんがその桃を拾うところを写真におさめようとしていた訳だが、色々と問題が浮き上がってきた。

運動の勢いとは、これすなわち重さ×速さ。桃が重ければ重いほど、流れる速度が早ければ早いほど、桃を止める時には力が必要になる。僕と姉さんは一人で川べりに一人たたずむおばあちゃんに目をやつた。川原の石に足をとられ足どりはおぼつかず、腕も少し力を加えれば折れてしまいそうなほど細い。下手をすれば交通事故と同じくらいの衝撃があの体を襲うことだらう。

「やめたほうがいいんじゃないかな。私は殺人犯の姉にはなりたくないぞ」

聞き捨てならない言葉を聞いた気がする。桃を流して捕まるなんて僕だっていやだぞ。

姉さんは一応カメラのセッティングはしたもの、なかなか判断を下す事が出来ないでいた。二人の苦々しい顔を見てか、おばあちゃんが近づいてきた。

「さあ、やりましょう」

「えっと、大丈夫ですかね？」

「大丈夫よ、大和ちゃん。私こう見えて力持ちなのよ。家事は毎

田やつてからね

そつこつとおばあちゃんは上品に笑つた。

「だつて姉さん。やつてみようか」

「分かつた。ばあちゃん頑張れよー。」

姉さんは応援の言葉を送り、カメラのレンズを覗いた。

「じゅあまざは洗濯してるとこを写真にとりますね」

「はい、はい」

笑顔でおばあちゃんが洗濯のシーンに使つ小道具を取りにいく。

「おい、大和」

カメラを覗いた姉さんが小声で話しかける。

「川すげー濁つてんだ。洗濯つていうかこれ」

先ほども書つたとおり、連日降った雨で水の中は一時先の視界もな
いほどに濁つっていた。

「土砂崩れの映像とかこんな色だよな、ははっ」

と皮肉たつぱりに笑う姉さん。

「姉さんの作った味噌汁もこんな感じだよ。でも撮つたらね」

「ひどいでもよくなつてきた。」

(うわあ、白かつた布が一瞬でまつ茶色だよ)
洗濯しているところを撮り終え、僕は急いで小道具の桃を持って上
流へ駆け上がった。

「じゃあ、流すよー！」

大声で姉さんとおばあちゃんに合図して桃を流す。桃はまるで流し
そりめんを見ていらむかのような速さで川を駆け下りていった。しか
し何の偶然か、奇跡か。うまいこと桃はおばあちゃんの方へと寄り
ながら流れしていくではないか。おばあちゃんは桃を逃すまいとジャ
ストタイミングでがっちりと掴んだ。溜まりに溜まった運動量があ
ばあちゃんに衝撃となつて伝わる。おばあちゃんは少し仰け反つた
が、何とか衝撃に耐え踏ん張つている。しかし残念な事にその程度
では桃の勢いは止まらなかつた。少しづつ桃に押され、おばあちゃ
んが動き始める。

危ないとと思った時には遅かつた。何故か掴んだまま全く手を離そう
としないおばあちゃんは小道具の桃に飛び乗るような格好で桃と共に
川の流れに乗ってしまったではないか。そのまま下流へとものす
「こい速さで下り始める。

「おー、ばあちゃんすげーな」

「姉さん、何見てんのー！追つて追つてー！」

姉さんの懸命の走りによりなんとか川の本流に合流する前におばあ
ちゃんを助け出すことが出来た。姉さんのカメラには悲しそうな顔

で桃に乗つたまま川を下つていへ来音のおばありやんの姿が『』つて
いたといつ。

HIS (複数形)

全部フイクシヨンです 全部関係あつません

軽い山登りを終え、戻ってきた姉さんは疲れきっていた。
あたりまえだ。

背中にはおばあちゃんを背負い、手には川の水を吸った特大の桃モドキを持って、川べりを鮭の如く上つてきただんな馬鹿でも疲れないはずがない。

「「めんなさいね、重かつたでしょう?」

おばあちゃんは顔にタオルをのせ仰向けに倒れこんでいる、一見すれば死体の様な姉さんを団扇でおおぎながら申し訳なさそうに謝つた。

「いや、・・・ばあちゃんはさほど重くなかったけど・・・この桃
いつたい何が入ってるんだよ・・・」

息を切らしながら、姉さんは手元にあつた桃を軽く叩いた。パカッ
つという安っぽい音と共に桃が半分に割れる。そして中からおぎや
あおぎやあと赤ちゃんが泣きながら現れた。と言つても、もちろん
これは偽者。ただの人形だ。声はラジカセを埋め込んで流している。
こうじう小道具作りも姉さんからの言い渡される雑用に含まれてい
る。写真なんだから音の機能はつけても意味がないんだけど、とり
あえず雰囲気作りとしてつけてみた。おかげで桃の大きさと合わせ
てだいぶ重たくなってしまった。

「つおつ。なんだこれ、かつこいいじゃん! すげー高性能!」

姉さんは人形の片腕を掴み、ぶらぶらと揺らしながら、すこしずこ

いと喜んでいる。

「姉さん、壊れちゃうから優しくあつからってよ。姉さんはそういう小さいものすぐ壊しちゃうんだから」

ただでさえ大雑把で不器用な姉さんは、遠慮やら手加減を知らないもんだから、人の物を勝手に触つては壊す癖がある。あの側らにあるカメラがなぜ今まで壊されず、原型を留めたままでいられたのか。答えはたぶんあのカメラが姉さんの所有物だったからだろう。つまり姉さんは自分の物となると纖細にもなるし手加減も出来るのだ。しかしそれが他人の物となると、やつてはいけないということを片端からやつてしまふような悪魔的な姉さんに変わってしまう。ちなみに奪われた僕の携帯ゲーム機は、奪われた次の日にタッチペンが画面に刺さった状態で「ミニ箱に捨てられていた。

「さあ、姉さん。いつまでも人形で遊んでないで次の写真撮るよ」「おう、そうだな。えつと次は次は・・・」「おじいさんとおばあさんが桃を割るところだよ」「ん、分かった。じゃあじいちゃんとおもちゃん、準備してくれ」

姉さんは三脚を使わず、カメラをしっかりと手に持つて構えた。僕は人形を桃の中へ戻すと、二つに割れたレプリカの桃を接合部分に注意していくつづける。そして小道具の中からおもちゃんの包丁を探し出し、それを電太さんに渡した。

「電太さんはこの包丁を上から桃に近づけてください。そこで一枚

撮ります。その後こちらで桃を開けますので、出てきた赤ちゃんを抱き上げてもう一枚撮りますね。ここまで大丈夫ですか？」

「ああ、分かったわい」

「おばあちゃんはそれを後ろで見ていて、そのつど表情をつけてください」

「はい、はい、分かりましたよ」

「それでは一枚目撮ります、3・2・1」

シャッター音と一緒にフラッシュが光った。撮れていなかつた時のために立て続けにもう一枚姉さんはシャッターをおろした。

「大丈夫かな、姉さん」

「おう、ばっちしだ。次行くぞ」

「じゃあ少し待つててくださいね」

僕は桃を軽く上から叩いた。しかし桃はうんともすんとも言わず、ぴくりとも動かない。あれ、おかしいな・・・もう一度叩いてみる。その後何度も叩いてみたが桃は一切反応しなかつた。

「おーい、大和ーまだかよー」

「ちょっと待つて姉さん、桃が開かなくなつちゃつたんだよ」

「さつきはちゃんと開いてたるー」

「う、うん、そななんだけど・・・」

接合部分がうまくかみ合つていなかつたのかな。

「まーだーかー」

「ちょっと待つてよ、姉さん」

「これを割ればええんか?」

たまらずに口をはさんだのは電太さんだった。

「ええ、ちょっと開かなくなつてしまつて」

「大和くんや、少しどいとれ」

そういつて左手で僕を桃から遠ざける。電太さんは手に持つていたおもちゃの包丁を両手で握りなおし、桃に対して一直線に振り下ろした。

スパン

この音を聞くのは一度目だ。一度目は山で目の前の木が倒れる寸前に聞いた。ずずずつと詰つ音とともに桃がゆっくりと真つ二つに割れる。まさにぱっかりという感じで桃が開いた。

「ああ、やつぱじいちゃんすげー！」

姉さんはカメラを構えながら切れた桃と電太さんの包丁を写真に写す。

「むかーし、おじいさんはね、軍隊にいた頃、シベリアの山奥で、自分の身長よりも、ずいぶんと大きな熊を、刀で切つたらしいの。周りの人からは、おじいさんに切れないものはないって、言われていたわ。

高元武蔵の、生まれ変わりなんて、言われてたときも、あつたわ。」

おばあちゃんは窓から見える遠くの空を覗き込みながら、懐かしげに語つた。

「す、すごい……」

僕も思わず賞賛の言葉を送りながら、桃を覗き込んだ。しかしそこ

で喜んでばかりもいらねることに気がついて。

「お・・おれ・・・おれこ・・・・おれおれおれおれやあやあやあやあや
や」

すっかり忘れていた。

桃の中には赤ちゃんが入っていたんだった。電太さんの包丁は音を出す機材をかすめていたものの、赤ちゃんも桃と同様にまつぶたつにしていた。姉さんもそれに気がついたのか真っ二つになつた残骸の片方を取り出しうぶらぶらうねる。

「こいつの名前決めたよ、大和」

「とりあえず言つてみてよ」

「チャッキー。せつと体が半分になつても赤いナイフで追つてくるぜ」

「急いでティファニーって名前の花嫁を用意してあげなきゃね・・・」

「真つ一つでも寺に收めてくれつかなあ・・・」

どうかチャッキーに危ないものが取り付けさせんよつて。安らかに眠れチャッキー。

ついでに真つ一つにしたのは電太さんだからな。やことじ間違えるなよ。

「いや、ほんとかつこよかつたつすーおじこさんー」

後ろでは手に包丁を持つたままの電太さんが、どんな状況でも爽やかな岩雄くんの褒め殺しにあつていた。

「すまんの」「、大和くん。入ったるなんて知らんかったんじゃ」「いいんですよ、あの場面はこっちで赤ちゃんの『写真』いれときますんで」

姉さんが簡易手術といつて、セロテープで止めたチャックを『写真』で撮つたものの、どう見ても心靈写真なのでボツにすることにした。

「みなさん、氣を取り直してこきましょ。次は・・・おつと」

肝心な」と忘れていた。衣装に着替えるより雄くんに伝えていなかつた。

「姉さん、主人公の服どいつた?」

「ああ、あれな。ここだよほり」

そういつて姉さんはひときわ大きな袋の中から衣装を取り出して僕に渡した。

「『じめん姉さん。ついでに』雄くんにそれ渡しておこしてくれない?」

衣装を姉さんに返そうとする。

「何言つてんだお前

「何つて、だからこの衣装を」

「それはお前が着るんだよ」

「え?」

何の事だか分からず、僕の思考は一瞬止まってしまった。

「主人公役のやつな、私から断つといったわ」

姉さんは口のはしを吊り上げ、いじわるそとに笑った。

「えー…どうこう」と岩雄くんは来てるじゃないか。まさか帰らせたの？」

「岩雄は主人公とは違うんだよ、だいたい岩雄は主人公って顔じゃねえだろ」「うう

それに異論はない。『もつともな意見だが、それでは一体どういうことなんだ？』

「だつたら誰が主人公役をやるのぞ」

「お前しかいないだろ？男で主人公役の年齢のやつなんて他にどうにこむ？」

あまりのことになかなか頭が回転してくれない。ようやく飲み込めたのは何故か自分が主人公役で写真を撮られる状況にあるとこうじとくらいい。

「僕？無理だよ。無理無理」

「私は車の中で言ったよな？もし何かミスがあればお前の体で払つてもううつて。払つてもらおうじやないか。まさに今！」

唚然とした。この人は一体何を言つているんだ。

「まあ、そういうことだから早く着替えろよ。私はお前がその服を着ているところを見たいんだ」

また悪しき微笑を浮かべ、姉さんは指で四角をつくり、そこから僕のことを覗いた。姉さんの見たいとは、すなわちやれ。こうなると逆らう事は出来ないのだ。

「大変な事になつたなあ、だいたいよく考えたらこれって僕のミスでも何でもないじゃないか

ぶつくさと文句を言いながら、とりあえず衣装に着替える。
ピロリロリ

聞き覚えのあるメロディがどこからか聞こえてきた。
(壁の中・・・?)

なおも流れ続けるメロディに耳を傾ける。あれ、これって僕の携帯の着信音じゃないか? でも、何で!?

「そうだ、大和。大和の携帯電話、壁に詰めちゃつた。何だか楽しくなつて」

「何でそんな事したの! ?えつと、こじだつけ。姉さんがゴミを詰めてたのは・・・取り出しづらこなあ、もう。んー、よし取れた!
もしもし?」

耳元からは何度も聞いたことのある声。

「あ、はい。そうですか、分かりました。お願ひします」

「大和、何の電話だ?」

「あれがもうすぐ届くって」

「ああ、ちゅうじこいな。それなりにやつちやと撮つてしまつが」

姉さんは民家の前に走つて三脚を立てにこき、カメラを向ける。

「電太さんとおばあちゃんは玄関の前に立つて、手を振つて送り出す感じでお願いします」

「はい、はい、分かりましたよ大和ちゃん」

最後に僕はきびだん」と書かれた袋を腰に下げ、カメラの前に立つた。

「・・・・」

「おい、大和。秒読み」

「僕がやるの！？」

「あたりまえだろ。お前以外誰がやるんだよ

(自分でやるつて恥ずかしい・・・)

「ぐ・・・分かつたよもう・・・。それじゃあいくよ、3・2・1・

」

六話目（書き始め）

全部フイクショーンです 全部関係あつません

「はい、では今日中にお電話いただければ回収に伺いますので。ええ、ここですね。はい」

「はい、よろしくお願ひします。ありがとうございました・・・」

プロロロロ

木の生い茂った深い緑の世界に不快な黒の排気ガスを巻き上げながら、トラックは大小二つのゲージを残し去つていった。小さい方のゲージからはトラックから降ろした当初からゲージをつつく音や、独特の鳴き声がひつきりなしに聞こえてくる。対照的に、大きいほうのゲージは本当に中身が入っているのかと心配になるほど物音一つ立てなかつた。

「お、届いた！届いた！」

一曰^ヒカメラを置いてきた姉さんが、元旦^ヒにお年玉袋の中身を確認する子供のような顔で小さい方のゲージを覗き込んだ。しかし表情は一転する。

「おい大和、何だこれ」

「鳥・・・だよね」

「鳥つて言つたつて、こいつは全然違うだろ」

流石の姉さんも言葉を詰まらせたが、ゆっくりと口を開いた。

「こいつはひう見たつて二ワト^リだら」

「そうだね。正真正銘、何処に出しても恥ずかしくない程の二ワト^リだね」

姉さんは二ワトリと僕、交互に視線を送りながら、どんな表情をしていいのか悩んでいたようだった。

「姉さん、怒る前に聞いて欲しいんだ。今時、キジなんておいそれと借りられないんだって。それで、僕も困っちゃって業者の人間に聞いたんだよ。鳥なら他に何がレンタルできますかって。そうしたらさ、ペンギンか二ワトリだつて言つじゃないか。だつたら二ワトリの方がまだそれっぽいじゃない？」

「いや、だけど。もう二ワトリかペンギンの一択なら私はペンギンの方がよかつたよ」
「ペンギンは料金が高いからどちら道、無理だつたんだよねーはははー」

僕はためらはず空笑いを浮かべる。姉さんは顔を引きつらせながら大きい方のゲージを覗いた。

「お、こいつはちやんとした犬じゃないか・・・ちょっとでかいなあ」

姉さんは僕が手に持っていた業者からの資料をひつたくるように奪い取った。

「えつと、なになに。グレートペレーズ。名前はスマールか。どこのだよ、すげえでかいぞ」

確かに。何を思つてスマールと名づけたのか気になるな。

「じゃあ私はここいら見てるから。それ、岩雄に渡してこよ」
「うん・・・・こいつくるよ」

僕は業者から渡されていた箱を持つて岩雄くんの待つ民家へと入つていった。

岩雄くんは休憩時間も、熱心に自分の台本を読んでいた。台本といつても台詞があるわけでもなく、自分の撮影されるシーンが大まかに書かれた程度の物である。

「岩雄くん、届いたよ」

僕はハムスターがひまわりの種を食べる時みたいに体を丸くして台本を読んでいる岩雄くんに、業者から預かった荷物を手渡した。

「あ、はいっす。あり（がとう）ります！」

今まで溜めていた力を解放するかのように、全身全霊で返事をする岩雄くん。

「岩雄くんさ・・・」ついして聞くのは失礼かもしれないけど・・・
大丈夫？」

何を言われているのかさっぱり分からない様子の岩雄くんが首をかしげた。猿っぽい岩雄くんの顔がまさに猿になってしまつ。

「えっと・・・大丈夫、ですか？何がですか？」
「岩雄くん、猿として登録されているよ」

どうして今日この場所に岩雄くんがいるのか。それは主人公役として派遣されたからではない。彼は猿役として、今日この時間に、ここにいるのだ。

岩雄くんはなんだそのことか、と疑問がなくなりさっぱりとした顔で答える。

「そうですね、でもこのバイト給料がたくさん貰えるんですよ！」

岩雄くんがそう言って親指と中指と薬指をくつつけ、指でキッネを作った。

（たぶん、お金表現したかったんだろうな）

確かに人間の言葉を理解する猿はどこにいったって重宝されるだろう。世界には人間が滅んで、猿が王国を作ってしまう内容の映画もある。だったら彼は千年に一人の逸材ではないか！

・・・いやいや。その前に彼は人間じゃないか。熱くなっといてなんだが、人間の言葉を理解するのは当たり前だし。

「まあ、岩雄がいいんならそれでいいじゃないか」

いつの間にかやつて来た姉さんが岩雄くんの持っていた箱から茶色い全身タイツを取り出す。

「でもさ、姉さん」

「うるせえ。こいつにも事情があるんだる。いいからさつと着替えろよ」

姉さんは全身タイツを岩雄に渡すと手をひらひらと振りながら表に出て行った。

「おい、ここにまじめに」とだ

とつあえず撮る前にお供になるはずの二匹? (一匹+一人) を並べてみる。

「猿が一番それっぽいじゃないか」

興奮状態でゲージから出せない二ワトリは論外。種類は同じ犬だが、真っ白で大きく、やる気がないのかベロを出したまま寝転がって動かない。

「はい、ありがとうございます! いや、ウッキー!」

結果的にカメラマンにお礼の言えるこの全身タイツの猿が一番近づいてしまったのだ。

「おし、いいぞ猿。おい、大和、取ってきたか?」「うん

僕はさつきクーラーボックスから取り出したばかりのお団子を腰の袋に詰めた。

「まずはそこのうるさい二ワトリからいくぞ

「元氣のあるうちに片付けときたいもんね・・・」

いまだにゲージの中で大暴れしている二ワトリ。誰が寝ているわけ

でもないのに鳴きやむことはない。

「大和くんや、少し静かにさせてくれんか。つるさくて昼寝もできやせん」

民家の方から電太さんの声が聞こえてきた。
寝てたか、おじいちゃん。

「姉さん、どうせって写真撮りつか」

「お前が抱えとくしかないんじやないか？」

一
セイ
はつそニカ
一
・
・
・

正直に言えば怖い。二ワトリがじやない。暴れている二ワトリがだ。僕は緑色の服を着た人が冒険する伝説のゲームで、暴れている二ワトリがどんな敵よりも恐ろしいという事を知っている。彼らは何匹も何匹も現れて僕のハートを奪っていくんだ。

「無理だよ、姉さん」

泣き言をこぼす僕を見かねて、姉さんが近づいていく。

「一五、五五五五五」

おもむろに二ワトリの前でトンボを捕まえる時のように指をぐるぐると回す姉さん。すると先ほどまであんなにうるさかった二ワトリが嘘のように静かになってしまった。

「まみつ、ここに馬鹿だー！」

と勝ち誇っていた。

なるほど、馬鹿はこうすれば静かになるのか。覚えておいて、今度姉さんに使おう。

僕は静かになつた二ワトリを抱え、カメラの前に立つた。そして腰の巾着から団子を一つ取り出す。途端、さっきまで死んだように静かだった二ワトリが息を吹き返し、また暴れ始める。

「姉さん、助けて！」

二ワトリが腕の中で暴れてそこいらじゅうに羽が飛び散る。

「もうそのまま撮るぞ！ 3・2・1」

カシャカシャと何枚もシャッターを切つていいく姉さん。

「よし、いいぞ。もういれる！」

僕はゲージの中に二ワトリを投げ込んだ。

「大和、すでに鬼と一緒に戦えたような格好になつてんだ。あつはつは」

二ワトリの爪で自作の服はとこねじり破れ、汗だくになつた僕を笑う姉さん。

「よし、そのままの流れでパンパンと撮りやうぞ」

鬼か、この人は。

リードもつけていないのに逃げ出すそぶりすら見せないスモール。

「おい、お前やる気あんのか？」

姉さんが軽く頭をはたいてもスモールのあごが地面から離れることがない。

「おい、スモウ、スモウ、おい立てスモウ」

すでに名前を忘れた姉さんによって改名をせられたスモール改めスマウ。でかいし、そっちの方が似合ってる気もしなくもない。

「ヨガツ ヨガツ！」

「それは別人だよ、姉さん……」

僕はさつき出した二ワトリの団子をスモールの鼻に近づけた。クンクンと入念においを嗅ぐスモール。いきなりピクンと跳ねると、立ち上がりお座りをしたのだ。

「お、現金なやつだ」

「姉さん、犬つて団子食べていいいのかな？」

犬にネギやチヨンをあげてはいけないとよく聞く。団子はどうなのだろうか。

「んー、よく知らないけど喉につまらそうだしね

そつ言いながらも姉さんは団子をスモールの口元まで持つてくれる。
パクッ

スモールは一口で団子を呑えると僕たちの手の届かないところまで移動し、口から吐き出した。そして吐き出した団子を何回かに分けて少しづつたいらげている。

「お、食べた。大丈夫なんじゃん?」

姉さんは巾着袋に残っていた2つの団子を取り、スモールのところへ持つていく。

「おい、このまま撮るぞ。来い」

そうこうで三脚を移動させてカメラのセッティングを始めた。おいしゃうに、少しづつ少しづつ食べるスモール。

「おい、秒読み」

「あ、うん。3 . 2 . 1」

カシャ

実際に満足そうなスモールがそこには写っていた。

「つてことで団子はなくなつたんだけど・・・
『いっすよ!』

その後、岩雄くんとの笑顔のツーショット写真を撮り、ここに打倒

鬼パーティーが完成しましたとさ。

図四（複数）

全部ハイクションです 全部関係ありません

空がまたたく間にオレンジ色に染まっていく。日は沈みかけ、森の中がかすかにざわつき始める。匂頃からはじめた撮影も、そろそろ時間切れのようだ。

初日のノルマだった動物を仲間にする場面までは撮影できたので、まあ合格点といったところだ。あとは場所を変え明日いよいよ、鬼の住む島で決戦というシーンを撮ることになっている。この場面は、お話の中で一番の盛り上がりのあるシーンで、大事なシーンだ。だからこそ場所選びにもこだわって、わざわざボートを借りて無人島まで行くようセットティングしてある。

「それなら断つといったぞ。」

姉さんはその一言で僕の「だわりを一瞬にして葬り去った。

「何なんだよ、姉さん！明日の鬼の住む島の撮影はどうするのさー...」「大丈夫だ、明日は撮影しない

「へ？」

姉さんは不敵な笑みを浮かべ、僕のかばんから勝手に拝借してきたスケジュール帳を開いた。

「私たちが今日泊まるはずの旅館。あの旅館の予約をいれたのは誰だつたかな？」

「えっと・・・姉さんだよ

僕と姉さんが宿泊場所の候補を決めていた時のことを思い出してみる。露天風呂がないと嫌だとマッサージがないと嫌だと姉さん

が駄々をこねたので、旅館の事はすべて姉さんに任せたんだつた。後日、日付を決めた後に予約までしてくれたつて言つから安心してたんだけど、まさか・・・。

「あれは真つ赤な嘘だ！今日、私たちが予約している旅館なんて世界に一軒も存在しない！」

姉さんは握りこぶしを突き上げながら高らかに叫んだ。

「馬鹿、姉さんの馬鹿！なんてことしてくれたんだよー。」

「馬？何を言つているんだ大和。まあ、そう焦るな。私に秘策があるんだ」

しまつた、姉さんがまた僕の言葉は最初の一文字しか聞こえないモードに入ってしまつている。

「一応聞くよ、秘策つて何れ？」

姉さんは待つてましたと言わんばかりに上機嫌な顔になり、

「・・・今日、一日で撮り終えてしまえばいいんだよ」

至極当然な事を言つた。

言い終えた姉さんは腕を広げ、聞こえてくるはずのない賞賛の声と拍手を待ち続ける。

「それで？」

「・・・それでつて何だ？」

「鬼の撮影はどうすんのさ」

「ん、そのことか。それも大丈夫だ、ここまで私の計算通りに来て

いぬかひ

姉さんはひりひりと自分の腕にはめていの腕時計に手を落とす。

「じゃあ、私は少し準備があるかい」

そうじつて話を勝手に終わらせ姉さんは一人で車の方に歩いて行ってしまった。僕は自由奔放な姉さんが車の中に消えた後も、思考をめぐらせ続ける。

最悪今日は、この民家に一泊だな。でもこの家はあくまで撮影のためのセットであって、人が泊まれるようにはなっていない。毛布や布団ぐらいはあるかもしれないけど、暖房なんてものは一切なく、隙間風だって容赦なく入ってくる。山の朝は寒そうだなあ、なんて考えていると部屋の中にはおばあちゃんが外に出でてきた。側に電太さんの姿はない。恐らくまだ中で寝ているのだひ。

「どうしたん、だい？」

おばあちゃんはしづかやの手で僕の両手を包み込みながら、声をかけた。

「いや、姉さんがめひやくひやして困つてるんですよ」

「へえ、そういうかい」

おひほひほひと笑ひおばあちゃん。

「それはね、大和ちゃんが、それほどお姉さんのこと、心配しているつてことなのよ。喧嘩するほど仲がよい、ともこりうでしょ？」

「喧嘩つてほどのことでもないんですけどね。おばあちゃんと電太さんほど仲良くはないですよ」

「あ、そんなことないわよ？実は私たち、そんなに仲良くないのよ。家の中でも、あまりお話、しないの。夫婦を演じてる、って感じかしらね。」

意外な答えが返ってきて僕は動搖してしまった。今日だけだが、はたから見ればとても仲のよい熟年夫婦だと思ったのだが、そういう訳でもなかつたらしい。

「そうなんですか」

「ええ、たぶんあっちも、私のことなんて、もうなんとも思ってないと、思うわ」

僕は少し考え込み、そして口を開いた。

「・・・でもそれは違うと思いますよ」

「あ、そう？何故そう思うの、大和ちゃん？」

「だって何でも斬ることのできる電太さんが切つていらない縁なんだから、それはすくへ強い縁なんだだと思いますよ」

僕は思ったことをありのままの言葉で伝えた。おばあさんはこつこりとした表情を崩さないまま少し黙り込み、

「そうね、ありがとう大和ちゃん」

手をしっかりと握って、同じように微笑んだ。

森の中に一つの光が灯つた。光はどんどん近づき、それが車のヘッドライトだと分かつたのは車体のすべてがお目見えした時だった。それほどに森は暗闇に包まれていた。

バタン。

車の扉が開き、男が五人降りてくる。五人とも見るからに屈強で、黒スーツにサングラスという格好。まさかこんな山奥でそのスジの人会うと思つていなかつた僕は混乱して言葉が出てこない。足が小刻みに振るえ、冷や汗がにじみでる。

その時、五人の先頭にいた男が口を開いた。

「監督さんはビリーハーレーじゃいますか」

その声からは敵意というか、相手を脅かそうといふ意思は感じられなかつた。僕は「ごくりとツバを飲み込み、乾ききつた喉を潤すとなんとかひねり出す様に口から言葉を発した。

「えつと、監督ですか？」

「はい」

この辺りに工事現場はないし、サッカーの練習場だつてない。監督と云つとやはり僕たちの撮影に関係のある監督のことなのだらう。

「どうあえず僕がそなりますけど」

と言つても助監督だけど。

「ああ、あなたがそうでしたか。これは失礼」

そういうてサングラスをはずし、氣さくに握手を求めてくる。

「いやーお若くて氣がつかず」無礼を。私につづるもので

そうじつてスースの胸元から名刺をとり出した。

「あー……なるほど。そうでしたか」

真っ黒に塗られた名刺の右上に白文字で悪役事務所と書いてあった。この事務所は怖そうな人を専門に派遣しているところで、この業界ではよく知られている。こわもての人が多く在籍していて、最近では Stanton にも力をいれているらしい。今回この事務所には鬼役の人材を頼んでいた。

「すいません。少し待つていてもらひついでですか」

僕は姉さんを呼びに車に駆け寄った。真っ暗で中はよく見えないが、中で何かがもぞもぞと動いている。

「姉さん、鬼役の人達が到着したよ」

そういうつて車のドアに手をかけるが、中から鍵がかかっていて開かない。窓のところをこんこんとノックする。

「開けんな大和、ちょっと待ってる、殺すぞ!」

中からドスの利いた声が返ってくる。僕は驚いて真後ろに飛びのき、尻餅ついてしまった。

「おい、今の声って……」

「すごい迫力だつたな」

「監督にあんな態度をとれるなんて、車の中の人物は何者だ?」

「もしかして本当にそっち系の人か・・・？」

「監督が姉さんって言つてたしな」

「俺たち見かけはこんなだけど本物はやばいよな」

「とりあえず逆らわないほうが良さそうだな」

悪役事務所の人達が口々にあらぬことを言つている。鍵の開く音がして、姉さんが悠然と登場した。

「姉さん、」こちらの皆さんが鬼役の方々です」

「おうおう、諸君。今日はしっかりと頼むぞ」

さつきの演説、「がいまいち抜けていない姉さんが大物風を氣取つた挨拶をする。

（間違いない、彼女はソッチ系の人だ）

鬼役の方々はお互いに田で合図をして確認をとりあつと、

「あねさん、今日はよろしくおねがいしますー。」

大きな声で挨拶をした。

「おお、元気じゃねえか。」こちらによろしくな」

いつの間にか姉さんは鬼たちの心を完全に掴んでいた。

「つっこむのが遅くなつたけど、その格好なんなの
「何つてなんだよ」

姉さんは小道具の中にあつた金棒を持ち上げ、背中の手の届かない場所をかいている。

「その衣装のことだよ。競艇？」

「何言つてんだよ。この格好見れば分かるだろ。今から私は鬼だ」

全身黒タイツで、トラ柄のパンツをはき、頭には鬼の角のついた力チユーシャをしている。

「やっぱり姉さんの本当の姿は鬼だつたんだ！」

昔からこんな残虐な人が人間のはずないと思つてたんだ。あと何回変身を残しているんだろう。

「違つわ、馬鹿。それよりよく見る、どこからどう見たつて完璧な鬼じゃないか？我ながら惚れ惚れする鬼つぱりだ！」

鏡を振り回しながら色んな角度から自分を映す姉さん。

まあね、あなたの配下の鬼たちに比べれば姉さんはずつと鬼らしげ鬼だよ。つい先ほど到着した姉さんの配下である鬼を演じるはずの悪役事務所の人達はサングラスにスース姿。鬼らしいところといえば、姉さんが画用紙とテープで作った鬼の角を頭につけていところうぐらいなのだ。悪役事務所に連絡するところまではできた姉さんも、鬼役の衣装が外部発注だつてここまで頭が回らず、このようないい奇麗な鬼たちを作りあげてしまった。

「あねさん、お茶をどうぞ！」

「おひ！」

いつの間にかボスらしい立ち回りも身についた姉さんが、配下の鬼から受け取ったお茶をすすすと喉に流し込む。

「それよりもう外真つ暗だよ。こんな暗やじゅフラッシュをいたつて無駄でしょ、撮影どうすんのさ」

「暗いなら家の中でも撮るしかないだろ」

「え？」

思わず素つ頓狂な声を出してしまった。確かに家中なら持ち込んだ照明機材で、撮影できる明るさくらいにはなるかもしれない。でも、

「鬼が家の中こいるの？」

そんな馬鹿な。

「鬼の方から攻め込んできたってことにはすればいいだろ」

なんて「都合主義」。

姉さんの頭の中のストーリーでは、鬼が一市民による鬼退治の計画を嗅ぎつけ、わざわざ敵の本陣まで出向いたとしても何うのだろうか。なんて情報戦に長けた鬼なんだ。

「そんな簡単に改変していいの？」

「しうがねえじやん。外暗くて取れないんだし」

姉さんはまったく悪びれるそぶりもない。

「姉さんが鬼役として出るんだったら、誰がカメラ撮るのさ。僕も無理だよ？」

だつて主人公だし。姉さん率いる鬼たちを実家で迎え撃たなきやい
けないし。

「タイマーで連写撮影だ、それでいい」

姉さんはぽんと胸の前で手を呪き、そのままカメラをいじりはじめ
る。
本当に適当だなあ。

「じゃあちよっと準備するから待つてろ」

意気揚々とカメラのセッティングを開始した姉さんだが、連写
機能とタイマー機能、いきなり一つを相手することになりだいぶて
こづつているようだ。

「大和さん、大和さん」

ぼーっとしていた僕に岩雄くんが突然話しかけてきた。

「やっぱくないですか、梅さんの格好」

岩雄くんは悪戯苦闘する姉さんを見ながら頬を赤らめている。

「何が？」

「ほり見てくださいよ。胸とかぴつたりくつついで。梅さんつてす
「こ皿乳じゃないですか。」

そう言われてもう一度姉さんの方を見る。ああ、確かに。姉さんは
性格は悪いがスタイルは弟の僕から見てもいいと思う。出るとこ出

てるし。それに、全身タイツだから体のラインがくっきりでてしまつていてる。確かにあれは反則的だ。

「岩雄くんは巨乳が好きなの？」

「巨乳がいいですねー。僕はよく海外に行くんですけど、梅さんのことは外人並にでかいですよ」

岩雄くんは嬉しそうに語った。

「そういういえは大和さん。大和さんはずっと梅さんのことを姉さんと呼んでいますが、もしかして大和さんと梅さんって姉妹なんですか？」

「ああ、そういういえはちゃんと紹介するつて言つてまだしてなかつたね。まあ一応姉妹だよ。性格も何もかも違つけどね」

「え！ やつぱりそつだつたんですか？ うわー、大和さんのお姉さんなのに失礼なことを言つてしまつたなー」

岩雄くんは独り言のように自分のミスを責めはじめた。自分の姉をそういう目で見られるとだいぶ引く。しかし僕の中で猿として登録されていた岩雄くんはすでにこれ以上離れることの出来ない距離まで離れてるのでこれ以上引く事はない。

「失礼ついでに言つますけど、全然似てないですね」

全然失礼じやないぞ岩雄くん。その通り全く似てないんだ。僕は似てはいけないんだ。

「おっし、テストいくぞー」

岩雄くんと喋つてる間にセッティングを終えた姉さんが声を上げた。

「えつと確か大和さんの苗字が湖蘭だから・・・湖蘭梅さんかー」

「あつ」

まずいと思ったときには手遅れだつた。その辺の説明を全くしていなかつた。

「おい、猿なんか言つたか」

顔を伏せた姉さんが岩雄くんに少しづつ近づいていく。

「あ、えつと。大和さんと姉妹ならフルネームは湖蘭梅さんなんだなーと。」

この辺で岩雄くんも空気がおかしくなつたことに気がついた。
しかし遅すぎた。

まあ、でかい声で一回も言つたら聞き間違いでは、すまないわな。

「だれが」飯ウマーだああああああああああ

逆上して鬼神とかした姉さんは岩雄くんを間髪いれずに殴り飛ばした。

「あり（がと）い！」そこまああああああああああああ

岩雄くんはまるで重力が横を向いたのではないかと思つて、軽々と吹き飛び壁にはついた。

「姉さんやめてー。」

壁が、土壁が崩れる！弁償できなによー。

壁にぶつかつてもなお、重力に逆らいながら浮き続けていた吉雄くんがとうとう、ずるずると壁伝いに床に落ちた。一目で分かる。意識はない。

「お前もだ大和ー」

姉さんは氣を失つている相手は襲わない。なぜならそれ以上やれば相手が死ぬからだ。

しかし当然この程度では怒りの収まらない姉さん。その怒りの矛先は僕に向いた。

「僕は何も言つてないじやないか！」

「モウマンタリー！」

そこは問答無用だよ、姉さん。とつこひんでいる暇はないさうだ。

「ほーらほーら姉さん

僕は先ほど知った馬鹿を止める方法を実践する。トンボを捕まえる時のように指を姉さんの眼の前でぐるぐると回す。

当然それを見た姉さんは、

「なんのつもりだおいらああああああああああ

そりゃそうだよね。

僕もあえ無く、ボコボコにされました。

その後の写真には対決する前から立っているのがやつとなほどの怪我を負つた主人公と意識なく壁に叩きつけられている猿。家の中に動物をいれる訳にもいかなかつたので犬と二ワトリの姿はない。寸前の暴力事件を見て顔面蒼白になつたスース姿の鬼を従え高笑いをかます姉さん。その光景を見てなお微笑みを忘れないおばあちゃんと、我関せずと普通に眠つたままの電太さん。散々な写真ばかりだつた

「姉さん、それ以上は…岩雄くんが死んじゃつよ…」

「おい、起きろ大和」

「はつ 夢か」

まさか岩雄くんが姉さんに12回体を畳まれて壁に埋められる夢を見るなんて。

「で、どうだつた 今回の本の売れ行きは」

「当然いまいちだよ。それでも少しほはれてる」とのほつに驚きだね

「いやー、好評だつたぞ一部には」

「一部つてどーぞ」

「ひなた」

「あー、そつか。・・・なりいか

「ああ、オールオッケーだ」

「・・・つて全然オッケーじゃないよー来月の食費どうすんのやー」「心配すんな」

姉さんは大きなダンボールを一つ、ドアの向こうから持つてきた。一つ目のダンボールを開ける。中には気持ち悪い色の果物がつまっていた。

「これは猿雄から。あと二箱これがあるぞ、南国の果物だつてよ」

おしごけど、名前が違つた姉さん。

「なんで岩雄くんからそんなにこの果物が届いたの？」

「なんか旅すんのが趣味らしいぞ。」

なるほど。岩雄くんは今現地にいるのか。

へえ、猿顔の岩雄くんが旅ねえ。

猿岩・・・

「ロバ連れて旅してそうだよな」

「姉さんは別のコノビだよ」

もう一つの箱はなんだろう。

「じいちゃんなどまあちゃんからだ。息子の会社の試供品だつてよ」

じいちゃん・・・ああ来音わん夫婦のことか。

「大和ちゃんにだつてよ、よかつたな」

「ああ、うん」

中を覗いてみると箱いつぱいに新製品の歯磨き粉が詰まつていた。

「じいちゃんたちがくれたんだ残さず全部食べるんだぞ」

「分かつて・・・え？」

「姉さんは大和がこれ全部食べてるといろ見たいぞ」

姉さんは豪快に笑つた。

(後書き) 諸説十

1 お田口ひつじ
2 お田口ひつじへ

2、一括図（複数用）

全部マイクションです 全部関係ありません

姉さん

「何だよ、うわつ顔怖い。どうした大和?」

「どうしたじゃないよ。何であいつがここにいるのか？」

「何でって、呼んだからに決まってるじやん。今回の撮影は必要だ

卷之三

卷之三

話はまず一週間前にさかのぼる。

• • •

僕が初めて出演した絵本が発売され一ヶ月

腹では以前より多くのシヤッターを隠した本屋さんを見かけるようになった。

僕はそれでも負けじと續けていた数少ない書店をまわり、とにかく本を置かせてもらえたようつ交渉する毎日を送っていた。しかし現実は厳しい。

「」んなもの置く余裕はない」だと、絵本のぐせに子供に見せられない」、「鬼の子の写真集なら置いてもいい」など、『もつともな意見と共に返される』ことがほとんどだ。

も見つかった。

「よし、次の作品を撮るぞ」

姉さんはベッド代わりに使っていたソファーから飛び起き、開口一番叫んだ。

「何か言つた？姉さん」

いつもの持病の発作なので僕は聞こえないふりをして軽くあしらう。

「大和、私は決めた。次の作品を撮る」

「あ、そう。姉さん頑張って」

「次の作品をとーるーぞー、やーまーとー」

姉さんを無視し、ディスプレイを覗き込みながらキーを叩く。

「・・・」

「やーまーとー」

「・・・」

「や・ま・と、お・ね・が・い・ハート」

「駄目に決まってるだろ、姉さん」

姉さんの甘ったるい声に耐え切れなくなつた僕はようがなく口を開いた。

「前の本を出してからまだ一ヶ月しか経つてないんだよ？新しい本を出すには少し早いよ姉さん」

「うん、でも大丈夫」

馬鹿な姉さんのために、分かりやすさを心がけて説得する僕。しかし姉さんからは何の根拠もないくせに自信に溢れた言葉が返ってくる。

「それにこう言つたらなんだけど、前の本は鳴かず飛ばずで在庫がまだあるんだ」

僕は部屋の隅にあるダンボールから紙束を一つ取り出しながら続ける。

「今はこれを少しずつでも置いてくれる店を探した方がいいんじゃないかな」

我ながら馬鹿でも理解できる、いい説明だ。

これで流石の姉さんだって分かつてくれたはず。

しかし普通の馬鹿のそらく上を行く姉さんは僕の手から自分の作った絵本を取り上げると、

「こんなもん知るかー！」

といつて本を床に叩きつけた。

「何すんだ、姉さん。」『れ一応売り物なんだよ！』

「つるさいー私はこんなもの知らん。私は次を撮るんだー！」

『だいたい姉さんは自分のしたいことしかしないじゃないか。スケジューールの管理だつて僕にやらせるし、役者の手配や場所をおさえのだつて僕じやないか。あげく前回はそのスケジューールだつて勝手に変えちゃうし···』

「大和、『こちや』『こちやつるわー』！」

『そういうつてムエタイの選手ばかりの蹴りを僕のお尻に叩き込んだ姉さん。

「痛い！手をあげたな、姉さん！』

「手は上げてない！」

『感情的になつた姉さんに言い回しは通じない。

『悔しいなら口で言い返せばいいじゃないか、なんですが蹴るのさ

！』

「つるさいー、お前···口臭が爽やかなんだよ！』

『それは姉さんが歯磨き粉を食べさせたせいだろ。おかげで僕はずっと下痢だよ』

ダンボールいっぽいの歯磨き粉を消費するのに、毎日一本ずつ。二ヶ月間もこの生活が続いた僕の息は朝晩ぬつと爽やかになつてしまい、代償としてお腹がゆるくなつた。

『だから私が薬買ってきてやつただろ』

『いつきに一瓶飲ませようとする馬鹿に殺されかけたよ』

絶対マネしちゃ駄目だぞ。

『くー···じゃあ私が全部用意したら撮つていいんだな！？』

『姉さんは無理だよ。あのまぬけな鬼たちの衣装を思い出してみなよ』

『こちやくしょー···』

姉さんは言葉で追い詰められると精神と言葉の年齢がぐつと下がり、攻撃も単調になる。

間髪いれず飛んでくる姉さんの手刀をひらりと避けた。

このくらいなら姉さんの攻撃でも避けられる。

しかし避けた先で机で腰を強打した。

「あで」

「やつてやるー、うわああああああん」

号泣しながら姉さんは扉を開けて出て行ってしまった。

少し言い過ぎたかなと思ったが、いうこう姉さんの急な思いつき自体はよくあることだ、僕は特に気にはしていなかつた。

だいたい姉さんの思いつきは企画倒れで実行にうつされることはまずない。

しかし実のところ姉さんは違つた。

姉さんは僕の知らないところで本当に準備をしていたのだ。
そして今日、知らぬ間に計画されていた撮影の日を迎えた。
ちなみに僕がこの撮影について、姉さんから聞いたのは早朝のこと。
もちろん何もしらず寝ていた僕は、いきなり姉さんに叩き起こされ、
寝ぼけている間に車に乗せられた。そして、気がついてみればこの竹やぶに連れてこられていた。

もう誘拐だろ、これ。

姉さんから台本を受け取り、中をぱらぱらと開く。

「姉さん、ちなみに僕はこのお話に出てくるの？」

「当たり前だろ。前が好評だったし、今回も出すぞ」

「一部にね」

「ああ、ひなたにな」

で、なんやかんやありながらもつ一人の出演者と顔合わせ。

そこによつやくこのお話の最初に戻る。

・・・

「何でここにかぐやがいるの？」

「ひやえつー！」

少女は兄弟喧嘩の途中で、自分の名前がでてきたことに驚き、ぴくんと跳ね上がった。

僕はその様子を横目で見ながら、少女を指差して姉さんを問い合わせた。

「もしかして姉さん、名前がかぐやだから呼んだの？」

「おひ」

姉さんは全く表情を変えず、堂々と、当然のように言つてのけた。

「選考基準は？」

「女がかぐや」

「・・・だけ？」

「おう」

呆れた。

僕は急に激しくなった頭痛と腹痛に顔を歪める。

「お、お久しぶりです、大和くん・・・」

少女は涙目になりながらも、僕の正面に立ち挨拶をした。

紹介しよう。

彼女は僕の幼馴染の菊池かぐや。

菊池家とは親同士の仲がよかつたため、子供同士でよく遊んでいた。主に姉さんが。

女同士気でもあつたのか、あるいはあの姉さんと仲良くなれるほど馬鹿だつたのかは知らないが、姉さんはかぐやのことを小さい頃から可愛がつていて、かぐやにとても甘い。

僕はといえばかぐやが嫌いだった。

姉さんに蛙をパンツの中に入れられたこともない。

姉さんに鼻でガムを噛んで膨らませるまで、押入れに閉じ込められたこともない。

雷雨の中、鉄のフライパンを持たせられ、外に立たされたこともな

いかぐやが、姉さんに可愛がられているのが小さい頃の僕には納得できなかつた。

だから僕は姉さんに叩かれた腹いせをかぐやにしていた。

と言つても昔から腕つ節の弱かつた僕は、かぐやによく悪口を言つた。

しかしがくやはほとんど喋らないし、僕が何を言つても笑つていた。でもそんなある日、僕はかぐやを泣かした。何を言つたかは覚えていない。そして僕は飛んできた姉さんに川原の石を高く積むまで殴られ続けた。

その日から僕はかぐやを避け、そして全く遊ばなくなつた。

親同士の交流もなくなり、かぐやにあつたのは中学生の時以来だ。僕はかぐやをきっと睨み、挨拶を返さない。

「出演料もいらないって言つてくれてるんだ、文句ないだろ？お前ら一緒に出るんだから少しは仲良くなろう」
姉さんが僕の肩を掴みながら言つた。

「・・・よひしく」

僕はかぐやの顔を見ないうちに挨拶を交わし、そのまま車に入つて衣装に着替えた。

2、一括図（複数用）

全部フイクショーンです 全部関係ありません

青々と育つた竹が天に向かってまっすぐと伸びる。

風が吹くと揺つて左右に体を揺らす姿は何か神秘的な感じだつた。

「なるほど、僕はおじいさん役か」

渋い茶色の衣装と丁寧に白髪とかつら。

僕にあそこまで言われたのがそれほどまでに悔しかつたのか、姉さんはちゃんと準備をしていた。

外に着替えるできるような場所はなかつたので、しょうがなく車の中で着替える。

朝、人の安らかな睡眠を妨害してくれた姉さんにいちやもんの一つでもつけてやろうかと思ったが、車が狭くて多少時間はかかつたものの、サイズもぴったりで衣装については文句のつけようがなかつた。

姉さんが着替えてでてきた僕を見て、満足げに笑つた。

「はつはつはつ、サイズもちょっといい感じだな。似合つてゐるぞ、大和」

「僕もびっくりしたよ。姉さんやればできるじゃないか」

「いやいや、私なんかより大和の方がすうしよ。前の衣装といい何でも似合つじやないか。ほんと何着せてもかつ」といは」

おじいさんの衣装が似合つてのは、少し「ん?」と思うがこれも姉さんなりの褒め言葉なのだろう。

「どうしたんだよ、姉さん。恥かしいなあ。」

「これほど『眞写り』の神様に愛されている男はいないぞ。どの角度から見てもすげーイケメンだ」

そういうてカメラを覗きながら、僕の周りをぐるぐると歩きまわる姉さん。

「ははつ、本当にびうしたの姉さん。そんなに褒めても何もでないよ」

「えつ・・・」

元気だった姉さんが急に静かになつた。

手足をわなわなと震わせ、視線が空中を彷徨つてている。

「・・・姉さん、正直に言つて。何したの」

「その衣装、後払い・・・。私、お金ない・・・どつじよつ大和」

姉さんは両手を僕の肩に起き、がちがちと歯を振るわせた。

「どつじよつどつじよつ、早く逃げないと大和。どこか誰にも来ないような山奥へ」

「いや、衣装の代金なら会社のお金で出すけども・・・」

「あつ、そつか」

姉さんはふうーとため息を吐き出し、安堵の表情を浮かべた。

しかし僕には安堵できない懸案が一つ。

「・・・姉さんもしかして僕に払わせよつとしてた?」

「いや、別に」

「姉さん、嘘をついたら馬鹿になるよ」

「ぐつ・・・」

姉さんは馬鹿のくせに今以上に馬鹿になることを嫌つてゐる。

「さあ、どつち?」

この後の姉さんの行動パターンは一つ。

「『めんなさいいいいい、嘘つきばしたああああ』

と言つて号泣しながら謝るパターンが一つ。

もう一つは、

「うるせえ、馬鹿大和おおおおお」

と言つて逆切れしながら殴りかかつて事をうやむやにするパターン。

果たして姉さんはどちらの行動をとるのか。

「うるせえ、（省略）

後者でした。

一方的な暴力でなかつたものになつた僕の疑問を置き去りにして、姉さんと僕、ついでに何故か撮影シーンもないついてきたかぐやの三人で竹やぶの奥へと入つていく。

「おい、大和。 笹だ、食つてみろよ」

姉さんは頭上に無数にある笹の葉を一枚、引きちぎつて僕に渡した。「僕はパンダじゃないんだから食べられないよ。 それにどちらかと言えば僕より四六時中「ゴロゴロしてゐる姉さんがパンダに近いでしょう」

「大和、お前の顔にパンダみたいなあざつくるぞ?」

「・・・『めんなさい』」

姉さんとの口喧嘩は口喧嘩から最後には脅しになるから勝てたためしがない。

「つづく

少し後ろを歩いていたかぐやが思わず噴出した。

「・・・何笑つてんだよ」

小さい声でぼそつと呟いた。

「あ・・・えと、『めんなさい』

かぐやは謝りながら顔を曇らせた。

「馬鹿、仲良くしろつて言つたろ」

そういうつて姉さんは僕の頭を軽くこづく。

「・・・」

その後、気まずい空気のまま數分歩き、少し開けた場所に出たところで姉さんが足を止めた。

「よーし、ここでいいだろ。 つひやーたつかいなー」

姉さんは一際背の高い竹の頂上を見よつと、首を傾けて空を見上げた。

「姉さん、ここではどんなシーンを撮るの?」

「ああ、えつとなー」

姉さんは背負つていたリュックサックから台本を取り出しながら、

「えつと、竹を切つてる大和と光つてる竹。それと竹の中にいる赤ちゃんを見つけるシーンだな」

姉さんは台本を閉じると、またリュックから物を取り出した。

「はい、これはのこぎりと細い枝を切るようの鉈だ。んじゃまず大和が鉈で竹を切つてるところ撮るぞ」

「姉さん、これで本当に切れるの?」

持ち上げた鉈を少し振つてみる。

「おい、気をつけろよ。それ本物なんだから。本当に切る必要はない。切つてるところを撮る」

「なるほど」

そういうつて僕は手に持つた鉈を竹に思い切りよくつきたてた。

「よーし、それで待つてろ」

姉さんは急いで三脚をたて、カメラをセットした。

「おし、大和秒読みー」

「うん、3・2・1」

シャッターが降り、今日一枚目の写真がデータになつて映し出された。

「ん、オッケー。じゃあ次光る竹」

姉さんはまた手ごろな竹を探し始める。

「姉さん、どうやって竹を光らせるの?」

「ああ、待つてる。秘策があるんだよ」

姉さんは青いロボットがポケットから道具を取り出す時のような効果音を口で出しながら、リュックから懐中電灯を取り出した。

「テラスマメノライター」

「ライトイでそういう物だよ」

姉さんのモノマネが似てないことはさておき、それをじつ使う氣なのだろう。

「This is in bamboo.」

どうやら竹の中に懐中電灯をいれて光る竹を作り出すらしい。ちなみに姉さんは学生時代、すごぶる英語ができなかつた。

それなのに使いたがる辺り、やはり馬鹿だと言える。

「どうやって中にいれるの？」

「I don't know」

いつもの姉さんよりもこりつとくるな。

姉さんは外人風（姉さんの勝手な想像）の悩み方として、ありもしないヒゲを指でこすりながら考えている。

「Yamatohelp me」

早々に根をあげた。

いらっしゃとしたので助けないことに対する。

「I can't help you」

ちなみに僕にも姉さんと同じ血が流れている訳で、英語は出来ない。

「助けて、かぐやー」

姉さんは僕を諦め、かぐやに泣きついた。

「えつえつ。ど、ど、どつしよう

かぐやはおひおひと慌てふためいている。

「かぐやー、お姉ちゃんを助けてー大和がいじめるー」

ぐりぐりとかぐやの胸に顔をこすりつけ甘える姉さん。

それを見ていると、そろそろ助けてやるかといつ氣分になった。

「姉さん、そこは竹だけ撮つて後で合成しよう」

「そうだな、なんで早く言わないんだよ大和ー」

姉さんは嬉しそうに三脚をたてて、光っていない普通の竹を撮つた。

「おし、オッケー。じゃあ私はもっと竹林の写真撮つてくるから大和はこれで竹を斜めに切つといて」

そう言って姉さんからのこぎりを手渡される。

「気をつけて切るんだぞー、じゃ後は任せたなー」

のんきに鼻歌を歌いながら姉さんは竹やぶの奥へ消えていった。その場に残された僕とかぐや。

かぐやは気まずそうな顔で、そわそわとして落ち着きがない。

「かぐや、切れよ」

昔のように命令口調で言つてみた。

「あ、うん。分かった」

かぐやは僕の言葉に従い、女の子の手には似合わないのこぎりを持つて切り始めた。

「うんしょ、あれ・・・硬いね」

かぐやは顔を上げて微笑みかけるが、僕は表情も変えないし返事もしない。

「うんしょ、うんしょ」

何分続けても、いつこのこぎりの刃は前に進んでいかない。かぐやは前髪ををかき分けながら、一生懸命に手を動かしていた。汗の雫が一滴、かぐやの顔の輪郭をつたつて地面に落ちた。それを見ていた僕は何故だか無性にいらっしゃってきた。

「代われよ」

「え？」

かぐやは驚いた顔で僕を見た。

「遅いからだ、姉さんが帰つてきたときに終わつてないと写真撮れないとだろ」

「あ、そうだね。・・・ありがとう大和くん」

僕はのこぎりをかぐやの手から奪いきり始めた。

「・・・んで何で切れないのさ」

帰つてきた姉さんは呆れながら僕に向かつて言つた。

「すつごく硬いんだよこれ」

泣き言を言つようだが本当に硬い。男の僕でも全然無理だった。

「大和くんは頑張つてくれたんだけどあのね、お姉ちゃん

フォローをいれようとするかぐや。

「ちょっとどぞいてろ」

姉さんはのこぎりではなく鉈を両手で持ち、かまえた。

「確かじいちゃんの構えはこうだつたかな」

姉さんの言つじいちゃんとは電太さんのことだらう。

「はっ」

姉さんはものすゞいで速さで鉈を斜めに振り下ろした。すっぱりと竹が斜めに切り落とされる。

電太さんのような音は出なかつたものの、見ただけでもできるようになるのか姉さん。

我が家ながら恐ろしい。

姉さんは鉈を下ろし、リュックからある箱を取り出した。その箱は何重にも紐で縛られていて、よく見ればおふだのような物が貼つてある。

「姉さんこれ何ぞ」

僕は箱を手にとり、よく見ようと顔に近づけた。

「おぎおぎおぎ、ああ、ああ、ああ、ああ」

びっくりして箱を投げ捨ててしまつた。

「これまだ持つてたの」

「いや、使えるかなつて思つて」

「姉さん、これはもう燃やすなりお寺に持つてくれなりしようつよ。赤ちゃんは僕が合成でいれとくからわ」

「うん、分かつた。そうする」

姉さんは箱を拾つて何事もなかつたかのよつにリュックにおさめた。

「よし、これ撮つたら次行くぞ」

手でカメラをしつかりかまえる姉さん。

「大和、秒読み」

「3 . 2 . 1」

「あつ、今撮りながらスザン・ジョーク思いついた」

「聞かせてもらひよ」

「今、私カメラで竹を撮つてるじやん? これが本当の竹撮り物語つてね、H A H A H A」

僕は笑い続ける姉さんを置いて無言で車へと戻つた。

2、II話題（記述文）

全部フイクショーンです 全部関係ありません

車を走らせること数十分。

ちらほらと民家が見えるようになつた。

道路も車が一台しか通れないような道から一車線に変わり、山を崩してつくつた町のような場所に出た。

少し走ると洋風の家や、コンビニなんかも建つてこりのを見かけた。姉さんに教えられたルートだと、目的地はどつやひこの町の奥。周りより少し高い丘の上へ向かっているらしく。

「よーし、ここだ。止めろ大和」

姉さんは後部座席で前がかりになり僕に指示を出す。止めるも何も、走っていた道は最後には一本道になり、その道もここで行き止まりだ。

よつて僕たちには止まる以外の選択肢がない。

僕はブレーキを踏み、車を止めて外に出た。

「姉さん、ここなの？」

「そうだぞ、次はここで撮影する」

僕は目を丸くしながら田の前にそびえたつ建築物の全体像を必死につかもうとする。

「姉さん、これ本当に借りられたの？」

「ああ、借りられたぞ。どうだ、驚いただろ？」「

姉さんはえっへんと胸を張つて自慢する。

「驚いたけどさ、本当に大丈夫なの？僕は嫌だよ、あとから無許可だつたなんてオチは」

「なんだよ大和、素直に褒めろよ。ちゃんと許可だつてとつてあるつて」

「ならないけどさ、よくこんな場所、姉さんが借りられたねえ」

それはまるで武家屋敷。屋根一面にびっしりと敷き詰められた多くの瓦は見ていて壯觀だ。

家の前にははずつしりとかまえた門が硬く閉ざされていく。

「昔の知り合いにちよつとな。よし、行くぞー皆のものー！」

姉さんはまるで將軍が隊を動かす時のよつた仕草で手をあげ、僕たちを先導した。

そして大きな大きな門の前に立つと、両手でゆっくりと押し始める。門はぎぎぎという地面と木がこするよつた音がするものの、微動だにしない。

それでも姉さんは押し続けるが、人が通れるほど門が開く事はない。「ぐぐぐ、すげー重いぞ、この門。どうなつてんだ」

姉さんは足を踏ん張らせながら両手で押し続けるが、いつも前に進まない。

姉さんの馬鹿力でも開かない門があるなんて、少し驚きだ。

「鍵はかかるないの？」

「いや、開いてるはずなんだがなあ・・・ちよつと本氣で押してみるか」

姉さんは一度押すのをやめ、力を緩めた。

そしてその場から一、二歩下がった場所から力を込めて思いつきり押す。

門のそこかしこから木の軋むよつた音が聞こえた。

「あわわわわ」

ぱらぱらと落ちてきた木屑を見て、かぐやが慌てる。

僕も流石におかしいと思い、

「姉さん、もしかしてこの門は押すんじゃなくて引くんじゃないの？」

「え？ 何んだって、そんな馬鹿な・・・」

姉さんは門の少しだけ凸凹した場所に指をひつかけ、軽くこじらりこ引いた。

門は簡単に開いた。

「引っ張れるように持ち手がついてるじゃないか」

やはり姉さんはそんな馬鹿だ。

なんにせよ姉さんの馬鹿力で門が壊れなくてよかった。

僕たちはようやく開いた門をぐぐり、屋敷の鍵をあけて玄関から部屋へあがつた。

「うわあ、すごいなあ」

家の中にも、高そうな壺や掛け軸がそこら中に飾られている。庭の木も丁寧に手入れされていて、池には綺麗なオレンジ色と白の鯉が優雅に泳いでいた。

「綺麗だなあ」

ぱくぱくと口を動かしながら静かに泳いでいる鯉をみてはいると無性に心が落ち着く。

「一九二〇の日までは首位か一位ぐぐこどこのひのこ、最後は絶対五位なんだよな・・

姉さんも違う意味で安らぎを求めて、鯉を眺めてくる。来年に期待しようよ。

「お、そうだ。餌あげなきや」

車の方に駆け出した姉さんは小さな袋を手に戻ってきた。

「ちょっとまた」

慌てて姉さんの動きを止めめる。

「なんだよ、大和」

「何を鯉にあげるつむつさ」

「ん、分かんない。うちの近くの池ですくつた魚。小さいから食べるだろ」

「それたぶんブラックバスの稚魚だよ、入れたら池の中の生態系がめちゃくちゃになっちゃうよ」

姉さんは袋の中にいる黒っぽい小さな魚を覗き込んだ。そして数秒考えた後、

「まあいいや」

の五文字で危険物を池に放流しそうとする。

僕は姉さんを止めながら、子供にいい聞かせるよつて言つた。

「将来的に鯉が食物連鎖の餌食になるからやめてあげて」

「ええい、うるさい。恋するものは誰にも負けない！つまり鯉にも敵はなし！勝利をその手で掴んでみせよ！」

「魚にはエラしかないから無理だよ、やめて姉さん」
（購入する直前まで僕のだった）
僕は姉さんを取り押さえ、姉さんの（購入する直前まで僕のだった）
おやつのせんべいを小さく碎いて池に投げてやることにした。

それにしても、広い家だ。

廊下は長く、部屋だつて何室あるのか検討もつかない。

僕はいくつものふすまを開けながら、どんどんと奥へと進んでいく。
物は少ないが、どの部屋にも掃除が行き届いているようだ。

僕は一際派手なふすまをゆっくりと開いた。

そこはかぐやが衣装に着替えている部屋だつた。

下着姿のかぐやをまじまじと見てしまつ。

パンツに・・・「さきの絵？」

「きやつ」

「うわっ」

僕は一瞬で我に返り、かぐやが叫ぶ前に慌ててふすまを閉める。
「うう」、「めんなさい大和くん。着替えるのに手間取っちゃつて。
あのおの」

「馬鹿！着替えるんならう・・・馬鹿！」

とりあえず逆ギレした僕は、かぐやをけなしてその場を離れた。
あーびっくりした。

いまだに心臓がばくばくと脈打つている。

落ち着こうとしてもなかなか鼓膜から心臓の鼓動が離れない。

このドキドキは一体何なのか。
えーっとあれだ。かぐやが叫んで姉さんが僕を殴りに来るかと思つたーのドキドキだ。

決して・・・その・・・かぐやが子供の時から変化していたのでび

つくりした訳じゃない。

頭を冷やそう。

僕は来た道を戻り、廊下へと続くふすまを開いた。

「うわ！」

またびっくりした、さつきとは違う意味で。

「お久しぶりっす」

「姉さん猿が家にあがってる。おばあさんの猿が挨拶に来てるよ。久しぶりだつて、きっと姉さんの馬鹿友達だよ」

「落ち着け、大和。岩雄だ」

姉さんが後ろからおばあさんの格好をした猿のカツラをとつてみせた。

見た事のある顔、ちょうど一ヶ月前くらいに。

ああ、そうだ。何処の猿かと思えば岩雄くんじやないか。

「ああ、久しぶり。でも何て格好してるの？」

「はい、自分はおばあさん役らしいので」

岩雄くんは着物の帯をさすりながら、恥ずかしそうに言った。

「へ？」

いまいち状況のつかめない僕は姉さんを見る。

「姉さんが呼んだの？」

「ああ、私が呼んだぞ。岩雄のギャラは安くすむからな」

姉さんはいきなり本人の前でぶつちやけた。

僕は少し考え込み、

「あーもしかして岩雄くん、まだ猿として登録されてるんだ」と姉さんに返す。

「人間の役者を雇つより全然安いからな、しかもこいつ果物送つてくれただろ」

何がしかもなのか分からぬが、そういえばそんな事もあったな。姉さんは食べ物の恩と恨みだけはしぶとく覚えている。

まあ、果物は姉さんがすべて食べて、僕は歯磨き粉しか口にしてないけど。

確かあの果物は南国の・・・どいたかな。

よく見れば岩雄くんの肌は少しやけているようだつた。

「少し焼けてるね、岩雄くん。何処の国に行つてたの？」

「はい、ある有名な民族のいる国に行ってたんですけど、もう少しで貢物として神様に捧げられるところでしたよ」

岩雄くんはまいったまいったと、頭をかきながら笑つた。

「大変そうだねえ」

「でも撮影なら、いつでも呼んでください。梅さんが呼ぶならいつだって駆けつけますから」

岩雄くんは姉さんにウインクをしながら言つた。

しかし残念、姉さんは見ていない。

そこにかぐやが着慣れぬ着物で入つてきた。

「ちゃんと着れてるかな、お姉ちゃん」

「いいんじゃないか。どうだ、猿。かぐや可愛いだろ？」

「うお！梅さんこの方誰ですか！？」

猿のテンションが急激にあがつた。

「ああ、言つてなかつたな。こいつかぐや。で、こいつが猿」「簡単すぎる説明を両者にする姉さん。

「かぐやさんか、可憐だ」

「えつと・・・おわるさん？」

かぐやの頭の上にクエスチョンマークがいくつも並ぶ。

「自分岩雄ツス よりしくおなしゃす」

「あ、はい。よろしくお願ひします」

背と頭の大きさに圧倒されて、少しおびえているかぐや。

その様子を見ていた僕とかぐやの目が合つ。

さつきかぐやが着替えていた僕とかぐやの目が合つ。

覗いてしまつたこともあり、僕はかぐやの顔を直視することができずにつづむいた。

かぐやも顔を引きつらせている。

「じゃあ全員着替えた事だし、かぐや一家の家族写真撮るわ」

そういうて姉さんは、三人を並ばせてカメラの前に立たせる。

「おい、大和とかぐやもつと近づけ、入らないぞ。猿、お前は近づきすぎだこの馬鹿」

僕はしおうがなく2歩3歩横にずれた。

「よし、撮るぞ。秒読みー」

「ん、3・2・1」

「じゃあ猿、お前はすぐ着替えて来い」

「おっす、梅さん」

岩雄くんは慌ててカツラをとりながら部屋を出て行った。
おばあさんだけ衣装変えるのかな。

「大和ちょっとこっちこい」

姉さんが手招きして僕を呼び寄せる。

「何、姉さん」

「次のシーンで男が持つてきた無理難題のお宝を出すだろ。それで何を用意すればいいのか分からなかつたから色々候補を持ってきたんだ。だから大和、見て選んでくれ」

姉さんは持参した箱の中を「ソレ」とさぐり僕の目の前に並べ始める。

「え・・いいけど・・・何これ」

「ああ、これな。これは5人組の女子高生バンドが出てくる映画の半券と引き換えにもらえる生フィルムだよ。んでこれが当たりフィルム」

姉さんはどうにか絵を見せようとしているが、部屋が暗くてよく見えない。

「これは駄目だよ。こんなの写真に写らないし」

「そうか?じゃあ次、プロ野球選手のサインボール」

姉さんは少し汚れて茶色くなつたボールを投げてよこす。

「これ誰のサイン?」

「ええつとたしか、なごしまの息子だったかな」

「その人のボールはあんまり価値ないんじゃないかな……つい
うか流石に無理あるでしょ。お宝つていつたらもつと古くても……」

「 その言葉を聞いて、姉さんは箱の中をまた探し始める。

「んー、あつた。すげー古い日本」

「姉さんまじめにやつて」

「んじゅ これだな」

最後に出てきたのは、星のマークが3つ入っているオレンジ色のボ
ールだった。

「これは全部集めると竜が一つ願いを聞いてくれるっていうあれじ
やないの？」

猿のような野菜っぽい人が血眼でこのボールを探し回るアニメが昔
流行ったのだ。

たぶんそのアニメのおもちゃだろう。

演者の中にも猿っぽい人はいるけど、あれは女の姉さんに一発で
されるほど弱かった。

「まあそうだけど。なんか宝っぽいだろ、光ってるし玉だし」

「んー、そうだね。もつこれでいいんじゅない？」

「できたっす」

調度いいタイミングでふすまを開けた岩雄くんが今度は武士の格好
で出てきた。

「これは？」

「こいつ一人一役。求婚する若い武士もやつてもらうと思つてゐ
「いやいや、どう見たつておばあさんと同じ顔でしょ」

正確には同じ猿だろ。

「つるせえいいんだよ、誰も気がつかないって」

「おーい、かぐやーいいかー？」

先ほどよりももつとあでやかな着物に着替えたかぐや。

「よし、撮るぞ。大和、猿にあれ渡しつけよ」

「はい、岩雄くんこれ」

「なんすか、これ。あつ、覚えてますよ。懐かしいなー」

「やつぱり山雄くんも見てた?」

「はい、僕昔から背が高かつたんで、『』遊びはいつも大猿の役ばっかりやらされましたよ」

ああーそれは身長とは関係ないんじゃないかな。

「大和と猿、何してんだ撮るぞー。かぐや、もつと悲しそうな顔しろー、おら猿。ボール置いて、頭下げろや大和秒読みー」

なんだカリズムで僕の名前が呼ばれている気がした。

「はいはい、3 . 2 . 1」

2、因縦図（前書き）

全部フイクショーンです 全部関係ありません

2、四話目

「よーし、毎回の撮影は終わりー。次の撮影は暗くなつてからー」
姉さんはカメラを手に今まで撮った写真の画像を見返しながら叫んだ。

「大和、腹減つた。コンビニで飯買つていー」
「ん、分かつた」

「それで、何でお前までついてくるんだよ」

信号待ち、僕はバックミラーを見ながらかぐやに言葉をぶつけた。
「え、あのあの。だつて・・・お姉ちゃんが・・・」

かぐやは困った表情を浮かべた。

姉さんがいらない氣を回してかぐやをよこしたらしく。

いつもは馬鹿なくせにいらないところだけ気を回すんだから。

別にかぐやと仲が悪かろうが撮影に支障はないだろ。
かぐやだって断ればいいものを、ちゃんと言いつけを守つて車に乗り込んできやがつた。

それで車で一人、遅い昼飯をコンビニに買ひにいくなんてよく分からぬ空間を作り上げてしまった。

「・・・」

信号が青になつたので車を発進させる。

少し走らせると来る途中で見かけたコンビニに到着、停車させる。
店内へ入り、携帯電話にとつたメモを頼りに商品を探した。
えつと、姉さんはカレーライスか。

まあ、無難と言えば無難か。

コンビニの商品でもカレーがおいしくなかつたなんてことないしな。
岩雄くんは・・・バナナ。

単純に好物なのだろうか、それとも野生的なレベルで何かを感じるのだろうか、今度聞いてみよう。

コンビニにバナナは置いていなかつたので、まる「」と一本のバナナが入つたパンを買つことにした。

その後、僕は自分用のおむすびを数個か「」に入れ、お菓子売り場を覗く。

適当にスナック菓子を手に取るとかごこつぱいになるまでつめこんだ。

そこにサンドイッチと大きなペットボトルのお茶と紙コップを抱えたかぐやはがやつてくる。

「たくさんお菓子食べるんですね」

かぐやは僕の顔色を伺いながら微笑む。

「全部姉さんのだよ、お菓子ないと怒るから。あー、か「」に入らないうから悪いけどそれ、自分で持つてレジまで持つてきて」

「あ、はい」

かぐやは商品を細い腕で抱えながら、僕の半歩後ろをついてくる。

「すいませーん」

レジに誰も立つていなかつた。

しじうがなく、店の奥に声をかける。

「はいはい、なんだ坊主」

奥からおじいさんがゆっくりと出てきた。

「うちのコンビニは深夜営業してないからバイトなんて雇わんぞ」「おじいさんは僕をバイトを探しにきた学生か何かと勘違いしたのか、顔を見るなり言い放つた。

田舎のコンビニは二十四時間営業じゃないのか、と驚きながらも反論する。

「お密ですよ」

僕はお菓子の「」をレジにのせた。

「なんだ、密か。早く言えよ」

密だと分かつても態度を変えることなく、おじいさんは商品を袋につめながらレジうちを始める。

「えーっと、200万52円」

「「ええっ！？」

かぐやと全く同じタイミングで声をあげてしまつた。

「絶対計算間違つてますよ。そんな買い物してませんってー。」

「んーじゃあ、2000円でいいや。」

「いいんですか、そんなので。2000円は流石に超えてると思つけど」

おじいさんは「いひつてこひつて」と忠告を無視する。
僕は財布からお金を取り出し、置いた。

なんでつぶれてないんだこのコンビニ。

おじいさんはその2000円を何故かポケットにいれで話しかける。

「坊主たち、アベックか？」

「ええっ！？」

今度はかぐやだけが過剰に反応した。

「そ、そんな、えつと。あの」

顔を真っ赤にしながら体をもじもじと揺らす。

「違いますよ。それにアベックって言つて方はもつ古ですよ」

僕はきつぱりと否定した。

「なんだ、違うんか」

おじいさんは興味を失い、すぐ帰れと言わんばかりにスプーンを適当に袋に突っ込んだ。

そして客がまだいるにも関わらず、さつさと店の奥に消えていった。

「行くぞ」

僕はまだわたわたとしているかぐやを連れて、奇妙なコンビニを出た。

「んー、うまい」

姉さんは自分のカレーライスと僕のおむすび一個をたいらげた。

そして今は腹ごなしに山とつまれたお菓子を食べている。

「あれ、かぐやさんは何処に行かれたんすか？」

器用にバナナだけを食べた後、パンの部分は姉さんが食べたのであ

れは間接キスだと言い張っていた岩雄くんがキヨロキヨロと周りを見回している。

「そういえばさつきから姿が見えないな。

「ああ、かぐやはさつきと飯食つて着替えに行つたぞ。あいつの衣装は時間かかるからな」

姉さんは新しいスナックの袋に手をかけながら言った。

「いいっすよね、着物姿つて」

岩雄くんが天を仰ぎながら田舎を輝かせた。

たぶん頭の中はよからぬ事を考えているのだろう。

「何で？」

「だつて、着るの大変そつだけど、脱がせるの簡単そつじやないですか！」

知り合つてから今まで一番いい笑顔を見た気がする。

「梅さんは着物、着ないんですか？」

岩雄くんは躊躇なく人の姉を毒牙にかけた。

よくあの発言の後に、そんな質問できるなと関心しながらも姉さんを見る。

「なんだ猿、私の着物姿が見たいのか？」

姉さんはノリノリでからかい始める。

「はい！見たいっす！」

「じゃあ、今日のギャラなしでいいか？」

「はい！いいっす！」

簡単に姉さんの口車に乗り、ただ働きの確約をする岩雄くん。それじゃあまりにかわいそうなので助け舟を出す。

「騙されてるよ、岩雄くん」

「いや、自分見られるなら給料がなくつたつて……」

そこまでか、猿。

「姉さんは帶でミーマラ男みたいになるのが関の山だよ」

「あんだとお？」

姉さんが立ち上がりうとしたところで、タイミングよくかぐやは入

つてきた。

僕はかぐやの姿を見ながら、思わずつばを飲み込んだ。

前の一着の着物とはあきらかに違い、金色の多く使われた豪華な衣装。

きらびやかで、圧倒されるような美しさでありながらいつまでも見たいような気持ちにさせる。

僕はかぐやから目が離せなくなってしまっていた。

その様子を見た姉さんが、ニヤつきながら話しかける。

「おい、大和。かぐやはどうだ？」

「なんていうか・・・綺麗だ。髪も長くて、染めてないから真っ黒だし。本当にお姫様みたいな・・・」

ぼーっとしていた僕は思わず本音を言ってしまった。

「おー、そうかそうか。綺麗か。」

姉さんのその言葉で現実に戻ってきた僕は慌てて、

「あれ、僕なんて言つてた！？」

と姉さんに詰め寄った。

その横でかぐやが顔を真っ赤にしながらがたがたと震えている。目にはどんどん涙が溜まつてきて、今にもじぶれそうだ。

「大和、車の鍵は？」

姉さんが僕の肩を叩いた。

「え、ここにあるけど」

ポケットから鍵を取り出し、姉さんに見せる。

姉さんはそれを奪い取り、家の外に向かって思いっきり投げ飛ばした。

「何すんのさ！？」

僕は慌てて鍵を拾いに走る。

「よし、もう行つたぞかぐや
「うつ・・・・・」

「大丈夫か？」

「お姉ちゃん、聞いた!? 大和くんが綺麗だつて……！」

「あ、ああ。聞いたよ、聞いたよ

「あれ、私その時どんな顔してた？あれあれ！？」

「うう、アツグーの捲りをこ
落ち着けよ かぐき 五位
お茶食め」

「ひう」

「落ち着いたか？」

「うん」

「それにしても本当に給料なくていいのか？」

「いいよ、だつてまた大和くんと会えたし」

「 そ う か 。 そ れ く ら い な ら お 安 い 御 用 な ん だ が な 」

「それにお姉ちゃんが大和くんとの仲を取り持つてくれるんでしょ

「……………」

二

「ええ！誰それ！？大和くん彼女いたの？」

「いや、いない」

「じゃあ何なのその子！？」

「何つてこりが、まあ一緒に住んでるんだけど」

「付き合っていないのにすでに同棲してるの！？」やああああああ

「落ち着け、かぐや。いるだろ一人」

「え、……もしかしてひなたちゃん？」

「アーラ、ハサウエイが死んだ？」

「ううん、いいよ。お姉ちゃん、黒いな」

「誰ですか？ひなたちゃんつて

「なんだよ猿、いきなり入つて

「娘!?」いやああああああああああああああ

「姉さん何すんのさー！」

汗だくで戻ってきた僕は姉さんを怒鳴った。

「もう少しで側溝に落ちるところだったんだよ。これが無くなったら家に帰れないじゃないか」

「あーもう、うるせえうるせえ。悪かった悪かった」

「大体姉さんは、・・・どうしたの岩雄くん。動かないけど

「知らない」

「姉さん、何かしたの？」

僕は疑いの目を向けた。

「何もしてないよ。信じてないな？分かつたよ、直せばいいんだろ？」

姉さんは腰をかがめて、利き腕の右手の袖をまくると大きく広げた。「はっ。梅さんの思いがけない告白で、一瞬気を失っていたつ」「ラリーアート！」

その日、宙で一回転して地面に倒れた岩雄くんの意識が戻つてくる事はなかった。

2、五語田（前書き）

全部フイクショノです 全部関係あつません

2、五話目

栄枯盛衰。

昼の間、空の上で幅を利かせていた太陽はゆっくりと沈んでいく。次第に辺りは暗くなつていき、丘の下の家々に明かりが灯つた。一面を黒のペンキで塗りつぶされた空は、静かに漂う月を迎える。

「月が綺麗だなあ、大和」

姉さんは僕を庭に連れ出した。

「そうだね、今日はちょうど満月なのかな」

僕は口をぽかんと開けて、真ん丸の月を見入つてしまつた。

空気が澄んでいるせいか、ここは月だけでなく星もよく見える。

「これが正真正銘の満月だぞ。何ていつたって事前に調べて、撮影を今日にしたんだからな。感謝しろよ~こうやつて満月の元で撮影できるのは私のおかげなんだから」

姉さんは僕の頭をぐしゃぐしゃに撫でまわしながら白懶げに言った。なるほど、何で急に撮影したいなんて言い出したかと思つたら、そういうことか。

恐らく姉さんはテレビやネットか何かで満月の日付の情報を仕入れたんだろう。

今回、なぜ姉さんの急な思いつきが流れなかつたのか。

それはきっと満月の日付が決まつていたからだ。

姉さんは日々の勉強はほとんどしなかつたが、夏休みの宿題なんかは新学期までにちゃんとやつていく人だつた。

あとは宿題の半分を弟に押し付けていなければ、頭もだいぶ良くなつたことだらう。

何にせよ、姉さんは自先のしつかりとした目標と期日があれば行動する人なのだ。

「大和、月ではウサギが餅をついてるんだぞ」

僕はビクンと体を震わせた。

姉さんが急にメルヘンチックなことを言い出したので、体が拒否反応を起こしたからではない。

僕はウサギという単語に反応してしまったのだ。

先ほど、鮮明に眼球に焼き付けた記憶。

ついかぐやの下着の上でウサギが餅をつく様子を想像してしまつ。いかんいかん。

意識をしつかり持つて妄想を消し、邪念を吹き飛ばす。

「餅食いたいなあ・・・」

やはり食べ物の方に流れた姉さんを見て、慌てた自分が馬鹿らしくなつてくる。

「そろそろ撮影しようよ」

「ん、そうだな。よしかぐや呼んでこー」

姉さんは名残惜しそうに窓を見上げながら、ゆっくりとカメラを取りに部屋へ戻つていった。

「よーし、撮るぞー」

姉さんがさつき作ったばかりの急いでひらえのメガホンを口に当てる。叫ぶ。

縁側で月を眺める、かぐやと僕。

たぶんこの本で一番重要なシーンだ。

「かぐやー、表情かたーい」

姉さんはカメラを覗きながらかぐやに注意する。

先ほどから隣で見ていたも思つ、かぐやの表情は固い。

というか、拳動不審といつか小刻みに震えているのが気になつてしまふがない。

「姫が貧乏すつとかやめるよな。『写真には『らなりけび、イメージが崩れる』

「あつ、じつ、じめんね。今やめるから」

かぐやが顔を真っ赤にしながら謝る。

それでも正座したかぐやの足は止まらなかつた。

「何、トイレ?」

「ちちちち、違つよ。あのあのあの」

わたわたと手の前で両手を左右に振るかぐや。

「かぐや、ちよつと来い」

姉さんが少し怒鳴ったような声でかぐやを呼びつけた。

「な、何?お姉ちゃん。はづき」

かぐやは慌てて歩き出でたとして、自分の着物のすそを踏み勢いよく前にころんだ。

どんくわこやつ。

打ちつけた場所をさすりながら、ゆりくりとカメラの方へ近づいていく。

姉さんと一言二言喋つた後、かぐやが戻つてきた。
やけに落ち着いた表情をしている。

体の振動も止まつたようだ。

「よーし、撮るぞー。表情作れかぐやー」

パシャリ

フラッシュが光る。

そういうえば今回は僕に秒読みをやらせなかつたな。

「よし、オッケー。いい顔だつたぞかぐや」

満足した笑みを浮かべる姉さん。

僕は立ち位置の関係で見えなかつたかぐやの表情が、ビックリも気になつてしまふがなかつた。

「姉さん、質問」

僕は台本を眺めながら、台本の作成者である姉さんに指摘した。

「ん、何だ?私のスリーサイズなら教えないと」

「そんなこと聞かないよ、あの猿じゃないんだから」

「確かに、大和はある猿じゃないしな」

言いたい放題言われている岩雄くんは、姉さんの黄金の右腕のせい

でまだ氣絶している。

「次のシーンだけど、沢山の武士が出てくるじゃない?」

「ん、ああ。そうだな」

姉さんも自分用の台本をパラパラとめくらながら答える。

「どうすんの? 武士候補の一人はあそこでのびてるけど
主に姉さんのせいだ。

それでも倒れている岩雄くんの顔がどこか安らかに見えるのは氣のせいだろうか。

「ああ、それな。大丈夫だ、少し待つて!」

姉さんは僕のポケットから携帯電話を抜き取り、どこかに電話をはじめた。

「ん、すぐ来い。場所は分かるだろ。ん、えー? あー、まあいいや。
来い」

姉さんは少ない言葉を交わし、電話を切った。

「もうすぐ来るぞ」

何やら雲行きのおかしくなるような声が聞こえたが・・・。

姉さんは携帯ストラップを指に通し、電話をじどぐるぐる回す。
キキーッ

言つて十秒もしないうちに、門の前に車が止まつた。
見た事のある黒塗りの車。

これもまた見た事のある大男たちが降りてくる。

「おお、こっちだ」

姉さんは手をあげて男たちを呼び寄せた。

姉さんの姿を見つけた男たちは庭に一列に並び、

「姉御、今日もよろしくお願ひします!」
と大声を張り上げた。

「おう、よろしくな」

姉さんも片手を振り上げ、その挨拶に応じた。
列の中心にいた男が近づいてくる。

「これは、監督さんじゃないですか。お久しぶりです」

「ああ、悪役事務所の方ですね。」の前はどうも……
腰を低くして、頭を下げる。

男はサングラスをはずし、優しい笑顔を見せた。
どうやらまだ愉快な勘違いは続いているらしい。
そういうえば姉さんの呼び方も変わつてゐるな。

「それで、今日は……」

「ええ、姉御から召集がかかりましてね。今日は頑張りますよ……」
男は元気いっぱいに意気込みを表明した。

「そうですか、……ではこちらで衣装に着替えてください」「
男たちは几帳面に靴を揃え、縁側から部屋の中へと入つていった。

「着替えましたかー？」

ふすまを開けて、衣装を確認しに来た僕を男たちが向かえる。
「どうでしょうか」

男たち、いや今は立派な武士たちは一列に並んで立つていた。
サングラスとスーツを脱いだ男たちは見違えるほどに爽やかだった。
「どうだー？」

そこに姉さんが何か断りをいれるでもなく入つてくる。

「おお、お前たち男前になつたじゃないか」

姉さんは一人の肩を叩きながら言つた。

「…………ありがとうございます、姉御」…………

いちいち暑苦しい武士たちだ。

「姉さん、武士が持つ『や刀はどー?』?」

「刀はあつちにあるぞ」

「『』は?」

「・・・

姉さんの動きが急に止まつた。

黙つたまま、壁の一点を見つめている。

「監督さん、心配しないで下さい。ちゃんと持つてきます」

男たちが一斉に着ていた衣装から何かを取り出した。

黒い物体。たぶん普通に生きていれば見る事は一生ないであろう代物。

それは紛れもなく銃だった。

「ひつ」

僕は後ずさりして、生睡を飲み込んだ。

「すいません、姉御。一般人の我々では本物が手に入りませんでした」

男たちは土下座して謝る。

「あ、え？ それ偽物？」

「はい、モデルガンです」

男は持っていた銃を僕に渡した。

なるほど、確かに素材はちゃつちく、小さな丸い玉を入れるようになっている。

「でも何でこんな物を？」

「ええ、姉御から撃てる物を持参しろとのことでしたので」
誰かさんの孫じやなくとも、体の縮んだ高校生探偵じやなくとも、
簡単に謎のすべて解けた僕は姉さんに射るような眼差しを向けた。
姉さんはいまだに壁の一点を見続けていた。

「どうすんのさ、姉さん」

ここまで姉さんが立てたスケジュールと準備は僕の思つていた及第点を遙かに上回っていた。

しかしここでとうとうやらかしてしまった。

だつておかしいもの。

このお話の時代に銃なんてない。

それに男たちの衣装とどうしたって銃は合わない。

お話にならないくらいの問題が今になつて露呈した撮影を、姉さんはどうやって舵取りするのかと思えば、

「つるせー、なんとかなるだろ。行くぞ！」

それだけの言葉で姉さんはきびすをかえし、男たちを引き連れて庭に出て行つた。

「よーし、謎の発光体が上空にあるで行くぞ。お前たちは上に向かつて銃を撃つてる武士だ、分かつたか？」

「はい！」

「はい、じゃないだろ。

何事もなかつたかのように姉さんは撮影をはじめた。
かぐやは当然、何がどうなつてるとか分からぬといつた表情を浮かべている。

「その後に、大勢の武士が寝てしまつたシーンも連続で撮るからな。
おい、聞いてんのか大和」

「あ～、聞いてるよ～」

返事もどこか力の抜けた返事になる。

「よーし、撮るぞ。大和秒読みー」

「3・2・1」

空にシャッター音が響き渡る。

「次、倒れろー。・・・よし、大和秒読みー」

「3・2・1」

撮り終えた後も、地面に倒れている武士たち。
その手にはしっかりと拳銃が握られていた。

2、六話目（前書き）

全部フイクショーンです 全部関係ありません

2、六話目

「じゃあ私は準備があるから」「ううん、お前が詰め寄る前に姉さんはもう奥の部屋へと消えちゃった」

僕は倒れている武士姿の男たちに声をかけ、土を払つてから部屋の中で待機してもらうことにする。

「はあ・・・」

照明機材を持ちあげる手がかじかむ。

ここにきて、だいぶ疲れを感じてきた。

僕は自分の手に息を吐きかけながら、姉さんに叩き起こされて始まつた今日を振り返つた。

と、言つても考へる事は一つ。

かぐやとの再会だ。

一日一緒に過ごして感じたのは、かぐやはかぐやのままだったってことだ。

無口でいつもおどおどしているあの頃のかぐやと同じ。

それはつまり僕が嫌つているかぐやのままだったといふこと。しかし何故だろう。

あの頃のようにこみ上げてくるような怒りはない。

多少食わざ嫌いのような嫌悪感はあるものの、田んぼに落としてやりたいとか、財布の中のお札を全部硬貨にしてやりたいとか、鞄の中に魚の刺身をいれてやりたいとか、そういうことは思わなくなつた。

これは単に僕が大人になつたからなのか、それとも他に理由があるのか。

いくら考へても答へは出なかつたので、僕は池の周りの石に腰掛けながら鯉をぼーっと眺めることにした。

ざつざつざつ

誰かが近づいてくる。

恐らく準備を終えた姉さんだらう。

やつぱり今回も姉さんは出演するのか、と思いつつ顔を上げた。しかし、そこに立っていたのは姉さんではなく、かぐやだった。かぐやのきらびやかな衣装が月明かりを反射してキラキラと輝く。しかしそれ以上に美しく、存在感を發揮していたのはかぐや自身だった。

綺麗というよりは、艶めかしい。

思いつめたような顔をして、僕の数歩前の地面を見つめている。文句の一つでも言つのかと思えば、何も言わず黙つたまま立ち尽くしている。

二人とも無言のまま一分ほどが経ち、たまらず僕の方から口を開いた。

「なんだよ

「・・・」

返事は返つてこない。

僕はそれを確認し、石の上から腰をあげその場を立ち去りたとする。

「あの！」

いきなりかぐやが大声を出したので、びっくりしてその場で固まってしまった。

なんだ、と思いつつも口から言葉が出て行かない。

「あの！私、緊張しちゃて、ちゃんとしゃぶれなくなつちゃうから・・・その・・・」

かぐやの体が小刻みに震える。

手を固く握り締め、ありつたけの声を絞り出しているようだ。

「私は大和くんと仲良しになりたいでぶ！……

かぐやの叫び声が辺りに響き渡った。

かぐやは吐ききつた息を取り戻すため、大きく息を吸う。

呼吸を整えると同時に、それは嗚咽に変わった。

そしてかぐやの目からは涙が零れ落ちる。

ぽろぽろと地面に落ちて、それは染みに変わった。

「お、おい。泣くなよ、僕が泣かせたみたいだろ」「僕は慌ててかぐやの側へと駆け寄った。

「みたいじゃねえよ、馬鹿」

いつの間にか姉さんがかぐやと僕の隣にいた。

「うつ・・・おねべちゃあああん」

「ああ、分かった分かった。大和、ちょっとあつち行つてろ。うわ、鼻水つけんな汚い！」

僕は姉さんに言われたとおり、奥の部屋へとあがつた。だいぶして姉さんだけが部屋に戻ってきた。

「もう大丈夫だ。でもかぐやが顔合わせられないって

「ああ、うん。まあそれはいいんだけど」

僕は何とも言えない気持ちになつた。

「お前まで泣きやうな顔すんなよ、ほら次撮つてさつやと終わらせるや」

姉さんは僕の頭を優しく撫でながら言った。

「うん。ていうか、姉さんその格好何なの？」

「やっぱり着れなかつた。大和直してー」

姉さんは着物の上から、体に帯をぐるぐる巻きに巻きつけた格好だつた。

首には羽衣をつけている。

ミイラ男じやなくて、ロープで捕まつたまま首吊りをする人が正解だつたか。

僕と姉さんは部屋に入り、帯をほどいてまき直した。

「あつ」

岩雄くん、寝ている場合じやないぞ！

君が給料を捨ててまで見たがっていた光景がまさに今ここにあるんだ。

起きろ、岩雄。起きろ、猿！

・・・駄目だ、返事がない。やっぱり死体のようだ。

「じゃあ、撮つてくるからお前はいいで待つてね」

姉さんは僕を置いて部屋を出た。

それはきっと僕とかぐやに対しての気遣いだろう。

その後の写真には、月からの使い（姉さん）に手を引かれる、泣きすぎでウサギのように田を真つ赤にした女の子が写っていた。

そして姉さんは、お話にこういつ一文を付け加えた。

『おじこさんとおばあさんとのわかれをかなしんだひめは、なきながらつまくひとぼりしていました。』

「あつはつはつ、しかし傑作だつたな」

「笑いすぎだよ、姉さん」

撮影を終え、ようやく昨日までたく発売にこぎつけた。

今回はおかしな部分があるにはあつたが少なかつたこと、そして何よりかぐやのビジュアルのお陰で、店頭に置いてくれる本屋さんが増えた。

と言つても、前よりは増えたというだけでそれでも数は少ない。

今回の売り上げもきっと水平線を辿ることになるだろう。

「また、一緒にかぐやと撮影できたら、嬉しいかな、って思つだけ。つて何だそれ、あつはつはつは」

「まだ言つてたの姉さん。もういい加減飽きてよ」

「いや、もう最高だつたよ。録画しどけばよかつた。そしたらかぐやと一人でも見た見れたのにな」

姉さんは腹を抱えて笑つたまま、ソファーに倒れこんだ。

「あー、ふう。全く、かぐやも大和も口下手で困るなあ」

「つるやこよ、姉さんこそ言葉より手が先に出るタイプのやせに

「ああ?」

「何でもありません。・・・それにしても岩雄くん置いてきてよかつたのかな」

「大丈夫だろ、書置きしたし。あいつ旅慣れしてるしな」
書置きって、先に帰るぞの五文字しか書いてなかつたあれのことか?
適當だなあ、ほんとに・・・。

「さて次はどんなの撮ろうかなー」

「当分はやめてよね。お金無くなつちやうよ」

「これで明後日くらいに叩き起こしたらびっくりするかな

「・・・」

「あ、そつだ大和。お前に言わなきゃいけない」とがつたんだ」

この三日後、とある掲示板でこんな名前のスレッドが建つた。
『すげー可愛い子の載ってる絵本買つてきたー』

・・・

2、六話目（後書き）

2話目終り、3話目に繰りく

3、一括図（複数用）

全部マイクションです 全部関係ありません

「よし、今日からお前はひなただ
・・・」

「私は梅。で、いっしが大和。お前の・・・あー、おじさん?」「ちよつと姉ちゃん、おじさんはやめてよ。せめて兄さんで勘弁してくれないかな」

「お兄・・・わやん?」

「せうだ、こいつはお前のお兄ちゃんだ。だからこいつでもこも使つていいぞ」

「はいはい、ちよつと姉さんは黙つてて。ひなたちやん、ひなたちやんは絶対に姉さんみたいになつちや黙田だよ」

「あんだとー!?」

「・・・」

「姉さん、起きてよ」

部屋のドアをノックしながら何度も呼びかける。

「・・・」

しかし部屋からの応答はない。

「入るー、姉さん」

僕は一声かけた後、勢いよくドアを開けた。

「・・・いつ見ても汚い・・・」

姉さんの部屋は足の踏み場もないほど物が散乱している。

僕はそれらを足でとかしながら、少しずつ姉さんの寝ているベッドに近づいていった。

漫画、CD、・・・これは卒業制作?

一体いつものだらづ。

姉さんのベッドを中心に物が層を作りながら広がっている。

それはさながら、水面に水を一滴垂らした時にできる波の広がる様子に似ていた。

僕はその中から、厚めの漫画雑誌を拾い上げ、自分の頭の上にかまえた。

何層も何層も詰みあがつた物の地層をどけ、姉さんの側にやつとこさたぢり着き声をかける。

「姉さん、いいかげん起きてよ」

「んあ、・・・んん」

案の定、簡単には起きてくれない。

「姉さん、姉さんつてば」

「んあ、・・・あちよーー！」

寝ぼけた姉さんは僕の頭にものすごい速さでチヨップを繰り出した。僕はその攻撃を間一髪のところで雑誌でガードする。

「んお、なんだ！？なんだ、大和か」

枕元に無数に転がっている碎けた皿覚まし時計のようにされなくてよかつた。

「朝だよ、皿が覚めた？」

「んー、あと50分」

せつかく体を起こしたのに、また座つたまま横に傾きベッドに倒れこんだ。

「姉さんは50分どころか起きないだろ」

「じゃあ50話」「話

「そこまで続いてる自信ないよ・・・」

姉さんは枕に顔をうずめ、本格的に一度寝の体勢に入った。

「ちょっと、寝ちゃ駄目だつてば」

「んー・・・梅ちゃんクイーズ！」

「おつ、久しぶりだな。

「サイはサイでも角の生えていないサイってなーんだ」

「白菜」

「ぶつぶー」

「チンゲンサイ」

「はずれー。野菜じゃなーい」

「天才」

「ちつがーう」

「今日はひなたと出かけるんでしょ、起きなさい」

僕は姉さんが顔をうずめていた枕を横から抜き取った。

姉さんはむくりと倒れていた体起こし、

「正解。ひなた、おはよう」

と、いつの間にかドアの前に立っていたひなたに笑って挨拶をした。

「姉さん、ちやんと見てる?」

「見てるよ、うるせーなあ」

姉さんの寝坊のせいで完全に出遅れた。

休日と言つ事もあり、朝早くから遊園地の駐車場は車で埋め尽くされている。

今は血眼で車の止まつていらない駐車スペースを探しているところだ。

「あつた」

ひなたは表情を変えず、口だけがぱくぱくと動く。

「どこだ、どこだ?」

姉さんはひなたの指差した方に視線を向ける。

「おっ、本当だ。空いてるぞ大和」

「え、どいじー」

僕もきょろきょろと辺りを見ました。

「あつ、本當だ」

すでに通り過ぎた後ろの方に車の止まつていないとこりがある。
しかし見つけた時には遅かつた。

後ろからやってきた車が急いでそこに車体を滑り込ませた。

「あーあー、しつかりしろよ大和ー」

後部座席から背中に軽く蹴りが入る。

「無茶言わないでよ。こんなに車いたらバックできないんだよ」「そこを何とかするのが男だろー。なー、ひなた」

「ん」

ひなたはうんうんと頷いた。

バックミラー越しに一人の視線を感じる。

「次はあっちが空いたぞ！」

「ん」

姉さんが後部座席から身を乗り出して指をさした。

「えつ、どじどじ？」

「うつモー。ふふふ、大和騙されてやんの。いえーいひなたハイタツチ」

「ハイタツチ」

もうこのコンビはほつておこい。

入園する前からある意味でのアトラクションを体験した僕らは結局入場ゲートからかなり遠いところに車を止めた。

車を降りた僕の足元に、ひなたがちゅーちゅーこと近づいてくる。

「ん」

ひなたは無表情のまま右手を僕に突き出した。

「そういう時は手をつないでって言わなきゃ駄目だよ。言葉にしないと何も伝わらないよ」

僕の言葉を聞いて、ひなたは突き出した手をひつこめてしまつ。

「うわっ、意地悪だな大和」

後ろで茶化す姉さん。

ひなたは少し考えた後、

「つないで？」

照れながらもう一度手を伸ばした。

姉さんが満足げに微笑みながら右手を少し浮かせた。
すでに左手は姉さんの右手とつながっていた。

僕は右手でひなたの頭を撫でながら、左手でしっかりと小さな手を握った。

人、人、人。

どこを見ても人だらけ。

家族連れやカップル。学生服を着た団体もいる。入園するだけでも一苦労だったのに、これだけ人が多いと入ってからも大変そうだ。

「風船もらいに行こうぜー」

姉さんがひなたの手を引きながら、風船を持った遊園地のマスコットめがけて突進する。

「ひやあっ、ぐふっ」

そのままのスピードで姉さんは着ぐるみとぶつかり、長い耳をしたウサギのマスコットがその場に膝から崩れ落ちた。しかし倒れてもなお、手に持った風船は絶対に離さないプロ根性に感動すら覚える。

ウサギは倒れたまま時おりぴくぴくと跳ねる。

分かるぞ、ウサギよ。僕だって姉さんのタックルを生身でくらったことがある。

車に轢かれたみたいだろ？ 実際そうなんだよ。

猛スピードで坂を下ってきた自転車と真正面からぶつかって、相手の方を病院送りにするような人なんだよ。

たぶん姉さんは人間の皮をかぶった猛牛か何かなんだ。

そう、姉さんはバッファローマンだ。

僕は他人のふりをしながら、なるべく遠くでウサギを見守る。

（おっ、起き上がるか？）

ウサギは腕をがくがくと震わせながら、重たい体をゆっくりと持ち上げる。

（抗議するか？ しかしその時にはお前の真っ白な毛皮は真っ赤に染まっているぞ）

ウサギはもう少しで立ち上がるといひで、あえなく倒れてしまった。

捨て身のタックルの反動で一緒に倒れていた姉さんが立ち上がる。

「ふう、ウサギ狩り終了。風船はすべてもらっていくぞ」

すでに山賊だな、あの人は。

無情にもウサギが死守した風船をすべて奪い取り、「いい戦いだつたぞウサギ。ほらひなた、風船だ」と言って、そのすべてをひなたに渡した。

ひなたは眉一つぴくりとも動かさずに黙つたまま両手にたくさんの風船の紐を握っている。

「・・・浮かないな」

「浮くわけないだろ馬鹿」

思わずつっここんでしまった。

立ち止まって動向をうかがっていたギャラリーの視線が一斉に僕に向いた。

「何だとー！？ひなた軽いから浮くかもしれないだろ」

「風船おじさんなんてもう流行らないよ馬鹿。ほら、もう行こ。係の人来ちゃうよ」

「ちっ、人のことを馬鹿馬鹿と。覚えてろよ大和・・・」

僕はひなたと姉さんの手をとり、逃げるようこそその場から立ち去った。

3、一括図（複数用）

全部ハイクションです 全部関係ありません

「おー飛んでつたなー

色どりの風船が青い空に吸い込まれていく

風船はひなたの手を離れ、上へ上へと舞い上がつていつた。

入
れ
る

卷之三

「ミリミリ、もう戻しにハーフギアばつぱりジ

るから「元氣出せ」

娘さんは強手は僕の過ぎぎた口はボクノモンをねじこむ

余計にのど渴くわ。

「僕が途中からひなたを背負って走ってたの見たでしょ？」

1

儀の間に座りていたが立せられ、頭をかたぐれた。

ね。確実にしとめたと思つたんだがな

指をポキポキと鳴らしながら、なぜか嬉しそうに笑う姉さん。

て
驚
いた

が皮へりで

「私が本気で振りぬけば今度こそ確実に落とせる自信はあつたぞ」

「アーティスト」

全治一週間。当時中学生だった姉さんが、学校の避難訓練に駆けつけた消防署のマスクコットキャラクター、消火貴君に負わせた怪我だ。

「さてと、何に乗ろうかなー。ふつふふーん」
鼻歌を口ずさみながら、パンフレットを広げる。

「ひなたも乗れるやつにしてよ、姉さん」

「オッケー オッケー。じゃあこれだな」

姉さんは田舎でのアトラクションに向けてまっすぐ歩き出した。

「これならひなただって乗れるだろ」

「ん」

姉さんの案内でたどり着いたアトラクションは言わずと知れたティーカップ。

これなら身長制限もないしひなたの様な小さな子供でも大丈夫だ。
列もそんなに長くないし、順番はすぐに回ってくるだらう。

「姉さんには普通だなあ。てっきり姉さんの事だからマスク
アシヨーを見に行って一匹ずつ血祭りにあげていくのかと思つたけ
ど」

「それもいいが、」

それもいいんだ。

「こっちの方が面白いだろ」

姉さんはにかつと笑みを浮かべた。

「パパー、愛もう立てるの疲れたー」

「なんだ、愛はしようがないなあ」

少し前に並んでいたひなたと同じ年齢くらいの少女が父親に抱き上げられた。

「あつ、あれにも乗りたーー」

「ちよつと待ちなさい、健也」

違うアトラクションに向けて走り出す少年を慌てて止める母親。
あれくらいの頃はじつとしていることができないからなあ。
僕もそうだったなあ、と過去を懐かしんでみる。

しかし現在進行形でその年齢のひなたは文句一つ言わず僕らの隣に
並んでいる。

僕はひなたのつやつやな黒髪をなでた。

「何？」

「なんでもないよ」

不思議そうな顔で僕の顔を覗き込む。

「ひなた、大和の足に抱きつけ」

「ん」

姉さんの指令に忠実に遂行するひなた。片足だけずつしりと重くなつた。

「前に進んだぞ、大和。ほらきびきび歩け」

「ぐつ・・・分かつたよ姉さん」

僕は足にひなたを巻きつかせたままゆっくり歩を進めた。

「だいぶ進んだな、私たちは次くらいか？」

「そうだね」

一度に乗れる人数も多く、一回の稼働時間もそう長くない。前にならんでいた列の人間はあつという間に減つていった。
「では次の方、搭乗をはじめてください。後ろの方は前にお進みください」

係員が後ろの方にも聞こえるように大きな声を出した。

「行くぞ、ひなた大和」

僕はまだ誰も乗っていないカップを見つけて乗り込んだ。

「さつさと奥につめろよ」

姉さんが僕の背中を押しながら乗り込んでくる。

「んじや、危ないからひなたはこっちな」

「えつ」

姉さんは開いていた隣のカップに乗るようひなたに言い、ひなたもそれに従う。

「どうした？」

「えつ、ちょっと待って姉さん。何でひなたを一人で隣のカップに

乗せたの？」

「乗せたの？」

言い終わるのが先か後か、開始のブザー音がけたたましく鳴り、カップが回転を始める。

姉さんは僕の顔を見つめたままにたりと笑い、

「おらおらおらおらあああああ

カップの中央にあるハンドルを回してぐんぐんとカップの回転する速度をあげた。

「止めて止めて止めて止めてーー！」

「うるさい！」

周りの風景が自分を中心ぐるんぐると回り続ける。

カップの速度はなおも上がり続け、これ以上速くならないといひまできたようだ。

うつ・・・口からもう色々と出そう・・・。

「不満と説教以外なら出していいぞ。わはは」

超スピードのカップを樂々乗りこなしている姉さん。

その時、一瞬だが視界の中にひなたを見つけた。

まるで一つも波がおきない湖の水面のような表情で、そこに座つている。

・・・。

周りではたくさんの親子連れが笑顔を咲かせていた。
僕はなんだか悲しい気持ちになった。

「ちつ、このスピードに慣れてきたか。そうだ大和、さつきはよくも人のことを馬鹿呼ばわりしてくれたな。そんなお前に人は風船がなくても飛べるってところを見せてやる」

「え？」

姉さんはそう言つて、僕の胸倉を掴んだまま立ち上がった。
その場で浮き上がった僕を襲つたのは、すごいパワーの遠心力。
僕の手足はカップの外に投げ出されたまま、宙吊り状態になる。

「姉さん、死ぬ死ぬ死ぬー！」

「はつはつはつ、お前今飛んでるぞ。どうだ、空を飛ぶ気分は？」

「振舞わされてるだけだー！今すぐ降ろせーーーーー！」

「きやー！」

乗っていた親子連れが、はたまた列で並んでいた人か。
どこからか聞こえた叫び声で、ティーカップは緊急停止された。

「怒られちゃった」

姉さんはしゅんとしながら、ひなたに報告した。

「あんなに怒られたのは初めてだよ。怖かったよな、鳥人間」「姉さんは怒られてもすぐに忘れるだけだろ、この鳥頭人間」
僕はベンチに横になつたまま姉さんを怒鳴りつけた。

その後、姉さんと足元のふらつく僕は揃つて他の建物に連れて行かれ、係の人につづいて説教をされた。

つまみ出されていないのが不思議なくらいだ。

しかし僕は怒られている最中もずつとひなたのあの顔が気になつていた。

楽しそうでもない、寂しそうでもない。
無表情で無感情。

「姉さん次からは」「分かつてると。復讐も終わつたし、次のアトラクションは三人で乗ろうな、ひなた」「ん」

ひなたは小さくうなづいた。

「次はどこにすっかなー」

ベンチから動けない僕を尻目に、姉さんが次に乗るアトラクションを探している。

「大丈夫?」

ひなたは僕の頭の隣にちょこんと座り、頭をなでた。
「こんちあつす」

何処からか声が聞こえた。

しかし目の前には誰もいない。

「大和さん、下っすよ下

目を少しだけ下に傾けてみると、ベンチよりも下で四つんばいで伏せている猿がいた。

「大和、ひなたの耳抑えろ」

「うん。ひなた、僕がいいつて言つままで口を閉じて。」

「ん」

ひなたは固く目を閉じ、僕は起き上がってひなたの耳に両手を添えた。

「梅さんもこんちあっす」

「教育的指導!」

「ぶふあ！？」

茶色の全身タイツを着た懐かしいスタイルの岩雄くんが姉さんの拳によつて吹き飛ばされる。

「何やつてるの、岩雄くん」

特に心配もせず、岩雄くんに話しかけた。

「いてて、いや、バイトをですね」

「教育的指導!」

「うお！？」

すんでのところで岩雄くんは姉さんの左フックを避ける。

「ぬつ！？」

「姉さんストップ。追撃したら流石に指導じゃなくて体罰になっちやうよ。それに話が進まないから少しijjとしてて」

「あつ、あり（がとう）」ぞこます、大和さん

岩雄くんがへろへろと崩れ落ちながらお礼を言つ。

「へえ、バイト中なんだ。休日なのに大変だね」

「いえ、こんなの何てことないですよ」

「もちろんその格好は・・・猿だよね？」

「はい、そうっす」

嬉しそうに自分が未だに人間になれないことを告げる岩雄くん。

まあそこは岩雄くんの以前を知っている僕らは特に驚かないんだけど

どね。

もうひとつ別の疑問について聞く。

「で、後ろでムチをかまえているこの人は？」

会話中も岩雄くんの後ろで常にムチをかまえたままの女性。場違いというか、ここには絶対いてはいけない格好をしている。

「よくわかんないんですけど、調教師さんらしいです」

「へえ・・・」

まあ間違つてはいないうだけどその説明では不十分だな。

「おー一人は知り合い？」

「いや、今日ここではじめて会いました」

なんてこつた。ますます訳が分からぬよ

困惑の色を隠せない僕に岩雄くんが小声で話しかける。

「それがですね、大和さん。どうやら派遣の会社が遊園地を大人の遊園地と勘違いしてたみたいなんですよ・・・」

気まずそうな顔を浮かべる岩雄くん。

なるほど、それで調教師がボンテージ姿なのか。

いやいや、なるほどとか言っちゃつたけどやつぱり言わせて貰うわ。

なんだそれ。

「ほら、油売つてないでさつさとシヨーの準備行くよ」

パチン

持つていたムチで叩かれる岩雄くん。

「うつ、すいません女王様」

やつぱり女王様だった。

「そこはウキーでしょ、この猿！」

パチン

「ウキー！」

振り返ることなく、寂しげな背中の猿が立ち去つていぐ。

どんなシヨーをする気なんだよ。

つていうかあんな不審者入場させてんじゃねーよ遊園地。

「もういいよ」

姿が見えなくなつたところでひなたの肩を叩いた。

ひなたはゆっくりと目を開ける。

「叩かれた?」

「さう」とした。

「な、なんで?」

「ぱちんって聞こえた」

「ひなた、そんなことよりもお腹すかない?」

「少し」

「じゃあ食べに行こう」

今日一日、絶対にあの一人にひなたを会わせないと心に誓い、僕らはレストランへと向かった。

3、II話題（記述文）

全部ハイクションです 全部関係あつません

パンフレットを頼りに、僕らは飲食店の密集するHコアにやって来た。

和食、洋食、中華。料理の種類が多いレストラン。

常に長い列の出来ているハンバーガーショップ。

お菓子類を専門としたお土産屋もある。

どの店内からも美味しそうな匂いが漂ってくる。

「確かに美味しそうだが、高いなあ」

「そうだね。だから姉さんはあんまりばくばく食べないでよ

「へいへい」

こうじうレジヤー施設のお食事どりは料金が少し高く設定されている。

いつもの姉さんのペースで食べられては大変なので、先に釘を刺しておいた。

「ひなたは何か食べたいものあった?」

「これ」

ショーウィンドウに並ぶ一つのプレートを指差した。

定番の子供が好きそうなハンバーグやらポテトサラダやらが盛り付けられ、ご飯には外国の旗が指してある。玩具もついたべつたべたなお子様ランチ。

しかし値段は大人顔負けの千百円。

流石姉さんの娘、いいとこ見てるよ。

「ぐつ・・・」

お財布のことを考えると多少辛いが、自分から何が食べたいか聞いた手前駄目とも言いづらい。

「うわっ、びっくりしたー」

そのとき、隣にいた姉さんが振り向きざまに声を上げた。
僕も振り返り、同じように声を上げた。

「うわっ、何ですか」

そこに立っていたのは、入園直後に姉さんのタックルを受けたウサギのマスコットだった。

まだ諦めずに僕らのことを追いかけていたのか。

「再戦か？いいだろ、行くぞ！」

姉さんはそでをまくり戦闘態勢にはいる。

岩雄くんを沈めた右腕を使つ氣だ。

ウサギは慌てて首を横にぶんぶんと振った。

「落ち着いて姉さん。次に何かしたらここから連れ出されるよ」

「ちっ、しようがない」

まくつたそでを元に戻しす姉さん。

「あのー、それで何の御用でしょうか？できれば言葉で言つてもらえるとありがたいんですが」

ウサギが僕たちに言いたいことなんて腐るほどあるに決まっているが分かつて一応聞いてみた。

ずずずと側によるウサギ。

近くで見ると顔がでかいせいか迫力があつて怖い！

ひなたが僕の足にしがみついた。

するとウサギは何も言わずに一枚の紙切れをよこした。

もしかして風船の請求書か！？

「えーっと、なになに。お食事券・・・園内ならどこでも使って一品無料、飲み物はおかわり自由・・・これを僕たちにくれるんですか？」

僕は状況が飲み込めず、ウサギに尋ねた。

すると大きな耳を揺らしながら首を縦にぶんぶんとふる。

どうじうことだ。

お金を請求される覚えはあるが、こんなものを貰う覚えはないぞ。

草食動物から獰猛な肉食動物（姉さん）への貢物か？

「とりあえず、ありがとうございます・・・」

腑に落ちないが貰えるものは貰つておこう。

感謝を言い、その場を立ち去ろうとする。

がしつ

着ぐるみのもこもこな手が僕の襟首を掴んだ。

「何ですか何ですか」

そのまま抵抗の余地なく後ろに引きずられていく。

「うわー助けて姉さん！不思議の国へ連れてかかるー！」

そこでようやく気がついた姉さんが駆け寄ってきて、

「悪いな大和、一枚しかないんだ。お前はウサギと仲良く人參でも食べてくれ」

僕の手からチケットを奪つていった。

「よし、入るぞひなた」

「ん」

あれ、ひなたまで僕のこと見て見ぬふりするの？

誘拐される僕を氣にも留めず、姉さんたちはレストランの中へ消えていった。

人気の少ないところまで引きずられていき、最後には茂みに投げ込まれた。

ここが体育館裏でないことだけが唯一の救いだ。

後を追うように巨大なウサギが茂みに飛び込んでくる。

このまま食べられてしまうのか。

まさにこの世は弱肉強食。

いいだろう、僕は打たれ強さにだけは自信があるぞ。
どこからでもかかつてこい！

僕は土下座したままウサギの出方を待つた。

「あ、あのう・・・」

蚊の鳴くような声がした。

その声は紛れもなく目の前の前の人ウサギから発せられたものであり、驚くべきことにそれは女の子の声だった。

「今、はづしますね」

自分の頭に手をかけるウサギ。

あれ、もしかして今すごい状況にいないか？

僕はウサギに人気のない茂みへ投げ込まれ、そのウサギは女の子。つまり僕は女の子に人気のない茂みへ投げ込まれたということだ。急に色めきだつてきたぞ。

今の襲われるは先ほどまでの襲われるとじや意味が全然違つてくる。僕は心躍らせながら、素顔が見えるのを待つた。

「・・・」

「うう、ほんにちは大和くん」

「やり直し

「えええっ！」

大きなウサギのかぶりものを僕はかぶせ直した。

「えええっ！」

慌ててもう一度かぶりものをとるかぐや。

「何だよ、かぐやかよ・・・」

「ええ！？ 私です・・・えっと・・・『めんなさい』

「別に謝らなくてもいいけどさ」

サンバの曲で気持ちよく踊っていた心が急に阿波踊りの曲になつてきょとんとしているような気分だ。

「あのー、つかぬ事を聞きますけど私正体バレてましたか？」

「ばれちゃいないけど、正直がっかりだな。アンパンのピンチにかけつけたのが天井だつたくらい」

「うつ、がっかりなんてひどいです・・・」

とは言つても姉さんの蹴りをくらつても立ち上がるようなたくましい骨格の女性が出てこられても困るけど。

「ううでバイトしてるの？」

「はー・・・」

かぐやはうな垂れながら返事をした。

「へー、あつもしかして姉さんがタックルしたのって

「私ですか・・・痛かったです・・・」

とうとうかぐやは泣き出してしまつた。

めんどくさい……。

とりあえず褒めて機嫌をとつてみるか。

「普通、姉さんのタックルをまともに食らつたら痛いじゃ済まないよ。すいこじやないか、中になんか仕掛けでもあるのか？」

そう言いながら僕はウサギのかぶりものを自分の頭にかぶせた。

（特に何もないな。ていうか熱い）

「あのあの、わたわた、私たくさん走つたので汗を・・・かかかいちゃつたかもしれなくて」

「ああ、悪い。すぐはずすよ・・・よつと」

「あのあの、・・・くつくつ、臭くなかったですか？」

恐る恐る聞いてくるかぐや。

「いや、別に」

特には嫌なにおいはしなかつた。

「そ、そそそそそうですか！？」

かぐやはほつとため息をついた後、ぎこちない笑顔を見せた。
おお、褒めたら元気になつたか。

「そうだ、大和くんつて昼食まだですかね」

「そうだけど」

「よかつたら、私と一緒に食べませんか？」

「いやだよ」

かぐやの顔が一瞬で絶望に染まる。

「え・・・何ですか・・・私とじや嫌ですか・・・」

うるうると瞳に涙のダムができあがつた。

「お前今バイト中だろ。僕のせいでクビになつたとか言われたら困るし」

「・・・へつ？あ、いや、今休憩ちゅ」

「飯ぐらいだつたら今度うちに食べにくればいいから、今はバイトに専念しろよ」

「え・・・大和くんの家に・・・はい！お仕事頑張ってきます！」

かぐやは颯爽とウサギの生首をかぶりスキップで園内へ消えていつ

た。

そういうばかぐやは一体何がしたかつたんだ。
毒でも盛る気だったのか？

姉さんたちの入ったレストランに戻ってきた。

「いらっしゃいませー、お一人様ですか？」

「いえ、連れが来てるはずなんんですけど・・・小さい女の子連れの女性がいませんか？」

ウェイターは困った顔で

「ええっと、そういう方は沢山いるので・・・」
と店内を見回した。

そりやそつか。

「ああ、すみません・・・この人なんですけど」

僕は携帯電話に入っていた鬼の格好した姉さんの画像を見せた。

「ああ、この方でしたら奥の座敷ですよ。ご案内します」

「ぐーがー」

姉さんは座敷に寝転がりすごいびきをかけて寝ていた。

その向かい側ではひなたがゆっくりとアイスを食べている途中。

「姉さんお酒飲んでた？」

「飲んでた」

顔はこっちに向げずにアイスをほお張りながら答える。

「そつか・・・」

何やつてんだこの人はひなたをほつたらかして。

「でもさつきまで起きてた」

びくんと姉さんの体が跳ねる。

「・・・姉さんもしかして起きてる?」

返事はない。

「ん」

ひなたは前もって書かれていたメモを僕に見せた。

『ひなたと大和、一人でラブラブデート！』

・・・なんだこれ。

「えっと、一人でアトラクションを回つてくれればいいの？」
いびきをかきながらぐくぐくとうなずく姉さん。
やつぱり起きてるじゃないかよ。

また姉さんの道楽か。

「はあ・・・しちうがない、じゃあ行こつか」

ちょうどアイスを食べ終わつたひなたの手をとつた。

「ん」

3、因話四（前書き）

全部ハイクションです 全ツ部関係ありません

3、四話目

「どのアトラクションにしようかなあ」パンフレットを眺めながら、ひなたのこぢんまりした手を引く。姉さんだったら絶叫系のアトラクションに乗せておけばいいんだけど、あの手の乗り物は身長制限があるからな。

それに小さな女の子は絶叫マシーンとか乗りたがらないよな。僕は立ち止まって、自分の顔がひなたの顔の高さと同じになるよう腰を折った。

「ひなたは何か乗りたいものある？」

僕はパンフレットの色々なアトラクションが載っているページを開いて見せる。

「ん」

細い指がさした先にでかでかと書いてある文字、バンジージャンプ。「・・・これはすごく怖いと思うよ、大丈夫？」

「大丈夫」

親指を突きたてて、構わないとアピールしていく。

確かにひなたなら、いつもやってますからみたいな顔でそのまま飛び降りしそうだけど・・・。

「あ、でも残念。これは年齢制限があるよ。ひなたの歳じゃ乗れないな」

僕は記載されていた注意事項を伝えた。

「下」

「ん? なになに・・・年齢に満たないお子様は、大人と一緒に乗るタンデムなら乗れま・・・す?」

「お兄ちゃん大人」

ひなたのきらきらと輝いた目が僕に向けられる。うつ・・・このパンフレットを書いた人はなんて一文を添えてくれたんだ。

乗れないなら乗れないでいいじゃないか。

なぜこんな抜け道を作った！

なぜ大人を巻き込んだ！

「お兄ちゃん？」

僕は別に高いのが怖い訳じゃない。

垂直落下式のアトラクションだって一言返事で乗つてやるだ。

高さに速さの加わったジェットコースターでもいいや。

だつてあれは機械で制御されるもん。

でもバンジージャンプは、僕の体を守つてくれているのはひもだ

ろ？

ひもだけだろ？

なぜ緊急事態でもないのに命綱一本で飛び降りなきやいけないのさ。

あんなものブツンつていつたらあとは自由落下だぞ。

「お兄ちゃん寝てる？」

僕は我に返り恐る恐るひなたに聞き返す。

「ひなた・・・どれに乗りたいって？」

「ん」

もう一度同じとこひを指差した。

「くつ・・・」

どうやら腹をくへりねばならないうじこ。

くそっ、バンジーがなんだ。

あんなものちよつと体にひもを巻きつけてぴょーんつて飛ぶだけじゃないか。

万が一・・・万が一ひもが切れたつてその後どうにかすればいいだけじゃないか。

どうにか・・・どうにか・・・。

とにかく僕は打たれ強さには自信があるぞ（三四回目）

土下座してでも勘弁してもらいたいが、ここは意を決して震えてうまく動かない足を前へ踏み出す。

「それじゃ、い、行こうか

「どうしたの？」

歩き出そうとする僕に反して、ひなたは僕の顔を見つめたままその場を動こうとしない。

「何でもないよひなた」

「怖いの？」

「くつ・・・ひなた、バンジージャンプだけはやめにしない？ うまく言えないんだけど、ひもってやつがさ。いや、別に高いところが怖いって言うんじゃないよ？ ひもがさあ」

「いいよ」

「え？ いいの？」

ひなたの返事が余りにあつさつとしていたので、逆にひなたが呆気にとられてしまった。

「ん、いいよ。お兄ちゃん怖いでしょ？」

真っ直ぐな目で僕を見つめてくるひなたに強がりなしの返事をする。「うん、実はすごい怖い。もう何でも言う事聞くから勘弁して欲しい」

「じゃあやめる」

ひなたはまた僕の頭をなでた。

「でもひなたは乗りたいんだろ？」

僕だって一応大人だ。ひなたがどうしても乗りたいって言つなら自分を押し殺してでもあのひもに身を任せくらこの覚悟はあるが。いざとなつたら意識を飛ばしてから飛んでやるぞ。

「お兄ちゃんが嫌なら私も嫌」

「ひなた・・・」

泣きそうだ。

なんていい子なんだひなた。

決めたぞ、僕は絶対にひなたをあの鬼のような姉さんにさせないぞ。

「まま心清らかに育つてくれ。

「あれに乗る」

ひなたは田頭を熱くした僕の手を引きながら走った。

「お馬」

ひなたが僕の手を引いて連れてきたのはメリーゴーランドの前だつた。

軽快なBGMをバックに颯爽と馬が駆け抜ける。

今も昔もちびっこに人気のあるアトラクションだ。

「これ、怖い？」

「ううん、全然」

気遣ってくれるひなたに僕はにこりと微笑んだ。

ひなたは僕の顔を確認してからアトラクションの列に並んだ。

「これ

子供たちがどんどんと馬に乗る中、ひなたが希望したのは馬車を引く馬だった。

「乗せて」

手を広げてばんざいのポーズをとる。

僕はひなたの両脇を抱えて馬の背中に乗せてやつた。

「ちゃんと落ちないよう」その棒を握んでるんだぞ」

そう言って僕はひなたの隣にいるもう一頭の馬車を引く馬に乗りつとするが、

「お兄ちゃんは後ろ

と後ろの馬車を指差した。

「僕は後ろなの？」

「ん

「隣じや駄目なの？」

「ん

大和は私について来いというひなたからのメッセージなのだろうか。

軽く尻に敷かれている気分だ。

すでに姉さんの悪い影響が出てきているな・・・。

強く言わると逆らえなくなる性分の僕はとうあえず馬車に乗り込んだ。

すると後から入ってきた男の子が走ってきて、せつを僕が断られたひなたの隣の馬に乗った。

む、これはなんだか嫌な構図だな。

人の姪にちょっかいを出すか小僧。

「そこ駄目」

急にひなたが隣に座つた男の子に無表情のまま声をあげる。それを聞いた同じ年くらいの男の子は反論した。

「いいじゃんか」

「駄目」

「いいのー」

そのまま言い合いになり、周りにいた人たちがざわつき始める。知らない人に話しかけるなんて、今までのひなたじや考えられないことだったので僕は口を開けたままぽかんとしてしまつた。おっと、果然としてる場合じやない、止めなきや。

「ひなた、どうしたんだ」

すると後ろから男の子のお母さんらしき人が慌てて駆けつける。

「もう駄目でしょ、ごめんねお嬢ちゃん」

「いやだ、ぼくこれにのりたい」

なおも抵抗を続ける男の子。

慌てて後ろの馬車から僕も飛び降りた。

「すいません」

「いえいえこちゅうこそ、ほらあつちの馬にしましょ」

「・・いーだ」

男の子はひなたにベロを出して他の馬へと走つていった

「・・・

ひなたは言い返すことなく、じつと前だけを見ていた。

「参加してみませんかー、参加者募集中でーす」

従業員の服を着た人たちが近くを通る人々に声をかけている。

「どうやらこの先で催し物をやっているようだ。」

「ちょっと見てみる？」

「ん」

ひなたの了解も得て、行ってみることにする。

「んーっと、イベントがやっているのはお化け屋敷だね」

「お化け屋敷？」

ひなたは少し首をかしげた。

「こわーいお化けがいっぱい出てくるところだよ。ひなたは夜に一人でトイレに行けなくなっちゃうかもね」

「行く」

「あれ？」

怖がらせたつもりが、僕の手を引いてひなたはぐいぐいと進んでいく。

「あー、カップル限定の企画みたいだね」

「出る」

「いや、だからカップル限定だよ？」

言い終わる前にひなたは僕の手を離し、従業員の前まで歩いていった。

「出ます」

近くにいた少し歳のいった女の係員に声をかけた。

「ごめんね、これはカップル限定なのよ。お嬢ちゃんの年齢では少しあやいわね」

「います」

ひなたは振り返って僕を指差した。

係員がつられて僕の方を見る。

「あらあら、本当ね。じゃあこれを書いて持ってきてね」「はい」

おお珍しい。ひなたがまた知らない人と話してゐる。

用紙とえんぴつを持って戻ってきたひなたを僕は暖かく迎えた。

開始時間が近づくと何組かのカップルがお化け屋敷の前に集まってきた。

「なんで君たちもいるの？」

「このイベントあんまり人が集まらなかつたらしいんです。それで給料払つてんだからこれくらいは出ろつて遊園地の人々に言われて…」

僕は硬く目をつむつたひなたの耳を抑えながら岩雄くんの顔を物言いたげな目で見つめる。

カップル限定とうたつていたのに完全にサクラじゃないか。

「女王様は、着替えたんだね」

「流石にあの格好でウロウロしてたらまずいって言われてました」

「岩雄くんは着替えないんだ」

「ええ、なぜか僕のほうは何も言われませんでした…」

「流石の岩雄くんでもおかしいと気がついたか。

「ということで、姪っこさんから手をどけても大丈夫ですよ」

「え・・・・じやあ何であの人はまだムチ持つてるの」

「あれなくなると頭の中“ひけり”になつて叫びだすらしいです…」

「…」

「…」

「…ではお集まりの皆様、頑張つてください」

遊園地からの簡単な説明が終わつた。

要するに悲鳴をあげてはいけないということらしい。

悲鳴の回数を競い、一番少なかつたペアに商品が出る。

「ん」

ひなたは商品である特大ウサギ人形を凝視している。

ウサギつて嫌な思い出しか浮かんでこないからいらないんだけどなあ…。

「それじゃあ大和さん、行つてくるつす」

くじ引きで一番手に決まった岩雄くんがスタートラインに立つ。

「大丈夫？隣の女・・・あー、ペアの方がすげー震えてるけど」

顔面蒼白。

スタートする前から尋常じゃない量の汗をひたいに滲ませてこる。
「い、行くわよ！」

パチンとお尻をムチで叩かれる岩雄くん。

「お猿さん」

「どうした、ひなた？」

「お尻真っ赤」

耳をひっぱられながら連れて行かれる岩雄くんの背中。

本當だ、今まで気づかなかつたが全身タイツのお尻は赤く塗られて
いて、ちょこんとしつぽまでついてる。

「お猿さんのお尻が赤いのはムチで叩かれたから？」

「ぐつ・・・あの一人やつぱり悪影響にしかならないな」

「あやーー..」

奥から岩雄くんの叫び声が何度も聞こえてくる。

岩雄くんの叫び声の前に聞こえてくる女王様の悲鳴とムチの音と共に、お化け屋敷中に響き渡った。

3、五語句（複数形）

全部フイクショノです 全部関係あつません

3、五話目

お化け屋敷の入り口と出口が同じ場所になつてゐることがある。それは入り口で順番を待つてゐる客に、戻つてきた客の顔やリアクションを見せる事で期待や恐怖心をあおることができるのであるからだ。この遊園地も同じ手法を使つていて、トップバッターの岩雄くんペアが入つていつたところと同じ場所から戻つてきた。

「どうだつた、中の様子は」

「怖かつたつす・・・・」

言葉少なに語る岩雄くん。

「すごい叫び声だつたね。後からいつたペアも出発前からビビりまくつてたよ」

「ほんとつすか、・・・少しあ仕事ができたみたいで嬉しいつす
心にもない事を体をくの字に曲げながら言ひ岩雄くん。

腰が抜けるほど怖かつたのかな。

「ところで大和さん、何で姪っ子わんに田隠しを?」

「いや、だつてさ・・・・」

僕はいたたまれない気持ちになりながら、同情の視線を送る。

岩雄くんの体、といふか茶色の全身タイツには無数のムチに叩かれたあとがあり、所々破れています。

顔はどちらが脅かす側か分からぬほどに変形していて、とてもひなたに見せられる状態じゃない。

夜にトイレに行きなくなるどころか、トライアマになるわ。

「女王様の方はだいぶ血色のよい顔になつて戻つてきたけど、何かあつたの?」

「最初はお化けを見て悲鳴をあげながらムチを振つてたんですけどね、途中から・・・・」

「あー、なるほど」

「興奮してびうでもよくなつたみたいですね。最後のほうは田を血走

らせながらムチを振る様子を見て、機械仕掛けのお化け以外出てこなくなりましたよ」

お化けだってムチで殴られたらひとたまりもないもんな。

南無アミタイツ、おつとつい間違つてしまつた南無阿弥陀仏。

「災難でしたよ・・・つ・・・」

岩雄くんは辛そうな声を漏らしながら顔をしかめる。

「・・・何でさつきから前かがみなの?」

答えによつてはドン引きするけどさ。

「それが最後に出てきた私服のお化けにお腹を思いつきり殴られたんですよ・・・つ・・・」

「私服?何それ」

「あの服どこかで見たような・・・」

それにしてもムチで叩かれても動じない岩雄くんがあそこまで痛がるつてことはそうとうだな。

サクラの岩雄くんなら問題にならないけど、一般的の客にやつたら大問題だろ?」

「四番の方、入り口前に並んでいただけますかー」

従業員がメガホンで叫んでいた。

すっかり話し込んでしまつて自分たちの順番がくるまでがあつとう間だつた。

「あ、次僕たちだ。じゃあ行くね」

「はいっす。自分は医務室行つてきます・・・」

ヨロヨロと歩き出す。

僕は岩雄くんが見えなくなつてからひなたの田隠しをとり、列に並んだ。

「あら、さつきのお嬢ちゃん。大丈夫かなー?」

「ん」

受付をしていた女性が入り口で案内人も務めていた。

「ひなた本当に大丈夫?」

「ん

「どうやらやつて」意思是は固いらしい。

僕は苦笑いで案内人の女性を見る。

「では行きましょうか。ここから入つてもらつて直進すると、手に分かれていますんで、右に進んでください。分かつた？ 右だよ、お嬢ちゃん。そうすれば後は一本道です。では頑張ってくださいねー」軽い激励を貰い、僕たちは前へ進んだ。

「よくできてるなー」

入つていきなり病院のロビーのような場所に出た。

(なるほどここを右ね)

突き当りまできて、わざとらしくひなたに聞く。

「あれ、どっちに進めばいいんだっけ？」

「右

僕の手を握つたまま正解の方向へ引っ張つてくれる。

先頭を悠然と歩く姿に、ひなたはまだ微塵も恐怖を感じてはいないようだ。

重そうなスライド式のドアをひなたが開ける。

中は診察室のようになつていて、いかにも何か仕掛けがありそうだ。何かくるぞと心に言い聞かせながら僕は仕掛けを待つた。

ひなたが「丁寧に」ドアを最後まで閉めた瞬間、

「がー！」

と大声を上げなら白衣を着た血まみれの男が現れた。

「きやわわわー！」

女性の悲鳴。身構えていた僕は男の襲撃には驚かなかつたものの、女性の悲鳴に体がびくんとなつてしまつ。

「がー！ がー！」

「きやーーーきやーーーきやーー！」

なおも血まみれの男がひなたと僕めがけて近づいてくる。

「ひなた、やばいぞ！」

雰囲気を盛り上げながらひなたの方を見る。

さつきから何も喋らないが、もしかして泣き出したか？

「・・・大丈夫？」

ひなたは血まみれの男の方を見上げながら言つた。

その言葉に当の本人も固まる。

「血がでてる、痛い？」

まあ、確かに遺体だけど。

ひなたはマイペースに続けた。

「しゅじゅちゅしちゅから出ちゃ駄目」

ひなたは男の手を引いて、奥のランプの灯った部屋に連れて行く。

「・・・ありがとう」

男は一度礼をして、部屋の奥へと消えていった。

「ひなた、さつきの人怖くなかった？」

「痛そうだった」

「そつか・・・」

ひなたの優しさの前では幽霊も形無しだな。

つとそんなことより、一つ確かめなければいけないことがあった。

僕は後ろのスライド式ドアを開く。

「キヤツ！」

ごろんと塊が転がってきた。

僕はその塊に見覚えがあり、正確に言えば毎頃に拉致されたばかりだ。

「かぐや、何やつてんの？」

「へつ！？ああああ！」

慌ててドアの向こうに逃げようとするが、押す引くのドアだと勘違
いしているかぐやは外に出ることができない。

何度もががちやががちやとやつた後、諦めて振り返り、その場に正座し
た。

「ノーノーノーノーノーめんなさい」

「いや、別に僕は謝つてもらいたいとかじゃなくてさ。何やつてる

のか聞きたかっただけなんだけど」「

「実は私、大和くんたちの後を追つてました・・・」

「へえ、そりやなんで。風船代の取立て?」

「ちちち、違いますうー! 叫んだ回数を隠れてカウントするお仕事だつたんです」

「なるほど、そういうえばバイト中か」

ウサギの姿で引っ張られた記憶しかないから、かぐやはバイト中だつてことを失念していた。

「見つからずに後ろからついて行かなきゃいけないんですけど・・・」

「見事僕らに見つかつたって訳だ」

「・・・ひつひ」

あれだけ叫べば誰でも気づくつての。

「私怖がりだから、いきなりお化けさんに出でこられたらもう」

「ひなたですら驚かなかつた仕掛けに驚いて、バレちゃつたんだ」

「返す言葉もござこません・・・」

かぐやは深々と頭を下げた。

「それにしたつて何でこんなところのサポートしてんだ? ウサギの着ぐるみで風船配つてればよかつたのに」

「だつて、・・・大和くんにバイトに専念しろつて言われたから。私頑張つて色んなお仕事を手伝おうつて思つて」

あー、さつさと逃げたくて言つた僕の言葉をそう解釈したのか。

「お兄ちゃん?」

ひなたが涙れを切らせて戻つてきた。

「ああの、私のことは」

「分かつたよ。なんだか僕にも責任があるみたいだし。ひなた、あのお姉ちゃんはいないから。いいな?」

たぶんかぐやつて分かれればじゅれあいに行くんだろうが、この暗闇だ。

顔までは見えないだろ?」

「ん」

「あ、ありがとうございます！」

ひなたが物分りのいい、空気の読める子でよかつた。

「それでは・・・」

かぐやは僕の左手にしがみついた。

「何してんの？」

「一人は怖いんですう・・・一緒に行つていɨですか？」

「駄目に決まつてるだろーお前カウントするためにここにいるんだろ」

「だつてえ・・・」

それに色々とあたつてるんだよ。

これ以上僕の心拍数をあげよつとするな。

「ん」

その様子を見ていたひなたが僕の足にしがみついた。

「お、おいどうしたひなた。これじゃうまく歩けないよ

「・・・」

「二人とも離れて」

「・・・」

なんだ、この状況。

怖い・・・お化け屋敷怖い・・・。

その後は、手術室ですっかり傷の癒えた白衣の男に出会つたり、三人で歩いてくる僕たちを見て混乱する死神にあつたりと、かなり珍妙なお化け屋敷になつた。

扉を開ければかぐやが悲鳴をあげ、ひなたが幽霊を心配する。

このパターンを何度も繰り返し、お化け屋敷も中盤に差し掛かる。

「だいぶ進んできたな。ちょうど、はあ、半分くらいかなすでにここに来るまでに僕は汗だくだ。

岩雄くんもかなりの災難だが、僕だつて結構な災難を被つてゐると思うぞ。

歩みを進めると中庭をアレンジしたような場所に出る。これ見よがしに中央には井戸が配置されている。

「ひつ」

かぐやの小声が漏れる。

カタカタカタ

井戸のふたが上下に揺れ始め、ばずれたかと思うと中から人が現れた。

「うらめしやー」

「裏はお土産屋さんでしょ、姉さん」

「うお、大和何で分かつた！？」

「分かるよそりや。何年姉さんの弟やつてると思つてるんだよ」
僕は姉さんの額から幽霊がよくつけていいる三角巾のようなものをはぎとりながら言つた。

「ちえつ、絶対に分からないと思つたんだけどなあ」

鏡を覗き込みながら自分のメイクを見直す姉さん。

「ていうか、その衣装どつしたのや。姉さんの事だから雇われた訳じゃないんだろ」

「あの人から借りた」

後ろでは姉さんの私服を着てめそめそと泣いている女性がいた。

「化けて出られると」

「望むところだ」

姉さんはニヤリと笑つた。

「望むところだじゃないんだよ、だいたいねえ」

そのとき、ひなたが僕のそでを引っ張つた。

「ごめんひなた、ちょっと待つて。姉さんはさあ

それでもなお、僕のそでを引っ張り続ける。

「待て大和。ひなたどうした？」

「おしつこ」

「えつ」

一人して会話も動きも止まってしまった。

「な、何で入る前に行かなかつたの?」

「お兄ちゃん耳押さえてた」

「口は開けられたよね?」

「ん」

今気がついたみたいな感じでうなずくひなた。

「とにかくこうしてはいられないな、大和外に出る道はどうちだ?」

「え、姉さん外への出方知らないの?」

「知るか。私は忍び込んだだけだからな」

やつぱりか。

「かぐや、どつち?」

「こつ、じつちです!」

急いでトイレに駆け込んだひなた。

間に合つたものの、結局僕たちは途中棄権という結果になつた。
優勝したのはよく知らない派手な服を着たカツプルだつたらしい。

「いやー楽しかった楽しかつた」

姉さんは遊園地の出口へ向かいながら伸びをする。

「僕はずつしにく疲れた」

「ん」

抱っこしている僕をなでてくれるひなた。

「腹減つた。さつさと帰つて飯つくれよ、大和」

「はいはい、分かつたよ」

夕日が沈んでいく。

太陽が消え、夜になる途中のほんのわずかな時間。
一日の終わりの物悲しさを一番感じる気がする。

出口を通り抜けようとした僕たちに従業員の男が話しかけてきた。

「今日の記念にお写真撮りますから、そこに並んでください」

インスタントカメラを片手に、笑顔で近づいてくる。

それは疑いようのない善意だった。

一瞬の出来事。

従業員はカメラを覗きこみ、何の気なしに僕の抱いているひなたに向けた。

「うう・・・うう・・・うあああああああああああ

ひなたは大声を上げながら涙を流し始めた。

今まで、笑顔の一つも、恐怖の一つも表情に出さなかつたひなたが人目をはばからずに号泣している。

「馬鹿野郎！！」

姉さんの怒号が響く。

辺りの視線が僕たちに集まつた。

姉さんは僕の腕からひなたを奪い取り、車に向けて歩き始める。

「あの・・・私何か失礼を・・・」

別にあなたは悪くない。

悪くないからこそ、今日一日を台無しにしたあなたが恨めしい。

「こちらこそ、すいません」

僕は走つて姉さんたちの待つ車へと向かつた。

3、五話目（後書き）

3話目終わり、4話に続く

4、一括図（複数用）

全部フイクショーンです 全部関係あつません

「おい、大和」「誰かが僕の体を揺する。

たぶんこの人は僕を起こそうとしているんだな、目を閉じたままそう思つた。

人に起こされるなんて、小つ恥ずかしいやら懐かしいやら。だんだんと覚醒に近づいた頭がもう少しこうしてみたいと訴える。「ちつ、起きやしねえな。」うなつたら定番のあれで起き起ししてやるか

ん、何やらスリリングな言葉が聞こえたぞ?

僕の危険察知レーダーが警戒音を鳴らし続けてくる。

「おはよう、母さん」

「誰が母さんだボケー！寝ぼけてんじゃねー！」

目を開き、あぐびをする暇すらなかつた。

迫り来る鉄製の中華おたまとおつかない顔の姉さん。

一直線に向かつてくるそれを僕は間一髪のところで枕を盾にして防ぐ。

「そんな薄っぺらい盾なんて無駄だー！」

姉さんは勢いにのつて、反対の手に持つていた通販で買つたばかりのフライパンを振りかぶる。アルミニ製の軽くて熱がよく伝わるフライパン。価格4800円。

そりやこんな急げしらえの盾ではガードできなによ。だつてあのフライパンは油汚れだつてはじくもの。いや、本当にすつごいはじくの。

とか考えている間もフライパンは僕の顔へ向けてぐんぐんとスピードを上げる。当たつたらいくら僕でも死ぬから！なんで僕は朝っぱらから死にかけてんの！？

「おはよう、姉さん！」

言つて、枕を防災頭巾のようになびかせ、頭だけは静止する。

「お、なんだ起きたか」

顔面に直撃まであと数センチのところに静止する。

フライパンを止めた時の風圧で前髪があがり、おでこがあらわにされる。

「何で朝から弟の命を奪いに來てるのさ」

だいたい姉さんならそんな鈍器を使わなくとも、素手で十分に僕を永遠の眠りにつかせる事はできるだろ。

「人聞きが悪いぞ。私はいつまでたっても起きてこない出来の悪い弟を起こしに来たんじゃないか」

姉さんはやれやれといった顔で僕を見た。

いつもその出来の悪い弟に起こされているのは誰だよ。その人に同じ台詞を言つてやりたいね。

「その手に持つた凶器は何ぞ」

「おたまとフライパン。ドラマで子供を起こす時に使つてたぞ」「使用法が違うすぎるんだよ！おたまでフライパンを叩いて、音を出して起こすんだろ。何でそんなバイオレンスな勘違いしちゃつた！？」

とりあえず姉さんが持つたままだと、振り回して怪我をしそうなのでそこら辺に置いてもらつた。

「まったく朝から姉さんは・・・あれ、なんだか」

僕は自分で肩をぐるぐると回しながら、体の異変に気がついた。

なんだか体が軽い。

昨日までの僕は姉さんのちよつかいにここまで騒ぐことはなかつただろ。

体が鉛のように重く、寝不足で頭もぼーとしていた。

要するに騒ぐほどの元気がなかつた。

「そりやそうだろ、もう朝じゃないし」

「え！？」

慌てて時計を見てみると、短い方の針がちょうど真上を指していた

とにかく右へと傾きつつあった。

「どうりで体が軽いはずだ。僕は10時間近く眠つていたらしい。

「あれつ、だとしても姉さんが僕を起こしに来るなんておかしいぞ。いつもは僕が起こさなきや平氣で夕方まで寝てるのに」

そしてそのまま夕飯食べてまた寝ちゃうような人だ。

「ああ、それな。ちょっとこれ見てみろよ」

姉さんは自分の目の人下あたりを指差した。

「・・・なに?」

「よく見ろつて」

姉さんは顔をぐっと近づける。

「・・・しわ?」

「お前の顔に刻んでやひつか」

「ひい」

指を広げたまま力をいれて間接をポキポキと鳴らす。

「ほら、よく見ろつて。くまだよ、く・め」

「姉さん顔に熊飼つてるの? やっぱり姉さんは化け物だ!」

「・・・」

「はい、ごめんなさい」

姉さんの顔をよく覗き込むと、うつすら目の下に黒い線が入つていた。

「気持ちよく眠つてたのに電話がいつまで経つても鳴り止まないから私が電話に出てやつたんだぞ」

「え、そうなんだ。全然気がつかなかつた。誰からだつたの?」

「かぐや」

かぐやか、それなら姉さんが電話に出て正解だつたかもしれない。僕が相手だと声が小さくなつて何言つてるか聞き取れないんだよな。

「六時だぞ? 朝の六時! ひなただつてまだ起きてなかつたぞ! いい年して娘と張り合つなよ・・・」

それが普通だから。

「えつ、ってことは姉さんは六時からずっと起きてるの?」

「そうだよ、馬鹿野郎」

確かに姉さんがいつもより若干げつそりしている気がする。

「僕も六時に起こしてくれればいいのに」

「ちつ、事情も知らないで好きな事いやがって。大体お前が・・・

まあいいさ。さつさと着替えて仕事部屋に来い」

姉さんは捨て台詞の様に言葉を投げつけ、部屋を立ち去ろうとした。

「うん、分かった。あ、ちょっと待って。これ

「何だ?」

「熊が大好きなハチミツ味の飴」

少し私事を話そう。

ある本に載っている女の子が可愛い。

ネット上の片隅で発信された情報は瞬く間に広がっていった。

名前も知らぬ一人の少女。

その少女が、多くに知られた名前も知らぬ少女に変わるまで時間はたいしてからなかつた。

その美しさと、今時紙媒体という部分が人々の興味を引いた。

彼女は一体誰なんだと人々は情報を集め始める。

そこについた唯一の手がかり。

聞いたこともない名前の会社。YUカンパニー。

ある日から引っ切り無しに問い合わせの電話がかかりはじめた。姉さんは問い合わせの電話やメールを受けるうちに、勝手にかぐやをYUカンパニー専属の女優にしてしまったのだ。

テレビや写真集、雑誌への露出をすべてなくし、YUカンパニーの絵本だけに出演すると公表した。

姉さんはいい金儲けるを逃がすまいとしてやつたことかもしれないが、それが功を奏し僕らの絵本は次第に注文が増えていった。

そして一通のメールが届く。

『私たちの会社から絵本を出さないか』

今となつては少なくなつた紙媒体で本を作つてゐる大手会社からの

メールだつた。

童話のタイトル以外の決定をYUICANPANNEに一任するという姉さんの無茶苦茶な注文を飲み、出版へと踏み切つた。

絵本はかぐや人気もあり大ヒット。

YUICANPANNEには個人、企業問わず依頼が届くようになる。おかげで忙しくなり休日にひなたと遊びにいける日は少なくなつたけど、まあ割りと毎日楽しくやつていてる。

ふう・・・危うく熊の姉さんにプレーされるところだつた。

急いで着替えて仕事部屋に来てみるとかぐやと姉さんがソファーに座つて談笑していた。

しかしかぐやは僕の存在に気がつくと、衣服の乱れを整えてコホンと咳き込んだ。

「今日はかぐやも仕事は入つてないでしょ」

「う、うん」

オロオロして僕の顔色をつかがつ態度はいつも通り。僕も特に気に留めることなく、会話を進める。

「じゃあ今日は何でいるのさ。姉さんが呼んだの?」

「いんや」

姉さんはかぐやのモモに頭をのせて寝転がつた。

「あつ、あの・・・大和くんがご飯を食べに来てもいいって言つたから・・・」

「ああ、それで居たのか・・・え?」

「ええ? ! わ、忘れちゃつたんですか? 遊園地で、やつ約束しました!」

「あー、そう言えばそんな事も」
言つたような、言つてないような。

恐らく捏造はしてないだろうから、言つたんだわ。

「別に飯くらいなら全然いいけどさ。せつかくの休みなんだから無理して来なくてもよかつたんだぞ? かぐやも随分と休みないだろ」

主に僕らのせいでの

「む、無理なんてしてません！」

かぐやは頬を染めながら、大きな声を出した。

「大和一、めしまだかー」

腹を空かせた姉さんが手足を振つて暴れる。

「少し待つて」

「あの、お姉ちゃんの朝」はん、冷蔵庫の中の物を勝手に使つちゃいました・・・

申し訳なさそうに恐る恐る言うかぐや。

「かぐやの料理はなかなか美味しかったぞ。まー大和の方が美味しいけどな」

照れる事を言つてくれるじゃないか。

姉さんはこととん人に気を使わないから、こいついう時に本心が聞ける。

「どうか、かぐやより美味しかったか。どうか、どうか。

「じゃあ、先に洗濯機回していくから少し待つてて」

「それならかぐやがやつたぞ」

「そつか、ならひなたを送りに」

「何時だと思つてんだよ。とっくにかぐやが連れてつたぞ」

「掃除は」

「かぐやが隅々まで綺麗にした」

「そつか・・・」

たぶん「こ」は『樂できる、ラッキー』って喜ぶところなんだらうけど・・・。

毎日やらされていた事を急に奪われると、口ロツケのない台風の日みたいな物足りなさがあるな。

「「」、「」めんなさい。なんだか私、勝手な事しちゃって」

「ああ、いいよ。勝手な事のベクトルがおかしい人よりかましさ」

「私の事言つてるか?」

「さあ」

僕はすっとぼけながら、パソコンの電源を押した。

「おお、そうだ。大和にこれを見といて欲しかったんだ」

姉さんは起き上がり、パソコンの前に移動する。

「んーっと、あつたこれだ」

メールソフトを立ち上げ、受信ボックスの中を小まめにチェックし、一通のメールを開いた。

これも最近になって初めてできるようになった事の一つだ。

今まででは迷惑メール以外のメールが一通も届かなかつたからな。

「個人からのメールかー、珍しいなあ。やっぱりかぐや狙いみたいだね。・・・それで？」

「下を見てみる」

顎でさつさと下にスクロールさせると指示をする。

「ん？ オリジナル脚本？ どういうこと？」

「脚本は自分で書くってことだろ。たぶん監督も自分で用意するんじゃないかな？」

「へえ、楽でいいじゃん・・・でもこれラブストーリーって書いてあるよ？」

「そりなんだよなー・・・でもな、これも見てみ」

姉さんはマウスを奪い取ると下へスクロールしていく。

「ん？ すごい大金じゃないか！」

依頼料としては見た事もない数の〇が並んでいる。

「だろ？ 欲しいものもあるしなあ・・・」

姉さんは珍しく真剣に悩んでいるような顔をする。姉さんの欲しい物つて何だろう。

カメラの機材？いや、ないな。

漫画や雑誌？この辺が妥当か。

大量の歯磨き粉・・・姉さんならありえなくもないから困る。

「でも流石にラブストーリーはなあ・・・」

「だよな、じゃあこれはなし。大和、メール消しといて

「うん」

とは言ったもののこの金額には後ろ髪を引かれる。

このお金さえあれば、通販でエアインマックスTMも買える。いやいや、新車だって買えるぞ！

画面の中の行列を成した〇を見ながら、妄想に耽る。

「あのおー」

「何？ かぐや」

「待ちきれずにお姉ちゃんがキッチンに向かいましたけど・・・

「よーし、私がチャーハンをご馳走してやろう」

姉さんが僕愛用のエプロンをつけて、腕まくりをしながらキッチンへ消えていく。

まずい、姉さんに火を使わせては駄目だ。

僕はキッチンに急行する。

「かぐや、絶対パソコンに触るんじゃないぞ」

「は、はい」

「・・・（そうだ、この机のお掃除はしてなかつたつけ。大和くんが戻ってきた時、机が綺麗になつてたら褒められちゃうかも・・・キヤツ！）

「フライパンは姉さんが僕の部屋に持つてつただろ」

カチカチ

ぴろりろりん

部屋にフライパンを取りに行つた帰り、仕事部屋を通りかかった僕は聞きなれた音を耳にした。

メールの送信音？

気になつて部屋へ様子を見に入る。

「かぐや、何してるんだ？」

「お掃除です」

「パソコンには触るなって言つただろ」

ディスプレイには依頼受諾にチェックを入れ、返信済みとなつてい

る先ほどのメールが映っていた。

「大和くんに言われた通り、パソコンに触つてないですよ・・・？」

やりやがったな、この機械オンチ・・・。

かぐやは首をかしげながら、マウスを丁寧にハンカチで拭いていた。

4、一話目（前書き）

全部ハイクションです 全部関係ありません。

20メートル近くある高い天井。

無数に散りばめられた照明。

見るからに高級な音響機材。

そして僕らの現場では一度も目にする機会がなかつた物。

一台数百万すると言われる撮影用のビデオカメラ。

「あのう・・・大和くん、やつぱり怒つてます・・・よね」

「・・・」

かぐやが無理やり作った笑顔を消し、下を向いた。

僕はその横顔をちらつと見て、視線を渡されたばかりの台本へと落とす。

パソコン

「痛つ」

後ろから歩いてきた姉さんに丸めた台本で頭を叩かれた。

「かぐやにあたるな。すぐにメールを消さなかつたお前も悪いだろ」「そうだけど・・・」

僕は叩かれたところを摩りながら唇を尖らせた。

「で、どうだつたの？交渉できた？」

「んー駄目だつた。門前払い。送られてきたメールにも書かれてたことだし、受諾の返信をしちまつた以上何も言えないな。うちの決定権はかぐやの演技についてぐらいなもんだ」

「そつか・・・」

ため息をつきながら肩を落とす。

「ごめんな、お姉ちゃん・・・」

目にいっぱい涙を溜めて、かぐやが姉さんに抱きついた。

姉さんも手を広げかぐやを受け入れてやり、頭を優しく撫でる。

「よしよし、泣くなかぐや。私に鼻水がつくから。おい、つくつくつくつくてば

姉さんが強引にかぐやを引き剥がし、自腹で買った他所行きの服に鼻水がついていないか調べている。その時、つかつかと三人のスリを着た男を引き連れた女性が僕の前にやってきた。

「本日はよろしくお願ひ致しますわ」

気さくに握手を求めてくる。

僕は面食らいながらも手を差し出した。

「あなたがYUJIカンパニーの代表者さんかしら?」

「いえ、あつちにいる女人の人があつ」

「そうだつたの、では後ほど。・・・ちょっと、あれを

「はつ」

方向転換し姉さんの方へと歩みだす。

歩きながら後ろにいた三人の男の内、一人が胸元からウエットティッシュを取り出した。

そして握手した方の手を満遍なく綺麗に拭いている。

何だあの態度、むかつくな。

「あなたがYUJIカンパニーの代表者かしら?」

「ああ、そうだぞ。さつきこいつちから会いに行つたんだがな」

「そうなの? 知りませんでしたわ。それは本ッ当に申し訳ないことを、オーッホツホツホ」

とは言うものの頭を下げるつもりはないらしい。

高笑いを上げながら、手を差し出し握手を求める。

姉さんはその手を見て、

「やたらとギラギラしてるな」

指についた無数の宝石たちについて感想を述べた。

「そうかしら? これくらい女優なら普通ですわ」

指だけじゃない。体中、どこを見ても装飾品や宝石がビカビカとライトの光を反射する。

三十円のお菓子についてくるおまけのシールかつてくらいに光っている。

「クリスマスツリーみたいだな。女優の中では流行ってんのか?」

「あら、あなたはもう少し輝きを取り入れた方がよくなつてよ?」
まだ撮影が始まつてすらないというのに、不穏な空気が流れる。
お互いがお互いを牽制し、今にもビシバシからとは言わず手が出そつ
な雰囲気だ。

「やめとくよ。私にコスプレの趣味はない」
いや、あんた鬼とか幽霊とかすぐしてたぞ。

絶対姉さんの趣味だろ、あれ。

「ふふつ、見てくださいな。この指輪が200万円。こっちが30
0万円。この時計はオーダーメイドで600万円ですわ。そして・
・

「いいな、一つくれよ」

姉さんは一つうん百萬もする宝石を子供がおねだりするみたいに軽
く要求した。

「またまた」「冗談がうまい」のね、オーッホッホ

指輪を見せびらかすように、口に手を当てながら笑つ。

あまり姉さんを舐めるなよ?

姉さんの場合、全然冗談だと思つてないから。

本気でそんなに沢山あるなり一つくらい貰えるんじゃないかと思つ
て言つてるよ。

「だけど・・・私、くだらない冗談が嫌いなの」

いつきに場が張り詰める。
手で口は隠れているものの、見えている目が鋭く姉さんを睨みつけ
ている。

僕が直接睨まれていてる訳でもないのに、ゾクリと背筋が凍る。

「隣の堀に家が建つた。イエーイ」

親指をぐつと上げて見せ付ける。

なんかおかしい。それどなんかおかしいぞ、気づいて姉さん。

当の本人である姉さんは全くひるんではいなかつた。

「・・・まあいいわ。それより先ほどの続きだけど、この靴が80
万円、ネックレスが・・・」

「おばさん、後ろの人達はだれ？おばさんの彼氏？」

「このイヤリングも50万円、自宅は高級住宅地にある……」

「ねえねえ、後ろの人達いくらで雇われてんの？」

「来年には避暑地に別荘も……」

すごい光景だ。

相手の話を聞かない女一人が会話（？）をしている。
お互いがお互いの話を聞かないから、全く終わらじこりが見えてこ
ない。

これはある意味貴重だぞ。

延々続く自慢話に、懶い顔の男達が、お墓をピラミッドにするとい
う話が終わったところで声をかけた。

「・・・コホン。とりあえずよろしくお願ひ致しますわね」

咳払いの後、一瞬だけかぐやの方へ目をやった。

「・・・フンッ」

さつさとコーナーへ、男を引き連れてスタジオの外へ戻つていっ
た。

のつけから好感度がだだ下がりしているあの人こそ、今回の依頼者
件監督、そして主演でもある古井沢沙麻子だ。我が国の三大女優の
一角で、主にドラマや映画なんかで活躍している。しかし最近では
年齢の若いアイドルや、演技よりバラエティで笑いの取れる女優の
方に入気が集中し、テレビで見かける日も少なくなった。

とは言つてもテレビをあまり見ない僕や姉さんでも知つてたくらい
だから知名度はかなりのもの。ついでに言えば稼ぎもすごいらしい。
ブルジョアは違うなー、と思いつつコンビのおにぎりをほお張つ
ていると、姉さんが近づいてきた。

「わいい、最後の方あいつの言つてる」と全然耳に入つてこなかつ
た。何か重要なこと言つてたか？」

ほんと便利な耳だよ。聞きたくない音は入つてこないようファイル
ターがあるんだもん。

よく僕の声がそれに引っかかるから壊れてるのかと思つたけど、そ

うじやなかつたみたいだね。

「何一つ、重要な事は言つてなかつたよ」

姉さんと古井沢の冷戦以来、いつまで経つても何の音沙汰もないの
で僕は暇を持て余していた。

僕らが撮影する時はだいたい姉さんの気分しだいで早くもなるし、
遅くもなる。

それは僕らの撮影が少人数だからであつて、今は何十人もの人が動
いているという違いがあるからだろう。

僕は紙コップに本日三杯目のコーヒーを注ぎ、パイプ椅子へ腰を下
ろしてから口をつけた。

（物が多いなあ）

山とつまれたダンボールや、何が入つているか見当もつかない木箱
があちらこちら。』

僕は辺りをゆっくりと見回した。

するとその木箱の陰から頭が一つ、ピヨコツと現れた。

何だろう。大きさからすると子供・・・かな？

注意深く観察していると、その頭の横からもう一つ、小さな頭が現
れた。

分身した！？

「『ばー！』」

「うわあ！」

驚いてパイプ椅子からころげ落ちてしまった。

「あはははは、兄ちゃんんどんくさい！」

「あはははは、どんくさい！」

物陰から急に飛び出してきた、ひなたぐらいの年齢の女の子一人に
馬鹿にされる。

「何するんだよ！」

「わっ、もしかして怒つたっぽい？」

「怒つたっぽい！」

一人は顔を真っ赤にして怒る僕の周りをぐるぐると回り始める。

そして急に止まり、目の前に二人が並んで言った。

「どつちが英子で」

「どつちが雄太だ？」

二人ともニコニコと嬉しそうに僕の回答を待つ。

いきなり体の周りを走り回られ動搖していたが、なんとか自分を取り戻す。

英子・・・雄太・・・あれ？

僕はまだ気がついていない二人に至極当然な質問をした。

「僕はまだ誰が英子で誰が雄太かも知らないよ」

二人はポカーンと口を開けて、お互いを見合った後、

「あれ、そうだけー？」

「そうだつたー！」

一人で楽しそうに笑つた。

「私が英子だよ」

「僕が雄太だよ」

「「ようしくね、兄ちゃん」」

一斉に手を差し出した。

「あれ、男の子だったの！？」

「そうだよ。こっちが男で、そっちが女」

身長や顔の造り、パツと見では違いが分からない。

髪型も同じショートヘアで、声の高さまで一緒の瓜二つだ。

そして一番驚いたのが、一人は男の子だったという事実。

こればっかりはどうにも信じる事ができないほど二人はそっくりだった。

「証拠見せてあげるー！」

雄太が急に力チャ力チャとベルトをいじり始めた。

僕は慌ててそれを止める。

「いや、見ない見ない。一人を信じるよ

「そー？」

「でも何で双子がこんなところに……」

「何言つてゐるの？英子達このお話を出すよー。」

英子が僕の手にある台本を指差した。

「ここ」「こ

奪い取つた台本をペラペラとめくり、出演者のページを開けた。本当だ・・・ちゃんと二人の名前が載つてゐる。

「兄ちゃんも出るのー？」

「出ないー？」

二人はそれぞれ違う方向に首をかしげた。
あまりに似てゐるので鏡に映つた虚像ではないかと疑いたくなつてしまふ。

「僕は出ないんだよ」

「じゃあ兄ちゃんは何でいるの？」

「えつとそれはね」

「不審者？」

「不審者！」

「不審者がいまーす！」

「違う、違うよ！」

不審者としてガードマンに連れられスタジオから締め出されそうになつていたところ、姉さんが駆けつけ説明しなんとか事なきを得た。

よつやくその場にいる演者やスタッフ全員が集まり、監督から説明があつた。

「自己紹介なんて必要ないでしようけど、私が監督で主演の古井沢

沙麻子よ。どうぞよろしく」

どこからともなく大きな拍手が起つた。

「それでいきなりなんだけど、良くないニュースです。私の相手役を勤めるはずだった俳優さんが事故で到着がかなり遅れるそうです」
周りがにわかにざわつき始める。

「はいはいはー！」

「ここでも空氣の読めない姉さんは現場のシリアスなムードも気にせずに、元気よく手を挙げた。

「何かしら、YUカンパニーさん」

「私がいい俳優を知ってるんだ。使ってみないか?」

「あら、一体誰の事かしら」

「こいつ」

姉さんは僕の手を掴み、持ち上げた。

僕は反対の手で自分自身を指差す。

ワンテンポ遅れてようやく姉さんの言っている意味を理解した。

「僕!?」

4、II話題（前書き）

全部フィクション 全部関係ないです

4、二話目

「無理無理無理。何言つてんの姉さん、冗談を言つ時は場所を考えてよ」

「謙遜するなよ。うちの会社のトップ俳優じゃないか」

姉さんはへラへラと笑いながら、僕の両肩を掴んだ。

「僕は俳優でもなければ、そもそもYリカンパーには専属の俳優なんていないだろ」

「いるだろ、猿っぽいのが。あいつは私が言えば何処にでも来るぞ。まあ確かに俳優って言うよりペットに近いけどな」

本人が不在でも容赦なく蹴散らす姉さん。

運命的な出会いと言づべきか。あるいは因果応報と言づべきだらうか。

岩雄くんはバイト先の遊園地で出会った女王様とカップルになつたらしい。

付き合いはじめるきっかけはお化け屋敷でのイベントだったらしい曰く、私のムチにここまで耐えた男は今まで一人もいなかつた。二人は運命の赤いムチで結ばれているんだそうだ。

岩雄くんの方の理由は・・・下衆すぎて覚えていない。

と、まあ晴れて彼女持ちになつた岩雄くんだが、何故かいまだに姉さんと絶対の服従関係にある。

最近では姉さんからの連絡用の携帯電話を買つたらしげ、女王様にはバレないようにしているらしい。浮気は即、死だそうだ。それを知つたら姉さんは喜んでバラすぞ、氣をつけろ岩雄くん。いや、ていうか今はそれどころではない。

人の心配より自分の心配をしなければ。

「無理に決まつてますよね、古井沢さん」

「え?あー、えっと・・・そうねえ・・・」

台本を開いて台詞をチェックしながらうーんと考え込む。

すると、どこからともなくひそひそと話し声が聞こえてくる。

「あれ誰よ?」「いやー、見たことないなあ」

そりやそうだ。

こんなキングオブ一般人を連れ出して俳優の代わりをやれなんて無茶にも程があるよ。

こちとらさつきまで不審者として追い出されそうになつてた程の一 般人面だぞ?

ちゃんとちらおかしくて、へそをオール電化にしてそれから茶を沸かしてやるつづーの。

そこにいた全員が困惑する中、ずっと唸つていた古井沢が口を開く。

「あなた・・・何かメディアに出たことがあるのかしら?」

「えつと・・・絵本に少しだけ・・・」

「絵本だけですって?」

古井沢が素つ頓狂な声を出した。

やがて周りからも嘲笑するような声が聞こえてくる。

「絵本だつて・・・ははっ」「クスクス」「どうやつって絵本に人間 が出るんだよ」

笑われて当然だよ・・・。

僕は口を一文字に結んだまま、思わず下を向いた。

「いいじやねえか、絵本」

その時、隣にいた姉さんが笑い声をかき消すように声を上げた。

「同じ、人が作つた物だろ。それに上も下もない、何がおかしいんだよ」

真剣な顔で言い放つた。

スタジオ内が一気に静まり返る。

あの古井沢すら、苦虫を噛み潰したような顔で口を閉じた。

誰もが周りを眺め、声を出すタイミングを伺う中、最初に喋りだしたのは意外にもかぐやだった。

「で、でも大和くんは・・・元々この仕事に反対だったし・・・そ の・・・」

必死に僕を庇おうとするかぐや。

今だけはお前が僕を助けに来た天使に見えるぞ。

「そ、それに大和くんはかつこいいから人気が出たらビッグショット・

・」

あさつての方向へ向かう天使。何処へ行く、僕はここだぞ！
その様子を見ていた古井沢がパタンと台本を閉じた。

「ふーん・・・なるほど、いいわ。その子を代役に立てましょ！」

「「えー！」

僕の声とかぐやの声が重なった。

「私も兄ちゃんでいいと思いまーす」

少し遠巻きで様子を見ていた英子と雄太が手を上げて賛成した。

「え、本気ですか？古井沢さん」

後ろにいた男の一人が異議を唱え、止めに入るが、

「ええ、本気よ」

古井沢はこれを一蹴した。

「しつ、しかし・・・」

「私の決定に何か文句でもあるの？」

「うつ・・・ございません」

男は渋々と引き下がつた。

「じゃあ、あなた。早く着替えてきてちょうどいい

「やつたな、大和」

「そんな・・・」

呆然と立ち尽くす僕は姉さんに背中を押されながら衣装部屋へと向かつた。

「あー、もう駄目だ。吐きそう・・・」

僕は着替えている途中も何度もトイレに駆け込んだ。

緊張と吐き気で自分が地面に立っているのかすら分からなくなる。

「今更何言つてんだよ、何事も経験だ。頑張れよ！」

ネクタイを締めてくれた姉さんが送り出す時に一回、背中を強くは

たいた。

「他人事だと思つて……」

「そんな事ないって。見ろよ、私も震えてるだろ?」

「・・・あ、本当だ」

姉さんの足が小刻みに震えていた。

そうか、姉さんなりに僕と同じ気持ちになつてくれてるのか……。
姉さんは鬼だ、熊だと罵つていたがやつぱり姉さんも人の姉だったんだなあ。

「あ、違う。私の携帯が震えてるんだ。んー、もしもーし」

姉さんは僕を一人残し、通話しながら控え室から出て行つた。

時間が来て、スタジオに入つた。

何人もの大人が忙しそうにそこら中を走り回つている。

皆、自分の役割を理解し、少しでもいいものを作ろうと必死になつてゐる。

大きな影があつちに行つたり、こつちに行つたりする。
その中に二つの小さな影を見つけた。

「あつ、兄ちゃん」

「ああ、英子ちゃんと雄太くん。さつきはありがとうね」
素直に喜べないのが残念だが、一応お礼は言つておく。

「いいよ、だつて兄ちゃんにも一緒に出て欲しかつたもんね?」
「欲しかつた!」

二人は顔を見合わせて、僕の出演を歓迎してくれた。

それにしても一度二人から離れると判別がつかなくなるなんて、双子はなかなかに厄介だな。

「えつと確か、君が・・・」

「私が英子」

「僕が雄太」

「二人合わせて英雄姉妹!^{ヒヨウキヨウダイ}」

「何それ!?」

しつかりと決めポーズをとり、どうだと言わんばかりの顔をした。

「へつへー、かつこいいでしょ」

「うん、二人ともかつこよかつたよ。自分たちで考えたの？」

「お母さんが一人で自己紹介する時は言いなさいって」

「へえ」

流石、我が子をこの歳から役者に育てようとする親は気合が違うな。

「そしてもう一つ。僕が雄太」

「私が英子」

「二人合わせて太子姉妹！そして私がタコ娘！」

「・・・それもお母さんから教わったの？」

「「うん」」

いやあ、本当にすごいなあ。

「二人はどうちが上なの？」

「私がお姉ちゃんだよ」「

えつへんと胸を張る英子。

「僕が弟！」

「へえ、うちと一緒にだ」

「兄ちゃんの姉ちゃんって、さつき兄ちゃんの隣にいたボインの人

？」

「う、うん・・・そうだよ（ボイン？）」

「似てない！」

「一人の声が揃つた。

「よく言われるよ」

「リハーサルはじめます」

スタッフの声がかかつた。

「頑張ってね！」

セットの中に入つていく僕を二人は手を振つて送り出してくれた。

スタジオ内が一斉に静まる。

作業をしていたスタッフ全員がセットの中に注目し、集中する。

注目の集まる一点にいるのが僕たち。

演じる役は名家の夫婦。

僕が夫で、かぐやが妻。

「じゃあ撮るわよ。3・2・1・・・」

『ああああなた、おおおおかえりなさい』

『ただいま』

「はい、カットー」

力チンコの透き通った音が響く。

「駄目駄目、えっと、君は・・・確かに大和くんだったわね。声が上擦つてるわ。それに早口。あんな演技素人でもできるわよ

いや、だから僕は素人なんだってば。

「・・・かぐやさん、あなたは・・・」

古井沢は一瞬だけ間を置き、

「最低よ」

かぐやの心を粉碎した。

「仮にも女優を名乗るなら、どんな時でも毅然としなさい。それができないのなら帰りなさい。所詮あなたもそこらの若いからつてチヤホヤされている小娘と同じだったといつ事。光る物のない女優は何も掴む事はできないわ。お金も地位も、そして男も。あなたの好きな男はやがてあなたの前から消えるわ、絶対に」

「何もそこまで、かぐやだつて・・・」

「あなたは黙つていなさい」

僕の反論は即座にはねつけられてしまった。

かぐやの体が震える。

目は泳ぎ、まさにパニック状態。

これだけ大勢の前で滅茶苦茶に怒られたんだ、普通の精神状態でいろつて方が難しい注文だ。

こんな状態ではもう一度やるなんて不可能。

しかし古井沢はそんなおかまいなしで、もう一度はじめようとす

る。

「もう一度行くわよ。3・2・・・・ちょっと待つてそこのあなた」
何事だと、僕とかぐやも古井沢の視線の先を見た。
そこにいたのは使用人の服を着たまま床に寝そべりポテチをぱりぱりと食べている姉さんだった。

「え、何？」

「何じゃないわよ。YUカンパニーさん、何故あなたがそんなところにいるんですか？」

「使用人の役だが？」

「あなたに役は『えてない』でしょ。それにその手に持っているものは何ですか？」

「ポテトチップスだが？」

「それは知ってるわよ！」

「・・・ジャガイモをスライスして油で」

「造り方も知ってるわよ！」

「じゃあ、何だよ」

すごい剣幕で怒る古井沢と、後ろから他の味のポテトチップスを取り出してまたバリバリと口に放り込む姉さん。まさに暖簾に腕押し。

隣でその様子を見ていたかぐやが口を押さえながら笑っていた。

「・・・僕も何だかりラックスしてきた。」

「すいあせん（すいません）、遅れたつす」

「きみは・・・岩雄くん？」

「あ、どうも。大和さん」

汗だくでスタジオに飛び込んでくるなりステージの上に乗り込んできた岩雄くん。

「どうしたの？」

「ええ、梅さんに呼ばれたんで、すつとんできましたよ」

「なんだ、それで何の役なの？」

「えっと・・・」

岩雄くんは一時休戦した姉さんの方を見つめた。

「猿役」

「そんな役ないわよ！」

姉さんの返答に、また監督が吠えた。

「大和もかぐやも緊張しそぎだ、見る。私に大和にかぐやに岩雄。いつもとそう変わらんだろ？」

姉さんはそう言い残して、すんなりステージの上から降りていった。その言葉で完全に肩の力の抜けた僕たちは、なんとかそのシーンを切り抜けた。

「次のシーンも僕の出番があるんだけど。ていうか僕の出番多くない？」

「そーかー？」

さつさと私服に着替えた姉さんが雑誌片手に気の抜けた返事をする。「しかも次のシーン。あのおばさん演じる愛人とのキスシーンがあるんだよ。」

「え！？」

予想以上に大きな反応を見せたのがかぐやだった。

「えっと、あれあれそつか・・・」

台本を見直し、何度も何度も頷くかぐや。

「あー、ちょっとたんま」

姉さんが何かを察したのか、かぐやの肩を押して控え室へと連れていった。

そして戻つてくるなりまた同じところに座つて雑誌を広げる。

「よし、問題なし」

「全く良くないし、問題大有りだよ。何一つ解決した問題がないよ。僕は姉さんの手にあつた雑誌を奪い取り、話を進める。

「んな、唇当てるわけないだろ？寸止めだよ。キスする前に本人に聞いてみろよ」

それ以上姉さんは取り合ってくれなくなつたので、僕は大人しく聞

くことにした。

「唇は当たませんよね？」

「ええ、当然よ」

よかつた・・・。

「ところで、かぐやさんは今どこで？」

「控え室みたいでけど」

「そうなの・・・まあいいわ」

「それでは撮りまーす」

助監督がスタッフ、出演者一同に向けて叫ぶ。

古井沢が演じている間は助監督がメガホンを取つていて、

「3・2・1」

『 - - - - - 』

台詞も順調にこなし、ついにキスのシーン。

僕は古井沢の肩をしつかりと掴んだ。

近づく顔と顔。

間近に寄つて始めて気がついたが、すごい香水の匂いだ。

僕は息を止めて口をつむり、唇と唇が当たるギリギリのところまで近づけた。

すると止めたはずの唇が、相手の唇とぶつかる。

僕が止めた後も、古井沢の方から僕の方へ近づけたようだ。

「・・・！」

「はい、オッケーです」

助監督の声に、慌てて唇をはずす。

「何するんですか！」

「ふふ、ごめんなさいね。事故よ、事故。もしかしてファーストキスだつたかしら？残念ね、かぐやさんは初めてをあげられなくて、

オーッホツホツホ」

何故そこでかぐやが出てくる。

満足げに下がっていく古井沢。

「姉さん、僕は汚されたよ・・・」

「何を今更キスくらいで・・・。大和はキスなんて何回かしたことあるだろ」

「え！？」

僕も知らない事実に驚きを隠せない。

「一体僕は誰とキスしたの？」

「確かに最初は・・・牛？その次は馬だったな」

姉さんは一つずつ指を折りながら数える。

「極めつけはサンショウウオだな」

「そんなものとキスした覚えないんだけど！」

その時、サンショウウオという単語によつて見たこともない記憶が甦つてくる。

これは・・・消したはずの記憶・・・。

「それ以上はやめとけ、死にたくなるぞ」

「もうさつきので十分死にたくなったよ」

頭の片隅に何かモヤモヤとするものがあつた。

もう少しで思い出せそうで思い出せない。

「何で僕は牛なんかと・・・あれ、その前に何かとキスしてたよう

な・・・姉さん覚えてない？」

「・・・さあな」

4、因縦図（複数用）

全部ハイクションです 全部関係ありません

4、四話目

「はい、カットー。オッケーです」

助監督が舞台の上にいる僕たちに向かって叫んだ。

「今の演技、なかなか良かつたわよ」

舞台を降りようとしていた僕は、追いかけるように走ってきた古井沢に褒められた。

古井沢はそのまま助監督や各役割の責任者達にまわって映像のチェックを始める。

「おう、お疲れ。かぐやという妻がありながら、愛人に双子を生ませるとは、私の弟はやるなー」

「それは断じて僕じゃない。僕の役の話だろ」

撮影中も助監督の横という一番目立つ位置をキープしていた姉さんを軽くあしらひ。

姉さんの方に顔が向くたびいちいち手を振るので気になってしまふがなかつた。

「兄ちゃんやるねー！」

さつきまで同じシーンを撮影していた英子と雄太が姉さんを真似しながら近づいてきた。

「やつたね、大和。家族が増えるよ。おー姪っ子たちよ、知らない間にこんなに大きくなつて」

二人の頭をよしよしと撫でる姉さん。

そりや知らないだろうさ。僕だって知らないもの。

「やめてよ、梅おばさん」

「あん？」

体中に突き刺さるような視線を放つ姉さん。
目の下にはうつすらとクマが残っていた。

そこにふらふらと控え室からかぐやが戻ってきた。

「あつ、かぐやさんだ」

「かぐやさんだ！」

「ひえっ！？えーっと・・・」

人見知りのかぐやは戻つてくるなりきなり双子に囲まれて、ついたえていた。

「英子です」

「雄太です」

「「よろしくお願ひします」」

「えと、いかいらじょろしくお願ひします」

子供相手でも深々とお辞儀をするかぐや。

きっと相手から見えない電話口でも喋りながら頭を下げるタイプだな。

「かぐやさんの載つている本読みました。私もかぐやさんみたいになりたいです。何をすればそんな表現力が身につくんですか？」

「え・・・？えーっと・・・自分では特に・・・っ！」

英子の質問に丁寧に答えていたかぐやの足元がぐらついた。

倒れそうになつたかぐやの体を急いで姉さんが支える。

「キヤツ、大丈夫ですか？かぐやさん」

姉さんはかぐやの額に手を当てる。

「んー熱はないな。もう少し向こうで休ませてくれるわ、古井沢に言つといて」

「うん、分かつた」

「お体に気をつけてくださいね、かぐやさん」

英子を安心させようと作り笑いを浮かべながら、かぐやと姉さんが控え室へと消えていった。

「・・・ていうか、僕とかぐやじゃ態度がえらく違わない？」

さんとか付けちゃつてさ。

かぐやの心配はしつつも、どうにも気になつたので聞いてみる。

「もちろんー！」

子供に笑顔で肯定された。

「子供でも分かるよ。かぐやさんは将来すごい女優さんになるって」

「へえ、そなんだ。僕にはよく分からぬなあ」

「だから、今の内にパイプを作つて、媚売つとかないと」

「おおう・・・予想以上に黒かつた。」

大人よりもよっぽど世渡り上手だ・・・。

子役の世界でもやつぱり人脈が重要なのだろうか。

「僕だつて一応うちの会社じゃ助監督だし、副社長だよ? 上から一番目だよ?」

「えーでも兄ちゃんはないー」

「ないー」

「何が?」

「華」

「そつか、難しい言葉知つてるんだね・・・」

撮影は大きな障害もなくスムーズに進んだ。

今日中に撮るべきシーンも残りわずか。

なんて言つたつて今回は三日間に渡つて撮影がある。

ロケ現場の天気や場所を考慮したゆつたりとした日程。

まあ、そもそも撮影つてのは普通ゆつたりと撮るものだ。

毎回カツカツで、一日で全部撮りきるなんて荒行をしている僕らつて・・・。

とは言つても今回も僕らはひなたの待つ家に日帰りで、また明日朝に戻つてくるつていう感じだ。

「かぐや、大丈夫か?」

姉さんが心配そうに声をかけた。

セットへ向かうかぐやが見るからに疲れた表情を浮かべている。

「大丈夫だよ・・・」

誰が見ても無理をしているのが分かるかぐやは、台本を持ったままセットに入ろうとしてスタッフに止められた。

「駄目そうだね」

「そうだな」

演技が終わり映像チェックに入る。

姉さんは古井沢のところへ近寄つていった。

「おい、今の演技は駄目だ。かぐやもきつせつだし、後日撮り直してくれ」

「駄目よ」

古井沢が冷たく言い放つた。

怪訝な顔を浮かべた後、古井沢に食い下がる。

「おい、かぐやのシーンについてはこっちにも決める権利があるんだぞ？」

「ええ、でも最終的に決めるのは監督の私よ」

「はあ？ 何言つてるんだ」

「すみませんが」

姉さんが声をどがらせながら言い寄りつつするのを、スーツの男が止めた。

「ちつ・・・」

それ以上ごねる事なく舌打ちをして戻つてきた。

「姉さん・・・・・なんで殴り飛ばさなかつたの？」

「今のは前金の分だ」

僕の知らないところで前金なんて貰つていたか。姉さんもちゃつかりしてゐるなあ。

「まことに、あんなもの流されたらかぐやの株が下がつちまつ

「かぐやにとつても初めての映像作品だしね」

静止画の写真と違つて、映像だとどうしたつてボロは出でしまう。それが役者としての初々しさによるボロならまだしも、こんな疲れた表情ではファンだつて納得しない。かぐやの女優としての価値、ひいてはYUICANパーの信用に直結する事だ。

「もしかしてYUICANパーが選ばれた理由つて・・・」

姉さんは難しい顔をしながら小声で呟いた。

「兄ちゃんお腹すいたー」

自分の撮影を終えた雄太がYUICANパーにあてがわれた控え室に遊びに来ていた。

「雄太、静かにしなきや 駄目だよ」

ソファの上で寝息をたてているかぐやは気遣い、英子が注意する。

くー

その英子のお腹から可愛い音が鳴った。

「あははははは」

大笑いする雄太と顔を真っ赤にする英子。

「私も腹が減つたぞー。弁当をよこせー！」

姉さんがポテトチップスを片手に食料を要求する。
しつかりと手に持つてるじやないか。なんだつたら備え付けの歯磨き粉取つてくるぞ？

「子供の前で一人でお菓子食べてちや駄目だよ。分けてあげなよ」「お菓子は食べちゃいけないんだ」

雄太が残念そうに言った。

そつか、そう言う事にも厳しい家庭なのか。

「あー、腹減つた」

なおも姉さんはボリボリとお菓子をつまみ続ける。

ガチャリ

鍵のかかつていねードアを開け、入ってきたのは古井沢だった。

「大和くん、出番よ」

「あ、分かりました」

急いで衣装を整えて出て行こうとする。

「そうだ、英子ちゃんと雄太くんにお弁当を貰つてもいいですか？お腹すかせてるみたいなんで。姉さんはいりません」

「おい、そりやないぞ！」

「駄目よ」

またも古井沢は要望を跳ね除けた。

「大女優の私がまだ演技をしているのに食事をするなんて考えられないわ」

「何だと？」

「…」

姉さんが喧嘩腰に噛み付いていく。

「姉さん、前金…」

「ぐつ・・・・。猿、これで何か買って来い」

姉さんはポケットからお札を取り出して、岩雄くんに渡した。
ていうか岩雄くんまだいたんだ。

「は、はいっす」

急いで部屋を出て行く。

「文句はないよな？」

「・・・・早く用意なさい」

古井沢はきびすを返し、スタジオへと向かった。

4、因話四（後書き）

読み直しません。変なところあつたら教えて

4、五語田（前書き）

全部フイクショノです 全部関係あつません

4、五話目

冷たい。

辺りは暗い。真っ暗で冷たい。

何かの拍子に足を機材にひっかけてしまつかもしれない。
自分が歩いていく道すら見えないほど暗い。

熱い。

僕らの周りは明るい。眩しくて熱い。

人工的なライトの光が僕らの肌をちりちりと焼く。

自分が何処から照らされているのか分からぬいほど明るい。

明るい場所から一歩踏み出せば暗がりに出る。

暗いと明るいの境界は一歩分でしかない。

冷たいと熱いもまた然り。

熱心と冷酷の違いもまた然り。

「本当にもういいのか、かぐや」

ライトに照らされたかぐやの顔は真っ白だった。

真っ白な顔からうつすら汗をにじませ、時折辛そうに顔をしかめる。

「うん、眠つたら少し楽になつたよ。それにこれが最後だし
かぐやは無理やり笑顔を作つてみせた。

今日の撮影のラストシーン。

しかし本当はこのシーンの撮影は明日の予定だった。

古井沢が急遽、予定を繰り上げて今日撮影する事になつたのだ。
明日もあるから無理はさせたくないという姉さんの言葉も届かず、
苦しそうなかぐやを起こしてセットへ連れてきた。

「ギリギリまで座つとけよ」

僕はセットの椅子を引き、かぐやを座らせた。

ほとんど崩れ落ちるような格好で椅子にへたり込む。

早く撮影を終わらせて休ませてやりたいが、言いだしつべの古井沢
がなかなか姿を現さない。

普段やらない貧乏ゆすりの音だけが無情にも響く。

「何故座っているのかしら？」

携帯電話を片手にようやく現れた古井沢。

「どこに行つていったんですか！」

「あなたには関係ないわ。せつ、撮りましょつか

「くつ・・・・」

古井沢は音響やカメラマンに指示を出しながら、膝ほどの高さしかない椅子にびっしりと座り込んだ。
かぐやは机に手をつきながら立ち上がろうとするが、途中で力が抜け床に倒れそうになる。

僕はなんとか抱きかかえ、床との衝突を避けた。

「何してるので、それでも女優なの？」

「はい・・・すいません」

容赦のない古井沢の声が飛んできた。

「大丈夫だから・・・」

そう言つて僕の腕から離れようとするかぐやを僕は抱き寄せ、

「頑張ろ!」

そう耳元で囁いてから離した。

「いいわねーいくわよ、3・2・1」

『あなた、今日も何処かへ行かれるのですか?』

『ああ、少し出でてくる・・・』

『夜は帰つて来られますか?』

『・・・』

『どうしても行つてしまつのですか?』

『・・・』

『・・・私、やつとあなたの子供ができました』

そこでかぐやの瞳から一滴の涙が滑り落ちた。

その一滴を皮切りにボロボロと涙が輪郭を伝づ。わなわなと震え、かぐやは泣きながら笑つた。

『それは・・・本当か?』

『・・・はい』

『・・・そうか・・・良かつた・・・』

『・・・はい』

僕はかぐやの肩を掴み、抱き寄せた。

そしてそのまま一人で崩れ落ちるように、その場に座り込んだ。

「・・・」

なかなかカツトという言葉が聞こえてこなかつた。なので僕らは抱き合つたままの状態で待ち続ける。

「・・・はつ、カツト!」

古井沢が思い出したように掛け声を上げた。

「あんた、早く鳴らしなさい」

古井沢に頭を叩かれ、口をあけたマヌケな顔でセットを眺めていた助監督が力チン口を鳴らす。

その音でそこにいる全員が、芝居の世界から戻ってきた。するとどこからともなく拍手が沸き、最後にはスタジオが割れんばかりの拍手に包まれた。

その中から一人、拍手をしながら近づいてくる。

「かぐやまで孕ませるとは、このプレイボーイめ」

僕の頭をぐしゃぐしゃと撫でる。

「断じて僕じゃないよ。僕の役の話でしょう」

「はいはい。かぐやも・・・あー」

姉さんがかぐやの方を見てやれやれと首を横に振りながら額に手を置いた。

かぐやは僕の腕の中で完全に気絶していた。

「あれ、なんで?! もしかして絞め落としちゃった?」

だとすれば僕が悪いんじゃない。悪いのは唯一姉さんと同じこの遺

伝子だ！

「あー、違う違う。まあどごめを刺したのは大和だけだな」
姉さんはゆでだこのように真っ赤になつたかぐやを軽々持ち上げ、
控え室へと歩いていった。

「いやー、よかつたですよ。さつきの演技」

所々で片づけをしている途中のスタッフに褒められた。

どう考へてもかぐやのオマケだが、快く受け取つておく事にする。

「次よ！」

片付けや帰り支度を始めていた全員が声の主の方に振り向いた。

「次のシーンを撮るわよ！」

古井沢は近くにあつたパイプ椅子を蹴り飛ばした。

慌てた様子で助監督が声をかける。

「撮るつたつてもう片付けた機材もありますし・・・

「今からでも準備しなさい」

「いや、しかし・・・」

「文句があるの？」

ギロリと睨まれる助監督。

「・・・いえ

「おーおー、どうやつて撮るんだよ？」

やはりこういう時に声をあげるのは姉さんだ。

「YUICANパー・・・たつとかぐやさんを連れてきてちょうだ

い

助監督に向けていた視線をそのまま僕たちに向ける。

「お前、何焦つてんだ。かぐやは病院だ」

「何ですって？」

「今、猿雄が車で連れていってる

「くつ・・・」

歯軋りして悔しがる古井沢。

岩雄くんは結局最後までいたのか・・・。

「なら・・・」

苦し紛れに僕の方を見る古井沢だが、その視線の間に姉さんが割り込んだ。

「・・・ 邪魔する気？・・・」の虫けらが・・・

「あん？」

「いいわ、もうYOSHICANPAAさんは帰つていただいて結構。ちょっと、双子を呼びなさい」

後ろに控えていたスーツの男に命令する。

「はつ」

急いで控え室に走り、何も知らない英子と雄太を連れて戻ってきた。「今から31ページのシーンを撮るわ。準備するからこっちはきなさい」

古井沢の手招きに雄太は笑顔で従い、近寄つていいく。すると突然、古井沢はポケットからナイフを取り出した。全員が見つめる中、古井沢はナイフの切先を露わにする。

「小道具だよね・・・？」

「さあ・・・」

「本物よ」

古井沢の声は冷静だった。

「何馬鹿な事言つてんだよ」

「馬鹿ですつて？見てみなさいよ、31ページ。ほら、書いてあるでしょ？”妻に子供ができる縁を切られた愛人。男の名前から取った文字を持つ、双子の男の子の体をナイフで傷つける”って。よく読みなさいよ」

叫びながら手に持つた台本を見せ付ける。

「役に入りすぎだ。自分で何やつてるか分かつてるか？」

「当たり前でしょ？」

場が静まり返る中、古井沢は続ける。

「芝居とはすなわちリアリティ。いかに本物であるかのよつに見せ

るかが命よ。私はずっとそれに心血を注いできた。その私から言わせればあんな小娘の芝居なんて、本物の芝居じゃないわ。あの子も所詮、そこらの才能のないアイドル連中と同じなのよ。絶対に私の演技が負けるはずないんだから。私があんな連中に・・・。今から私が本物の芝居を見せてあげる」

「なるほど、ようやく分かった。何故うちの会社に依頼がきたのか」「え・・・どういう事なの？姉さん」

「最初はかぐやの人気にあやかるうとしてんだと思ってたが。お前、かぐやの事をあわよくば潰そうとしてただろ？」

「ふん、何故私がそんな事をしなければならないの。私はあんな子の手の届かないところにいる存在よ？大女優なのよ？」

「どうだか」

「いちいち瘤にさわる人ね・・・まあいいわ。さあ、早く腕を出しなさい」

「いや！」

雄太が手を振り解こうと暴れるが、古井沢は手を離さない。

「お前がやろうとしていることは犯罪だぞ」

姉さんが低い声で威嚇した。

「違うわ。これは芸術を追求した結果なのよ。それにさつき双子の親に電話して許可は取ってるの」

「何だつて？」

「英子を次の映画に出して貰えるなら全然大丈夫です、だつて。子役の親はたいてい熱心になりすぎて周りが見えなくなるのよね」

古井沢は冷たく言い放った。

「お前もな」

姉さんの顔から悔しさがにじみ出ている。

僕だつてはらわたが煮えくり返る思いだ。

「お母さあああああああん」

雄太が泣きながら呼ぶ。自分を売った親のことを。

「・・・おい、私の名前を言ってみろ」

「はっ？ 何かしらYUカンパニーさん？」

何を言つてゐるんだといふ顔で姉さんを見る古井沢。

「私の名前を言つてみろオ――!――!――!」

烈火のごとく激高した姉さんの叫び声。

ずいつと前に踏み出した。

あまりの迫力に古井沢もたじろぐ。

私があなたの名なんて知るはずないしやなしの
話でござり、名前を採り合ひます。

山本をめぐり 名前を探す古井沢

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

卷之三

いや、言わせたのか。

直線状にいた人を吹き飛ばしながら古井沢に近寄つていく。
その姿はまさに獲物を見つめたときの熊！

「私に何かしたらどうなるか分かつていいんでしょうね? 私を誰だと思つていいの? 大女憂の沙麻子よ? 私の女憂力ばーじゅつ・・・

ものすごい速度で突進した姉さんは雄太くんも吹き飛ばし、最後に古井沢にソバットを叩き込み気絶させた。

大女優が最後に演じたのはお腹に蹴りを入れられ崩れ落ちる人のリ
アルな様子だった。

「君、梅の弟でしょ？」

通報でかけつけた警察官の一人が話しかけてきた。

僕は見知らぬその男に返事をする。

「やつぱりだ。じいちゃんに聞いた通りだね。ふつつの顔してゐるわ。あつはつはつは」

男は笑いながら指を刺した。

「あの、失礼ですが……」

「あー、ごめんごめん。君たちに一度、家を貸したことがあるんだけどな。豪華でやたらふすまが多い家」

「ふすま・・・あー、丘の上の・・・」

かぐやと始めて撮影した時の武家屋敷か。

「そうそう。あれ、俺のじいちゃんの家。じいちゃん帰つて来たら猿が寝てたつて驚いてたよ」

「すいません・・・」

岩雄くんのことだな。

「でも確かあの日は家に誰もいなかつたような・・・」

「ちなみにじいちゃんは金持ちだけど趣味でコンピュータやってるんだよ」

「ああ・・・なるほど。あの時の・・・」

「あの辺、ど田舎でじいさんばあさんしか住んでないから若いカツブルなんて早々こないし、すぐ分かつたつてさ」

「おい、ちょっとといいか」

姉さんが別の警察官との話を終え戻つてきた。

「ああ、今行くよ・・・、あいつもよくこういう事件に巻き込まれるなあ。あの時も偶然事件に巻き込まれてそれつきり。同期があんなに早くやめてくなんて思わなかつたよ。じゃ、君にも後日話を聞くことになると思つから」

やつぱり男は姉さんの方へ走つていった。

「梅、災難だつたな」

「まあな」

「しつかし、何で古井沢は愛人役なんだ？普通主役が妻だろ」

「さあな、リアリティを追求したんじゃないのか」

「で、何だよ。お前と違つてこひちは忙しいんだぞ？」

「双子の方はどうだった」

「あー、何だかなーって感じだ」

「何だよ」

「んー、子役になるつてすゞく金かかるのな」

「は？」

「親は一人共働いてた。寝る間も惜しんで。それで最近では家にもあんまり帰つてなかつたみたいだ」

「そうか・・・」

「金を稼ぐ方に熱心になりすぎて、子供達との関係が疎かになつたんだな。子供にとつては残酷な話だよ」

「・・・」

この事件は良くも悪くもYU-ICAN-PARTYをまた有名にした。相変わらず色んなところから依頼が来るものの、姉さんはそれを一切受けないでいた。
いつもの気まぐれなのか。それとも・・・

「大和、どこに行つてたんだよ。腹減つたぞ、何か作れー」

「姉さん、聞いて欲しいことがあるんだ」

「なんだ?結婚なら許さんぞ」

「・・・僕は、ひなたの出る絵本を撮るよ

4、五話目（後書き）

4話目終わり、次のお話に続く

reason why(論書き)

全部フイクションです 全部関係ありません

reason why

昔話をしよう。

と言つても童話のようにむかしむかしあるといひになんて始まり方はしない。

昔のようじく最近の話。

遠いようで身近な話。

姉さんとひなたの過去の話。

湖蘭梅。

自らの名前をこの上なく嫌う女。

学生時代、やんちゃだった姉さんはそこいらの学生の中ではかなり名の知られた人物だった。

鬼神の梅。

並み居る猛者をなぎ倒すその残酷なまでの強さ。

戦場に立つ者から戦う氣すら奪つてしまつその眼光。

返り血すら体の一部と言わしめるほどの一気迫。

そんな姿を見て、敵味方問わず人は口々にこいつ言った。
美しい。

これが彼女が鬼神と呼ばれる由縁・・・だと良かつたんだけどね。

強かつたのは本当だよ。でもこれが元々の由来じゃないんだ。

正確には停学といつも謹慎の梅から派生してそうなつたらし
い。

謹慎の梅 きんしんのうめ 鬼神の梅

いつでも姉さんの周りにはこんなやつらしかいないのか・・・?
まあ喜んで呼んでいたのは周りだけで本人は己州の梅と呼ばれて
るみたいだと嫌がっていたつけ。

その頃の姉さんが唯一、人様に誇れた事。

姉さんの周りには常に人がたくさんいた。

先輩、同級生、後輩。

はたまた少し前までは敵だった人。

持ち前の親分肌というか、ただ面白おかしく神輿に乗せられていた
というか。

姉さんが何気なくやつていた弱いものを助けるっていうのが、どう
にも良かつたらしい。

自分も弱いものだった過去がある、実際に姉さんらしい行動が周りの
評価を変えていった。

常に仲間からは信頼を置かれている人だつた。

そんな姉さんが国家警察にリクルートされることになつた。

まあそこまでには色々あつたのだが・・・これはまた別のお話。
とは言つてもすんなり入れるはずもなく、例外なくテストはあつた。
もちろん勉強なんてこれっぽっちもしていなかつた姉さんがクリア
できるはずがない。

そこから一年、勉強の時間から睡眠時間まですべて管理され努力し
た結果、晴れて姉さんは国家警察官になつた。

これは余談だが姉さんは警察官になるための任命式の時、当時の上
官にフルネームで呼ばれて殴りかかり苦労して就いた職を初日で失
うところだつた。あの日は流石に呆れ果てたね。

新米警官が配属されたのは少し特殊な場所だつた。
同じ部署なのに顔を見たことのない人だつていた。
することと言えば来る日も来る日も訓練と見回り。
それでも姉さんの周りにはまた部署の垣根を越えて人が集まり始め
ていた。

そんなんある日、姉さんはいつもの見回り中に事件に遭遇する。

路地裏から何も身に着けていない少女が飛び出してきた。
髪はボサボサ、歯をガチガチと鳴らし足の裏を切つたのだろうか、
地面には鮮血が点々と続いていた。

辺りをキョロキョロ見回し、髪を搔き鳴らしながら悲鳴のよつたな声をあげる。

姉さんは思った。

この子を助けなくてはいけない。

25番。

それが少女の当時の名前。

少女には過去も現在もない。

そして未来もない。

自分が何故ここにいるのか、どうしてこんな扱いを受けているのか。すでに少女には思い出せなくなつっていた。

少女の周りには人がたくさんいた。

いや、人と言うにはおかしい気もある。

そこにいたのは少女と同じく、数字をあてがわれただけの物だった。

毎日毎日同じ事の繰り返し。

一日がいつ終わつていつ始まつているのか分からぬ。

感覚は消え、感情は溶けてしまつた。

そんなある日、入ってきたばかりの12番が少女に話しを持ちかけた。

一緒に脱走しよう。

少女は12番が何故自分にそんな事を言つたのか不思議でしうがなかつた。

氣弱な自分にそんなことができるのか。

もしかしたら12番はおとづらうに考えていたかも知れない。

そして時は來た。

12番の言つた通り、ドアが開いたままになつていた。

まずは12番が外に出た。次に25番の少女。

二人は久しぶりに外の空氣を吸つた。

あっけないものですぐに少女たちの脱走劇は終幕へと近づく。

追っ手に見つかり二手に分かれて逃げていた少女は遠くで12番の叫び声を聞いた。

次は自分だ。

必死になつて逃げた。途中踏んづけたガラスの破片で足の裏は切れている。

それでも彼女は痛みを感じなかつた。

神でも悪魔でもいい。何なら鬼だつていい。誰でもいいから私を救つて。

少女は助かるというやつと手に入れた希望を離さないようにしつかりと抱え込み、忘れかけていた恐怖という感情に震えながら足を前に進めるだけ考えた。

とある路地から飛び出るところにいたのは檻の中では見たことのない大人だった。

少女は思つた。

私を助けてください。

「どうしたんだ、大丈夫か！」

私は生まれたままの姿で走つてきた少女に着ていた上着をかけ、抱き寄せた。

「1・・・2番・・・」

抵抗することなく、体を小刻みに震わせながら少女が来た方の道を指差す。

「なんだ、12番つて。向こうに何かあるのか？」

ゆっくりと、しかし何度も頷く。

「ちつ、連絡はついたか？」

「今署にかけてるところだ」

偶然一緒にいた別の部署の男は険しい顔で電話口の反応を待つている。

私はいてもたつてもいられず、少女の髪を優しく撫でた。

「おい、いたか？」

すると路地の奥から知らない男の声と足音が近づいてきた。

恐らく一人じゃない。数名いる。

「くそつ、顔や体に傷でもついててみろ。俺たちが殺されちまうぞ」「あー、もう。あと一人はどこいったっ！」

声と足音はどんどんと大きくなる。

まずい、このままでは少女が男たちに見つかってしまう。

「おい、梅。ここは応援が来るまで退くぞ」

「ああ、・・・この子を連れてここから離れてくれ」

「お前・・・どうする気だよ」

「私は大丈夫だ」

「いや、大丈夫とかそういう事じゃなくてだな・・・ちつ、分かつたよ。そんな怖い顔すんな。無茶だけするなよ」

警官の服装をまとった男は少女を抱きかかえて、表通りの方へと走つていぐ。

ここでふうっと安心して一息でもつきたいところだがそもそも言つていられない。

コツコツと革靴の音が路地の硬いアスファルトに反響する。

ブルルルル

「はい、分かりました。・・・おい、一旦戻るぞ。捜索は中止だ」

その声を聞いて私は拳銃に添えていた手を離した。

男たちの後を追い、何の変哲もないビルの前へと辿りついた。

その廃ビルは周りの廃ビルとほとんど差異はない。

あるとすれば、目の前に止められている黒塗りのベンツくらいだ。足音一つが命取りになる。

私は細心の注意を払い、ビルの階段を登つた。

ビル内は閑散としていた。

雑誌や「ゴミ」昔使われていた机や椅子がそこら中に散乱している。

そしてある階についたとき、私は違和感を感じた。

この階だけ廊下の窓が破られていない。

心なしか壁に手が加えられ厚いように感じる。

私は息を潜めながら廊下を奥へ奥へと歩み始めた。

光が漏れている部屋が一つあった。

一つからは男たちがひそひそと小声での会話が聞こえてくる。
そしてもう一つの部屋。

気になるのは蛍光灯の光とは別の、一瞬ぱっと明るくなるような光。
それも先ほどから何度も何度も。

私は向こうの部屋にいる男たちに気づかれないようゆっくりビデオを開けた。

またも強烈な光に目がくらむ。

慌ててつむった目を慎重に開けた途端、私はその場で棒立ちになつた。

思わず口をついて出た言葉、

「お前は一体、何をしているんだ・・・」

何もない部屋の真ん中で裸のままステージの上に並べられた少女たち。そしてそれを嬉しそうに写真に撮る男。少女達の無表情とは対照的な下衆な笑みを浮かべる。

私はその顔を変形するほどに殴りたい衝動にかられたが、原因不明の震えが指一本動かす事を許さない。

男は私の存在に気がつき、声を上げた。

「な、なんだお前は！」

私の耳にはもう届かなかつた。

姉さんは他所の部屋にいた男たちにあつけなく捕まつた。

頭に銃をつきつけられ、殺される寸前だつたところをギリギリ駆けつけた応援に助けられ、すぐさま病院に運ばれた。

応援が駆けつけた時には黒塗りのベンツの姿はなく、ビル内の男の数も減っていた。

姉さんの口封じにも失敗し、すでに周りを警官に包囲された男たち

はあらうことが警官を巻き添えに自爆を図った。
ビルにあつた何もかもが吹き飛んだ。

犯人、あの部屋、顧客データの入つたパソコン。
檻にいれられたままの少女たち。

その後、姉さんは同じ病院に入つていたあの時の少女と再会する。
姉さんは当時使えたすべての力を使い、少女を養子として迎えた。
もちろん世間にばれるとまずい事もした。

だから姉さんはあつさりと警察をやめた。

晴れて無職となつた姉さんは弟の僕も巻き込んで絵本会社を作つた。
永久凍土の様な無表情を顔に貼り付けた少女を笑顔にするために。

これが僕らの episode
これが姉さんとひなたの昔話。

5、一括図（複数用）

全部ハイクションです 全部関係ありません

「何か言つたか？大和」
ソファーに寝転んだまま、視線はテレビの方へ向けせんべいをボリボリとかじりくつろいでいる姉さん。
それでも言葉にははつきりと聞いて取れるほど怒りが含まれていた。

テレビ画面からは、とつてつけたような偽物の笑い声が流れてくる。

「次の撮影、ひなたに役をつけるよ」
「は？ 私にはお前が何を言つてるか分からないな」

姉さんは手に持っていたリモコンでテレビの電源を落とした。
そしてよつやく僕の方を振り返りながら寝転んだ体を起こした。

「馬鹿だ馬鹿だとは思つていたけど、日本語まで分からなくなっちゃつたの？」

僕はその視線から逃れるよつてテレビに近づき、主電源を二回押してテレビを付け直した。

画面ではお笑い芸人の馬鹿馬鹿しいトークが続いていた。
「ははっ、ピスタチオか！ だつてさ。面白いね、姉さん」

しかし姉さんは僕の後方からリモコンを操作して画面を真っ黒にする。

「大和は知つてるだろ、ひなたがカメラで撮られる事を嫌つていて、その理由が何なのかも」

「うん、知つてるよ」
「それならどうして・・・っ！」

姉さんは振り返った僕の目を見て口をつぐんだ。
姉妹の意見のすれ違い。

今までなら絶対に弟である僕が一步引き、姉の意見を尊重していた。うちの場合、姉妹での可愛らしいチャンネル争いがエスカレートして弟の顔面が可愛らしくない形に変わってしまい、夕飯のおかずの

取り合いで、一週間病院の流動食以外が食べられない状態にされた前例がある。

過去の惨状を省みれば姉妹の間で意見の相違なんて起きるはずもなかつた。

しかし今回に限つては、僕も一步も引く氣はない。
じつと姉さんをにらみ返す。

姉さんはいつもと違う弟の心境を感じ取つたのだろうか。
いつもはどんなに無茶を言つたって付き従う弟が今回ばかりは自分の意見を聞こうとしない。

あろうことか牙をむぐ。

姉さんは思ったのだね、それはいけないと。弟とはすなわち姉の所有物。

いつ何時も姉につき従わなければならぬ。
絶対にこの反乱を許してはいけない。

そうなると姉さんはどうするか。弟を従わせる一番の方法、それは威嚇、あるいは武力行使。

負けじと睨み返す姉さんの目が鋭くなる。

「それにこれはある人からの依頼なんだ」

「はつ、誰がそんな依頼を出すつて言つんだよ。それにそんな依頼、私は受けける気ないね」

「ごめん姉さん、もう受けた」

「・・・何を勝手な事してんだ」

その言葉を受けて姉さんの眼光がよけいに凄まじくなつた。
じりじりと弟と姉のにらみ合いが続く。

そのままどれくらいの時間が経つただろうか。

コンビニで買つてきた三つの肉まんは袋の中で冷めてしまった。
いいかげんにらみ合つたつぱりし、痺れをきらせた姉さんが動いた。

僕の胸倉を掴んで、天井へ拳を突き上げた。

「お兄ちゃん?」

タイミングが良かつたのか悪かつたのか、殴られる寸前にひなたが部屋に入ってきた。

姉さんは視界の中にひなたの姿を見つけると振り上げた拳を下げ、僕の体を離した。

そして何事もなかつたかのように、部屋を出て行こうとする。

「姉さん！」

「ちつ・・・勝手にしろ。・・・その代わり、ひなたに何かあつたらお前が責任取るんだからな」

ばたんと荒く閉めたドアの音が部屋中に響いた。

さざ波が押し寄せては帰つていく。

ピークをとつぐに過ぎた海岸には僕ら以外、人っ子一人おらず夏の盛況ぶりは見る影もなかつた。

遠くで大型船が汽笛を鳴らしながら海の上の走つていく。

「私も大和を浮かべて、他所の国へ行つてみたいなあ・・・」

黄昏ながら、えらくぶつそうな事をつぶやく姉さん。

そもそも大和が活躍するのは海じゃなくて宇宙だ。

「頭の中がからつぽな姉さんを浮かべた方がよっぽど浮きそうだけどね」「なんだとー？」

寒空の下、結構な薄着の姉さんがじやれついてくる。

その隣には白衣マフラーを首にかけたかぐやがひなたと寄り添つて体を温めていた。

「うちの子をカイロ代わりに使つな」

「うう・・・ひどい大和くん。だつてひなたちゃんとっても暖かそうなんですか」

「知らん。どちらかと言えばお前の方がブクブクと太つて暖かそうじゃないか」

「ひう、ひどいです！これは着込んでるからで、私は全然太つてしま

せん！！」

顔を真っ赤にして両手で僕の胸の辺りをぽかぽかと叩くかぐや。

「あー、はいはい」

「うう・・大和くん絶対信じてません・・・。それなりに
そう言つてかぐやは着ていたジャンバーに手をかけた。

「どうですか？一枚脱ぐだけでこんなに」

「あんまり変わらないだろ」

「それなら・・・」

かぐやはもう一枚、上着を脱いで見せた。

「これで！」

「んー・・・微妙」

「ううう・・・もうこれ以上は寒くて脱げません」

鼻水をたらしながら涙目になるかぐや。

「あんまりかぐやで遊んでやるな。あ、そういうえば私の台本、オチのページが抜けてたぞ？」

そういうつてひらひらと台本を振り回す姉さん。お陰で正面にいる僕に冷たい風が来るのでやめて欲しい。

「お久しぶりです」

その時ちょうど最後の撮影メンバーである岩雄くんが走ってきた。

「おう、猿」

「久しぶり、見違えたよ。ずいぶんと・・・何ていうか・・・変わったね」

一言で表現すれば丸くなつた。

表情がとか、頭を丸めたとかでなく、文字通り体型が球体に近い。前までは身長が高く手もすらつとしていて、顔以外はナナフシみたいな印象だったけど、久しぶりに会つた岩雄くんはどちらかといえば線というよりは橢円で、「リラみたいな猿顔を考慮すれば三人組アイドルの一人だけ自分の名前にちゃん付けしている人みたいになつてしまつていた。

「色々あつたんす・・・」

「色々？」

「彼女関係でちょっと・・・」

いつきに顔色が悪くなり、今にも海に身を投げそうなテンションになる岩雄くん。

まあどれだけ暗かろうが岩雄くんは猿顔だし、ここまで海の似合わない顔もないだろうと関心すら覚える。

「聞いていいのか分からぬけど・・・何かあつた?」

恐る恐る訳を聞く。

「彼女と別れました・・・っていうか逃げ出しました」

「逃げた?」

「ええ・・・実は彼女のサドつ気がエスカレートしまして・・・ムチでは足りないって色々と・・・」

「うわあ・・・」

「色々あつた中に絶食っていう攻めがあつて、そのストレスで急激に痩せたんですよ。流石に命の危険を感じて逃げ出したんですけどその反動で今では・・・」

「大変だつたね、よく頑張った」

謂れのない暴力を受け続けた岩雄くんに何処か自分と近しい物を感じながら、僕は両肩を力強く叩いてあげた。

「知つてましたか、大和さん。歯磨き粉つて食べられるんすよ・・・」

「うん、知つてる」

5、II話題（記述文）

全部マイクションです 全部関係ありません

岩雄くんも合流したところで、僕らは眼前に広がる砂浜を歩き始めた。

見渡す限り砂浜には人の足跡がなく、僕らの後ろにだけそれができあがつていく。

ぽつぽつと落ちている「ゴミ」は賑やかだった夏の頃からずっとあそこで海を眺めているのだろうか。

そういうしていのうちに今は休業中の海の家に到着した。僕はこの店のオーナーから渡された鍵を使い、裏口から店内に入り、正面のドアの鍵を開けた。

「うひゃー、暗いっすねー」

姉さんとかぐやの分の荷物も抱えた岩雄くんが入ってくるなり口を開いた。

重そうに背負っていたリュックサックや手提げ袋を乱暴に机の上に置く。

「店を閉めて以来、誰も入っていないそうだからね。多少・・・ゴ

ホツ

岩雄くんが荷物を下ろした時に舞い上がったホコリで咳き込んでしまった。

なおも目に見えるほどのホコリが狭い店内で渦巻いている。

「クチュン・・・すごいホコリですぅ・・・」

続いてかぐやがハンカチで口と鼻を覆いながら入ってきた。

「あれ、姉さんとひなたは？」

「お姉ちゃんたちはもう少し海を見てるって

「・・・ふーん」

僕はそつけない返事を返した後、店内の電気のスイッチを探した。

「お、よかつた。ちゃんと電気はついた」

明かりがともり、一気に気分も明るくなる。

僕は待つてましたと言わんばかりに岩雄くんが背負つてきた大きな荷物の中から電気ストーブを取り出し、コンセントにつないだ。

「ちょっと待つてください、大和さん」

そう言って岩雄くんが厨房の奥から持つてきたのは水の張った青いバケツ。

「この小屋、どこもかしこもホコリだらけなんで自分が換気をかねた簡単な掃除をしどきますよ。小さい子や女性もいますから」これまた奥から取つてきた雑巾をバケツの水にひたし、ぎゅっとしほる。

そのまま机やら椅子を端から丁寧に磨き始めた。

「わ、私も手伝います！」

かぐやが慌ててもう一枚の雑巾ごと手をバケツの水の中へとつけた。

「つべたいですぅ・・・つづり」

泣くぐらいなら立候補しなきゃいいのに。

「大和さんは梅さん達のところで一緒に海でも眺めてきて下さい」と岩雄くんが言うので正直嫌だった水雑巾での掃除を免れ、浜辺へ出た。

「さぶつ、こっちも壁がない分、寒いじゃないかよお」

ボヤきつつ、海を眺めてぽつんと立ち尽くす一つの影に近寄つていく。

姉さんとひなたは手をしつかりとつないだまま、水平線の向こうを見つめていた。

「ひなた、驚かないで聞いてくれ。実はお前の兄であり私の弟である大和は昔・・・海賊だつたんだ」

「海賊？」

「おおい、何真顔で娘に嘘吹き込んでんだよ

僕は慌てて二人の話に割り込んだ。

「何だ大和いたのか。今、お前が奇妙な実を食べてから耳と手足の小指だけがガムのように伸びる気持ち悪い人間になってしまったお

話をしていたところだ。沖で怪獣に襲われそうになつたところを自らの頭皮を犠牲にして助けてくれた恩人の話は自分の口からひなたにしてやつてくれ

「しない、しないよ。そんな恩人もいなければそんな眉毛の形ねえよつていう「ツクもいない」

「あれ、じゃあ里を裏切つた忍者の話は?」「せめて海賊にしてよ

僕もひなたの隣に並んで海へ手をやつた。

「ん」

ひなたが手を僕の方へ差し出す。

小さな手はこの寒さで真っ白になつていた。

「何て言つんだっけ?」

「つないで?」

「うん」

ポケットに突っ込んでいた右手を出し、冷え切つた手を握つた。

「どこか遠くの国へ行きたいなあ・・・

自由に飛んでいく鳥を見つめながら姉さんが呟いた。

「何に行くのさ。何処の国へ行つたって姉さんの馬鹿は不治の病だから治せないよ?」

「女が海外に行きたい理由なんてたくさんあるけどさ、私の場合あれ一つしかないだろ」

僕の回答をにやけ顔で待つ姉さん。

たくさんどころか一つも浮かんでこない。

「・・・高飛び?」

「違うわ。昔の男に会つためだよ

「男・・・?ああ、なるほど?」

僕は姉さんの顔を見ながら頷いた。

「父さんのことか。姉さんの知り合いで海外にいるのって父さんと母さんくらいだもんね」

「私の学生時代の知り合いは国外でいかか実家も出でていない馬鹿ばかりだからな」

「人のこと言えないでしょ・・・」

「まだに実家暮らしで弟に家事を任せてる姉さんは何だつて言つんだよ。」

「男なんて言うから誰かと思えば、ファザコンはまだ完治してなかつたの?」

「私たちはお互いの裸を見せ合つて居る仲だぞ?」

「何歳の時の話だよ」

「私は今でも見せ合つてをしたじぞ」

「勘弁してください」

「はあ・・・」

「無言のまま何度もため息をつく姉さん。

「珍しく悩んでるの?」

「・・・さあな」

古井沢事件以来、姉さんがしみつたれた顔でボーッとする事が日に日に増えた。

ひなたも僕も姉さんのため息を嫌つてほど聞かされ、悩みの理由を聞こうとしてもこの通り何も言おうとしない。

馬鹿で明るい事だけがとりえの姉さんが暗くなると僕達まで調子がくるつてしまいそうだ。

「姉さんがため息をつくなんて明日は雪かな?」

「・・・さあな」

「姉さんが悩むなんて明日はyesterdayかな?」

「・・・」

「yesterdayは昨日だったー、あつはつはつは」とすると姉さんはひなたの頭に両手を添えて、耳を塞いだ。

「覚えてるよな、大和。もし」の撮影で・・・」

「分かつてるよ」

「・・・信じても・・・いいんだな？」

「うん」

「・・・そりか」

姉さんは最後に大きく息を吐き出し、さつぱりとした顔で笑った。

「よし、分かった。うー寒い、早く小屋に戻るぞ」

ひなたの耳から手をどけ、横に並ばせて手を繋いだ。

「よかつたな、ひなた。大和が責任とつて結婚してくれるつてよ

「ええ！？」

どうしてそうなつた！

いきなり投げ込まれた爆弾に思わずたじろいでしまつ。

「結婚？」

ひなたは状況がつかめず、首を横にかしげた。

「ちょっと姉さん！」

「ひなた、あの家まで競争だー！」

「ん」

二人は元気に走つていつてしまつた。

「あつたけー」

全員で一つの電気ストーブを囲む。

小さくとも浜辺で冷え切つた体を温めるには十分だつた。

僕らが小屋に戻ると岩雄くんとがぐやは掃除を終えていた。
見違えるほど綺麗になつた椅子にゆつくりと腰を下ろす姉さんとひなた。

「よかつたな、かぐや。花嫁修業が役に立つたじゃないか」

「花嫁修業？」

ひなたが知識がない単語に反応した。

花嫁修業とは何だろうと田を丸くして姉さんの顔を見る。

「ちょ、ちょっとお姉ちゃん」

かぐやは焦つた様子で姉さんに言い寄つた。

「恥ずかしがるなよ。花嫁修行つてのは何をする事かひなたに教え

てやつてくれないか。瓦割りか？滝にうたれるか？私と手合わせするか？ん？ん？」

「こいだとばかりに嬉々としてかぐやをからかう姉さん。
「やめときなよ、熊と戦うなんて勝ち目ないって
「おい、今私の事をナチュラルに熊にしたか？
「いや、どうだろ・・・」

僕は姉さんの振り上げた前足を見逃さなかつた。

5、因縦図（前書き）

全部ふいぐょんです 全部関係あつません

どんよりとした曇り空からは今にも雨粒が落ちてきそうだ。海と空の境界線はくつきりと浮き上がり、灰色の空は今にも落ちてきそうなほどに低く感じた。

身を引き裂くような冷たさの風が海から吹きつける。僕は淡柿色の木綿の着物に着替えたひなたの手を引きながら砂浜を歩いた。

「ひなた大丈夫か？ 何か言いたい事があれば言つんだぞ？」

「ん」

ひなたは静止画を見ていたのかと錯覚しそうなくらいに顔の表情を変えず、僕に返事をした。

しかし表情には出でずとも、歩くスピードは少しづつ少しづつ遅れていく。

ひなたがまだこの撮影について決断できずに、悩んでいるんだとすぐ分かった。

我が家の女性陣は肝心な時に言葉が足りないな。

「やめるなら今だよ。今やめたって、僕や姉さん含め、誰もひなたを攻めたりしない」

腰を曲げてひなたの顔の位置まで自分の顔を降ろし、優しく告げた。

「・・・」

黙つたまま僕の顔を見つめるひなたの目がいつもより弱弱しく見えた。

辺りは風が吹く音と時折風で飛んでいくビニール袋の音しか聞こえない。

ひなたの小さな心中で、今何を思っているんだろう。もしかしたら逃げ出したいかも知れない。無理をしているかも知れない。それでも口を一文字に結んだままじっと僕の顔を見つめ続けるひなた。

「よし、ひなた手を出してみて

僕は着物の袖から少しだけ出た「じんまりとした手を胸の前に持つてくる。

「おまじないを教えてあげよう。手に入つて文字を二回書いて飲み込むと緊張がほぐれる・・・らしいんだけど、姉さん曰く入つて文字は×に似てるから縁起が悪いんだって。だから姉さんは手に を三回書いて飲み込むらしいんだ。やってみるよ?」

僕はひなたの手のひらに指で円をぐるぐると書いた。

「ん、くすぐつたい」

ひなたは思わず手を引き戻した。

「どう? 元気出たでしょ。まじないの効力も馬鹿な姉さんが難しいテストに合格したくらいだから信じていいと思うよ」「手を着物の中に隠してしまったひなたに微笑みかけた。

「ん」

ひなたは一文字だけ返事をし、僕をその場に置いたまま歩き始めた。

「最初のシーンはひなただけだろ? 寒いから出たくないし一人だけで撮つてこいや」

と言われたので一人で小屋を後にした。

「自分もお供しますよ、大和さん」

「わ、私も行きますう」

「お前らはこっちで私とプロレスだ。バトルロワイヤル時間無制限一本勝負、どつからでもかかつてこい」

といきなり始まったエキシビジョンマッチは放つておくことにした。ちなみに今回、僕には演技の役がなく、変わりにカメラマンという大役に就任した。

姉さんにカメラを借り、セッティングも自分で覚えた。

借りといて悪いが姉さんよりうまく撮る自信があるぞ。

「・・・」

まだ迷つているようだ。

できればひなたが納得してから撮りたいのだけれど、どうにも踏ん切りがつかないらしい。

「どうする？ 一度姉さんのところへ戻る？」

「・・・撮つて」

決心を固めたひなたはお面のように無表情を顔に貼り付けていたもの、声色に力強さを感じた。

僕はひなたの心が揺らぐ前に急いでカメラのセッティングを進める。すぐに撮るからね。どうしても駄目だつたら言つて

「ん」

ひなたの着物を整え、カメラの前に立つた。

「それじゃあ、撮るね」

カメラを構える指がかすかに震える。

本当に僕はこのシャッターを降ろしていいのだろうか。考えている間も口だけは動く。

「3・2・1」

フラッシュの光が寒空の下、一瞬だけひなたを包み込んだ。

「・・・」

「念のためもう一枚、3・2・1」

撮り終えると僕は急いでカメラから離れ、ひなたの元へと向かった。よかつた、泣き出さなかつた。よく頑張つた、ひなた。

そう思つたのもつかの間、ひなたの様子がおかしいことに気がついた。

ひなたの口からたらりと真っ赤な血が垂れ、そのまま砂浜に赤い点となつて落ちた。

「どうしたんだ、ひなた！？」

慌てて両肩に手を置いた時、すべての理由が分かつた。

ひなたは全身の筋肉を緊張させ、小刻みに震えていた。

無表情のまま、嗚咽も吐かずに自分の口の中を噛んで必死に耐えている。

鼻息は荒く、まばたきの回数も多い。

「よく頑張ったな、もういいんだ。だから力を抜いてくれ、ひなた」
僕はひなたを抱きしめ、背中を何度も何度も摩つた。
肩越しに蚊の鳴くようなつめき声を聞こえ始め、最後にはわんわんと大声を出して泣いた。

ひなたが泣き止む頃には僕らが歩いてきた足跡は風で消えてしまつていた。

「ただいまー」

「あ、お帰りなさいっす。どうして裏口から？」

「いや、まあちょっとね。それよりストーブ借りていいかな？」

「どうぞどうぞ。ちょうど汗をかくくらい温まつたところですから」

岩雄くんはコンセントを抜き、電気ストーブを手渡した。

そこでキョロキョロと僕の周りを見回し、

「あれ、ひなたさんは・・・？」

と少し遠慮気味に聞いた。

「奥の部屋で少し休んでるよ。ん、ストーブありがと」

「タタタターン、タタタターン、タタタターン、タタタターン、タタタターン、I LOVE」

「姉さん、鼻歌で結婚式の入場曲を歌うのはやめてよ」

買つておいたお菓子をボリボリと食りながら姉さんが奥の部屋から現れた。

「披露宴の出し物何にすつかな

「気が早いよ、馬鹿」

「新婚旅行にもついていくぞ。もちろん行き先は海外だよな？」

「父さんに会いに行きたいからつて旅行先を勝手に決めるな、ファザコン。・・・そう言えばプロレスは決着ついたの？」

かぐやが机につつぶしたまま動かないでの、心配になり姉さんに尋ねた。

「ああ、猿雄の全戦全勝だ」

「本当に？」

これはまた意外な。かぐやはともかく姉さんが腕つ節で負けるとは思わなかつたなあ。

「違う違う。あの後、かぐやは競技をプロレスから平和的な競技に変更したんだよ」

「平和的な競技? 何それ」

「マジサルバナナ」

「・・・じゃあ何でかぐやは倒れてるの?」

「勝てなくてイライラした私が絞め落とした」

「あー・・・(この場にいなくてよかつた)」

さつきと同じ場所に三脚を立て、カメラをセットする。

「ひなたを置いてきてよかつたのか?」

姉さんがカメラをいじっている僕に手を伸ばし肩を組んでくる。

「小屋には若雄くんもいるし、ひなたも疲れて寝ちゃつてたからね

「目覚めて大和がいないと新婦は悲しくて泣いつけつぞ?」

「新婦が誰で、新郎は誰の事を言つてるの?」

「妊婦は」

「おおい、それは洒落にならないよ」

「できちやつてたら婚だな。大和が疲れるまで寝かさないからある

「いは・・・」

「あのう、何の事ですか?」

気絶から回復するなり、服を着替えさせられ撮影にのぞんでいるかぐやはきょとんとした表情で首をかしげた。

「かぐやは知らない方がいい、知らない方がいい」

姉さんは顔の前で手を左右に振り、憎たらしい笑顔を見せる。

「それにしても姉さんは鬼の衣装が似合ひすぎ

「そりだらあ?」

鬼の角のついたカチューシャを嬉しそうに振り回す姉さん。

全身タイツ一枚で、見ていてこっちが寒くなつてくるほど薄着なのにそれを物とせず、相変わらずの豊満な胸を見せびらかしながら

らスキップをする。

「これだけ似合つちやうと私は本物以上に鬼だな。 そうだ、 本物以上の鬼と鬼ごっこするか？ 何だつたら色鬼でも氷鬼でもいいぞ？」

「嫌だよ、 雪が降りそくなくらい寒いのに、 喜んで走り回れるのは犬と姉さんくらいなものだよ」

「ひなたをお前に売つてやう。 これが本当のこじらおに」

「3点」

「ちくしょう、 じゃあじやあ。 ケイドロしようぜ！」

「姉さんが本物の以上の鬼である必要がなくなつちやうじやないか。 鬼との争いから人間同士の争いになつちやつてるよ」

「何を言つ。 本当の鬼は人間の心の中にこそ・・・」

「そういうのいらないから。 じゃあ逃げ回る元氣のある姉さんがドロだね」

「私がケイに決まつてるだろ。 しかもケイはケイでもつやまつと書いて敬だからな。 ほら、 崇めろ」

「意味わかんないし、 何で偉そつなんだよ」

「くそ、 何だか桃太郎に受けたあの日の屈辱を今返したくなつてきた」

「あの日、 桃太郎と猿を一方的にボコボコにした鬼の中の鬼が何を言つか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8717y/>

smile

2012年1月5日18時51分発行